

溝原貝塚2

－市道山手線街路事業に伴う溝原貝塚緊急発掘調査－

平成27年（2015）2月

名護市教育委員会

序 文

本書は市道山手線街路整備事業に伴い、平成25年度に実施された溝原貝塚の緊急発掘調査の成果をまとめたものです。

現在、名護市には約80ヶ所の遺跡及び遺物の散布地が確認されています。溝原貝塚もその中の一つの遺跡ですが、これら埋蔵文化財は地上で目にすることのできる天然記念物や建造物、民俗芸能などの文化財とは異なり、地下に埋蔵されているためその存在と価値が認知されにくい性質をもっています。しかし、他の文化財と同様にその地域の成り立ちや文化を考える上で必要不可欠なものなのです。今回の調査においても、地中を掘り起こして初めて分かったことがあります。

遺跡調査では、想定した年代を遡る遺物の出土、埋葬獣骨や近代の国頭郡役所と関わる遺物の発見など、私たちの祖先の生活を考察する多くの貴重な発見がありました。

これらの成果をまとめた本書が名護地域や名護市の歴史を知る上で貴重な資料として活用されるとともに、文化財保護への理解を深める一助になれば幸いです。

末尾に、本事業を実施するにあたり多くの方々にご協力をいただきました。特に、埋蔵文化財の記録保存にご理解・ご協力をいただきました名護市建設部、東江区及び名護博物館の皆様には大変お世話になりました。深く感謝を申し上げ、刊行のあいさつとします。

平成 27(2015) 年 2 月

名護市教育委員会
教育長 座間味 法子

例　言

- 1 本報告書は、平成25年度に実施した市道山手線街路整備に伴う溝原貝塚緊急発掘調査の内容を記録したものである。
- 2 発掘調査は市道山手線街路事業に伴うもので、事業主体者である名護市建設部と名護市教育委員会で覚書を交わし、名護市教育委員会文化課文化財係が実施した。
- 3 現場における発掘調査は平成25年6月24日から平成26年2月28日まで行った。
- 4 本報告書に掲載した航空写真は沖縄県立公文書館が収集・保管している昭和20年(1945)2月28日に、米軍が偵察用に撮影したものである。沖縄県立公文書館の承認を得て掲載した。
- 5 発掘調査体制については、第1章第2節に記す。
- 6 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行1/50,000、1/25,000地形図と名護市役所発行の地形図を使用した。
- 7 溝原貝塚の発掘調査にあたり、現場における遺構解釈や資料整理作業における遺物の同定など、下記の方々のご指導・ご協力をいただいた。記して謝意を表す。
安里進、家田淳一、小畠弘己、新里貴之、高宮広土、田里一寿、樋泉岳二、眞鍋彩、與嶺由紀也、渡辺芳郎(敬称省略、五十音順)
- 8 本書の作成にあたり、執筆は下記のように分担した。
宮城弘樹(第1章第1・2節、第2章、第3章第2節、第4章、第6章)
宮城智浩(第3章第3・4節)
千田寛之(第1章第3節、第3章第1節、第4章、第5章第1節・2節)
真栄田義人・寄合龍己(第4章)
小畠弘己(第5章第1節)
パリノ・サーヴェイ株式会社(第5章第3節)
樋泉岳二(第5章第4節)
- 9 発掘調査において得られた出土資料及び実測図・写真などの記録は、すべて名護市教育委員会文化課文化財係にて保管している。
- 10 本報告書に掲載した遺物の掲載番号は、地区毎に連番を付した。具体的にはⅠ地区は1001、Ⅱ地区は2001、Ⅲ地区は3001からとしている。図、図版ともにこれを掲載番号とする。

目 次

図目次	2
表目次	2
巻末図版目次	3
沖縄本島及び名護市の位置図	4
 第1章 調査経過	
第1節 調査の経緯	5
第2節 調査体制	7
第3節 調査経過	8
 第2章 名護市の位置と環境	
第1節 名護市の位置と概要	9
第2節 東江地域の地理的環境	9
第3節 東江地域の歴史的・文化的環境	9
 第3章 調査の方法	
第1節 溝原貝塚の位置と概要	13
第2節 調査区の設定	14
第3節 平成24年度試掘調査概要	16
第4節 平成25年度試掘調査概要	17
 第4章 調査の成果	
第1節 I地区の調査成果	20
第2節 II地区の調査成果	43
第3節 III地区の調査成果	53
 第5章 自然科学分析の報告	
第1節 溝原貝塚出土土器の圧痕分析報告	60
第2節 溝原貝塚出土の植物遺体分析報告	68
第3節 溝原貝塚における放射性炭素年代測定	72
第4節 溝原貝塚出土の埋葬獣骨に関する分析報告(暫定結果)	75
 第6章 総括	
	83
図版	87
報告書抄録	100

図目次

第1図 沖縄本島および名護市位置図	4	第40図 Ⅲ地区出土遺物2	59
第2図 名護市の遺跡分布図	6	第41図 土器圧痕・レプリカSEM画像1	63
第3図 1945年の名護市街航空写真	10	第42図 土器圧痕・レプリカSEM画像2	64
第4図 東江集落民俗地図	11	第43図 NNMK-339 土器X線CT画像1〈Y軸断層面〉	65
第5図 溝原貝塚周辺の遺跡及び地形図	13	第44図 NNMK-339 土器X線CT画像2〈Y軸・X軸断層面〉	66
第6図 調査区及び試掘調査区配置図	14	第45図 NNMK-339 土器潜在圧痕3D復元画像(1-8) およびアワ有ふ果模式図	67
第7図 平成24年度試掘調査断面図	17	第46図 溝原貝塚出土の植物遺体	71
第8図 平成25年度試掘調査断面図	19	第47図 暦年較正結果	73
第9図 I地区遺構配置図	21	第48図 獣骨出土状況	82
第10図 I地区基本層序図	23	第49図 溝原貝塚周辺の土地利用変遷模式図	85
第11図 SB01 遺構詳細図	24		
第12図 獣骨埋葬土坑平面図	26		
第13図 SL34およびSL35 遺構詳細図	27		
第14図 SL34出土遺物	27		
第15図 SL43からSL47の土坑炉群遺構詳細図	28		
第16図 SK11/SK11-2 遺構詳細図	28		
第17図 SK11-1/SK11-2出土遺物	29		
第18図 SK57 遺構詳細図	29		
第19図 SK57/SK57-1出土遺物	30		
第20図 SK90 碓集中出土状況	31		
第21図 SK90出土遺物	31		
第22図 SE91出土遺物	34		
第23図 I地区遺構覆土出土遺物	35		
第24図 I地区出土遺物1	36		
第25図 I地区出土遺物2	37		
第26図 I地区出土遺物3	38		
第27図 I地区出土遺物4	39		
第28図 II地区遺構配置図	43		
第29図 V/W-55/56 遺構詳細図	45		
第30図 V/W-55/56 グリッド出土遺物	46		
第31図 T-52 東壁断面図	47		
第32図 T-52出土遺物	47		
第33図 T-55 遺構詳細図	48		
第34図 T-55出土遺物	49		
第35図 T-57/58 遺構詳細図	49		
第36図 T-57/58出土遺物	51		
第37図 Ⅲ地区遺構配置図	53		
第38図 SD131-1 遺構詳細図	55		
第39図 Ⅲ地区出土遺物1	58		

表目次

第1表 東江(溝原貝塚周辺)の主な出来事	12
第2表 平成25年度試掘調査出土遺物一覧	18
第3表 I地区出土遺物集計表	33
第4表 I地区遺物観察表(1)	40
第5表 I地区遺物観察表(2)	41
第6表 I地区遺物観察表(3)	42
第7表 II地区出土遺物集計表	44
第8表 II地区V/W-55/56遺構所見表	45
第9表 II地区T-55遺構所見	48
第10表 II地区T-57/58遺構所見	50
第11表 II地区遺物観察表	52
第12表 Ⅲ地区遺構所見表	54
第13表 Ⅲ地区出土遺物集計表	56
第14表 Ⅲ地区遺物観察表	59
第15表 表出圧痕一覧	61
第16表 植物遺体集計	71
第17表 放射性炭素年代測定結果	73
第18表 埋葬獣骨の概要(暫定結果)	76
第19表(1)埋葬獣骨の同定結果(1号獣骨)	77
第19表(2)埋葬獣骨の同定結果(2号獣骨)	77
第19表(3)埋葬獣骨の同定結果(3号獣骨)	78
第19表(4)埋葬獣骨の同定結果(4号獣骨)	78
第20表 ブタ頸骨の詳細	79
第21表 各獣骨の出土部位表	79
第22表 ブタの計測結果	79

図版目次

図版 1 調査区および周辺の状況	87
図版 2 I 地区調査状況	88
図版 3 I 地区調査状況	89
図版 4 II 地区調査状況	90
図版 5 III 地区調査状況	91
図版 6 I 地区出土遺物	92
図版 7 I 地区出土遺物	93
図版 8 I 地区出土遺物	94
図版 9 I 地区出土遺物	95
図版 10 I 地区出土銃剣	96
図版 11 II 地区出土遺物	97
図版 12 II 地区・III 地区出土遺物	98
図版 13 III 地区出土遺物	99



第1図 沖縄本島および名護市の位置図

第1章 調査経過

第1節 調査の経緯

溝原貝塚は、昭和54年(1979)～昭和56年(1981)に実施された「名護市遺跡分布調査」で確認された遺跡(1980年7月8日)で、確認当初の時代は沖縄貝塚時代後期である(名護教委1982)。

名護市名護溝原の海岸砂丘地にあり、現在では名護博物館(名護間切番所跡・旧名護市役所)から東江公民館付近にかけて立地する。標高は約3mで、海岸線よりおおよそ500m内陸に位置している。周辺にはナングシク・名護貝塚・アパスク貝塚等の先史、原史時代の遺跡が10ヶ所程分布しており、名護湾をひかえたこの一帯が当時好適な生活環境であったことが窺える(第2図)。本貝塚は沖縄貝塚時代後期の遺跡であることは、昭和56年(1981)の試掘調査や昭和59・60年(1984・85)年度に実施された緊急発掘調査等により以前から知られていた。

今回、市道山手線街路事業に伴い予想範囲内の開発事業が計画され、平成23年8月3日付け名建土第432号で名護市建設部から名護市教育委員会に対して「文化財の有無の確認について(照会)」が提出された。平成23年8月8日付け名教委文第138号にて「文化財の有無の確認について(回答)」する。

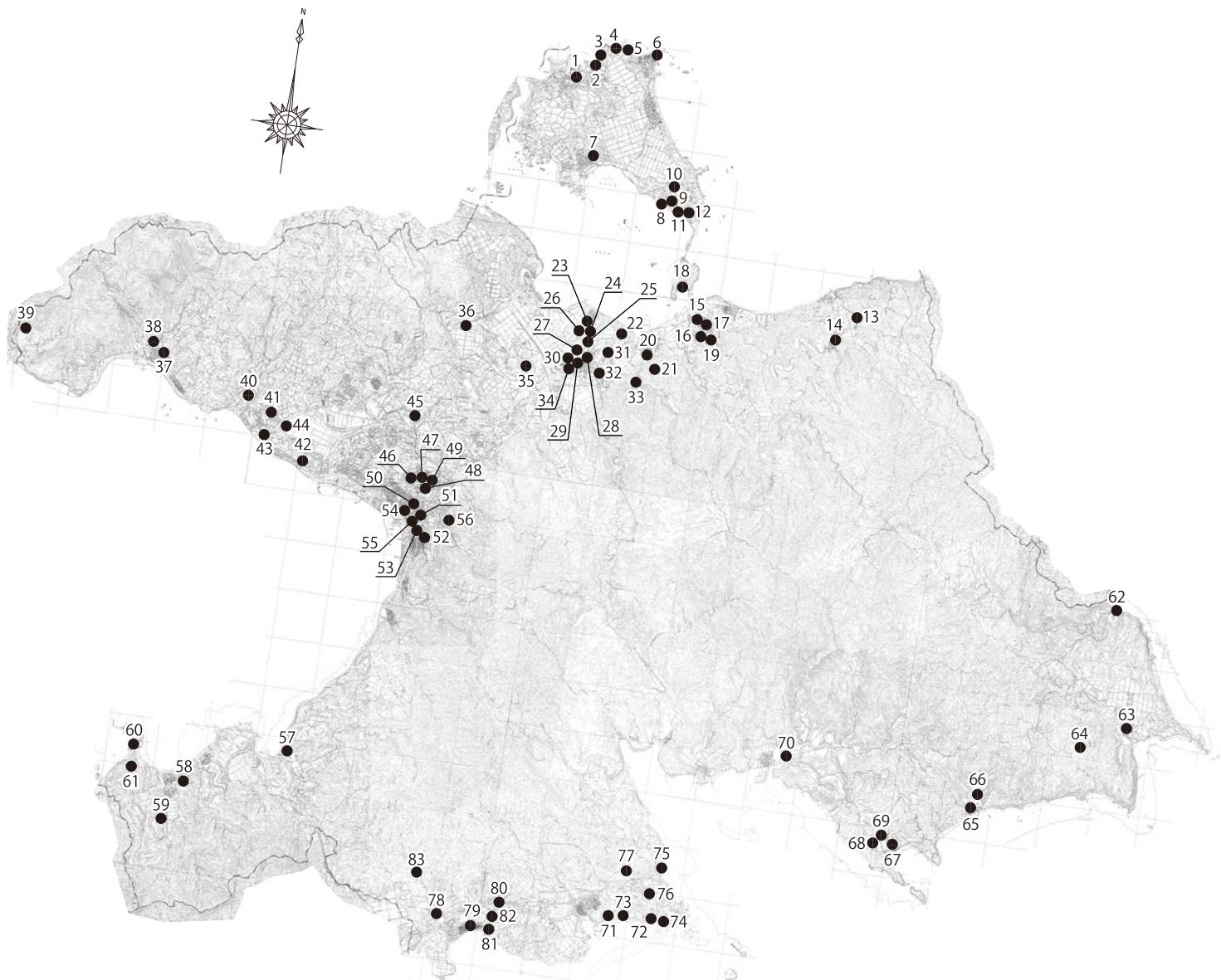
協議を経て、遺跡の予想範囲内での土木工事が避けられないことから、平成24年11月13日付け名建土第587号で、「埋蔵文化財発掘の通知について」が提出され、平成24年12月5日付け名教委文第1491号で「周知の埋蔵文化財における土木工事等について(通知)」があり、平成25年6月14日名護市と名護市教育委員会で「溝原貝塚発掘調査に関する協定」を締結、同年6月21日に「溝原貝塚発掘調査に関する覚書」を締結し記録保存調査に着手する。

なお、道路整備の事業主体は名護市(建設部建設土木課公園街路係[平成25年度当時])、発掘調査主体は名護市教育委員会(文化課文化財係)である。

調査が進む中で、当初調査対象地域西側については遺跡の予想範囲の外にあったが、平成26年1月の試掘調査の成果に基づき、平成26年1月14日一部遺跡範囲の変更を行った。

さらに同月、溝原貝塚発掘調査に係る調査費面積及び調査費の変更について協議を行い、平成26年2月24日に平成25年度溝原貝塚発掘調査に関する変更覚書を締結し、当初調査の範囲等の変更を行っている。現場での調査を平成26年2月28日で終え、3月4日に平成25年度業務を完了する。

平成26年度業務は資料整理業務を実施し、平成27年2月に本報告書を刊行し、今回の緊急発掘調査の全工程を終えている。



屋我地地区	
1	運天原サバヤ貝塚
2	タキギター河口遺物散布地(仮称)
3	済井出長佐久貝塚
4	大堂原貝塚
5	ハンタジー遺跡(仮称)
6	大堂浜遺物散布地(仮称)
7	饒平名シマヌハー御獄遺跡群
8	ナンマー貝塚
9	アマグシク東方遺物散布地(仮称)
10	屋我グシク遺跡群
11	墨屋原遺跡
12	墨屋原浜崎遺跡

羽地地区	
13	瀬洲村跡遺跡
14	源河大グシク遺跡
15	真喜屋平田遺物散布地
16	真喜屋阿社義遺物散布地
17	阿波茶部遺物散布地
18	奥武原遺跡
19	上之御獄遺跡
20	川之上遺跡
21	ウフ御嶽土器出土地(仮称)
22	仲尾次上グシク遺跡
23	仲尾古村遺跡
24	親川グシク遺跡(羽地グシク)
25	羽地間切番所跡
26	仲間遺跡
27	田井等遺跡
28	ヤトバラ殿遺跡
29	デーグシク遺跡
30	フガヤ遺跡
31	谷田遺跡
32	川上遺跡
33	親グシク遺跡
34	振慶名遺物散布地(仮称)
35	伊差川古島遺跡
36	古我知焼窯跡

久志地区	
62	有津遺跡
63	天仁屋原遺跡
64	ハサマ遺跡
65	嘉陽貝塚
66	嘉陽原遺跡
67	安部貝塚
68	北上原遺跡
69	上之島遺跡
70	嘉手苅村遺跡
71	思原遺跡
72	思原長佐久遺物散布地(仮称)
73	思原石器出土地(仮称)
74	大又遺跡
75	ヤニバマ遺物散布地(仮称)
76	大浦崎収容所跡
77	美謝川集落関連遺跡群
78	大川田原遺跡
79	久志貝塚
80	上里グシク遺跡(久志グシク)
81	久志古島遺跡
82	前田原水田遺跡
83	久志大川上流域生産遺跡

屋部地区	
37	安和貝塚
38	安和与那川原遺跡
39	部間権現青磁出土地(仮称)
40	屋部前田原貝塚
41	屋部貝塚
42	東兼久原貝塚
43	屋部川口古瓦出土地
44	宇茂佐古島遺跡

名護地区	
45	宮里古島遺跡
46	大西区遺物散布地(仮称)
47	大堂原西遺跡
48	大堂原東遺物散布地(仮称)
49	大中区遺物散布地(仮称)
50	名護貝塚
51	アバヌク貝塚
52	溝原貝塚
53	溝原人骨出土地
54	城人骨出土地
55	城古銭出土地
56	ナングシク遺跡群
57	許田貝塚
58	イシグムイ遺物散布地
59	喜瀬山田原遺物散布地
60	部瀬名貝塚
61	部瀬名南遺跡

第2図 名護市の遺跡分布図

第2節 調査体制

平成25年度（2013）

調査責任者：教育長 座間味 法子

：教育次長 石川 達義

調査総括：文化課長 島福 善弘

調査担当：文化財係長 友寄 凡子

：文化財係主事 宮城 弘樹

：文化財係主事 宮城 智浩

：文化財係主事 松原 彰子

調査補助：文化財調査員（嘱託）真栄田 義人

：文化財調査員（嘱託）千田 寛之

：文化財調査員（嘱託）宮里 牧

：文化財調査員（嘱託）神谷 祐子

発掘作業員：石川 博利・上地 厚行・大城 正治・大宮 哲夫・荻堂 盛春

岸本 美枝子・桑江 勇・佐々木 政春・島袋 章子・下地 省三

新谷 壽一・玉木 健二・田港 朝孟・太良 義一・仲井間 宗孝

仲程 源信・中村 啓孝・山城 重次・山城 正則

平成26年度（2014）

調査責任者：教育長 座間味 法子

：教育次長 石川 達義

調査総括：文化課長 比嘉 久

調査担当：文化財係長 友寄 凡子

：文化財係主事 宮城 弘樹

：文化財係主事 宮城 智浩

：文化財係主事 松原 彰子

調査補助：文化財調査員（嘱託）真栄田 義人

：文化財調査員（嘱託）千田 寛之

：文化財調査員（嘱託）神谷 祐子

：文化財調査員（嘱託）玉城 亜紀

：文化財調査補助員（臨時）寄合 龍己

資料整理員：大城 正泉・岸本 美枝子・金城 瑞希・島袋 章子・仲村 裕子

東恩納 宏美・松田 智恵子

第3節 調査経過

平成25年度（2013）

本発掘調査に先駆け平成24年度（2012年8月22日～8月29日）に試掘調査を実施した（第3章第3節）。試掘調査の目的は、開発予定地が遺跡の予想範囲（第5図）となっている為に埋蔵文化財の有無の確認を目的とするものである。

試掘調査は、テストピット（以下、T.P.）1からT.P.5の順で実施した。試掘調査では当初から予想されていた沖縄貝塚時代後期後半頃の土器片が出土するものの、土器そのものの出土の無い地点もあった。また、T.P.1・3・4では貝塚時代の土器の出土は認められず、T.P.3・4は搅乱のみであった。以上の試掘調査の結果を踏まえて、平成25年度の本調査範囲として定めている。

調査はまずI地区から着手した。平成25年6月24日より着手、調査に先立ち、7月2日から表土剥ぎ取り工事を実施、調査区の設定についても調査支援を得て行っている。7月1日から人員を雇用し発掘作業に着手した。調査はI地区、S-24グリッドよりはじめ順次西側に進めていった。

II地区は同年11月6日より実施した。調査場所が市街地であるため住宅・店舗等の出入り口等の都合、これらの導線に配慮しての発掘となった。なお、調査地区が2地区に跨り実測等の現場作業を円滑にするために調査支援を委託している。

これと並行し、I地区の北側部分U-17からU-21グリッド及びV-21／22グリッドの一部で発掘を実施している。

III地区は平成26年1月23日より市内遺跡調査によって試掘調査を実施し、範囲の確認を行った。試掘調査は予定されている道路工事の施工範囲をT.P.6～11まで設定して調査を実施。この結果T.P.9及びT.P.11から貝塚時代後期土器、T.P.10ではグスク土器がそれぞれ出土し埋蔵文化財を確認した為、本調査の範囲に含めることになった。

III地区調査は1月31日から発掘を開始した。調査期日まであまり時間がないことから、重機による表土剥取りと並行して遺物包含層の掘り下げ作業を実施した。2月28日に埋め戻しを行い全ての作業を終えた。

平成26年度（2014）

平成26年6月2日から平成27年2月27日の期間は、これまでの発掘調査において出土した資料の整理作業を行った。着手後速やかに注記を行い、6月に遺物集計、7月からは実測作業を中心にサンプリングした土壤のフローテーション処理ならびに植物遺体分析、レプリカ・セム法を用いた出土土器の圧痕分析作業を実施した。また、金属製品については専門の業者に委託して保存処理を実施している。10月に印刷会社と契約を行い、調査内容をまとめた調査報告書を2月末付で発行し、平成26年度の調査業務を完了している。

第2章 名護市の位置と環境

第1節 名護市の位置と概要

名護市は、沖縄本島北部に位置し、昭和45年(1970)8月1日に旧名護町・屋部村・羽地村・屋我地村・久志村の1町4村が合併し誕生した。市域の北東部は大宜味村と東村、西部は今帰仁村と本部町、南部は恩納村と宜野座村の1町5村に隣接している。県都那覇市から北に約64kmの距離にあり、国道58号、国道329号及び沖縄自動車道によって結ばれている。沖縄の空の玄関口である那覇空港からは、沖縄自動車道を使用して車で約1時間要する。

総面積は210.37km²で、県内では竹富町(334.03km²)、石垣市(229km²)に次ぐ面積を誇り、その約60%を山林が占める。西部は険しい山々を有する屋部地区、北部は稻作で知られた羽地地区、今は橋で繋がる屋我地島の屋我地地区、東部は山・海が美しい久志地区、中央部には平野と丘陵が広がる名護地区と変化に富んだ景観を有する地域からなる自然豊かな市である。市域の中央には、名護岳(標高345.2m)を中心に標高300m級の山々が連なり起伏の大きい丘陵地を構成し、そこに降った雨を集めて源河川、羽地大川、我部祖河川、汀間川、大浦川、幸地川等の中小の多くの川が流れる。山間部から流れてきた川の河口付近には沖積平野が形成され、そこに集落が形成される。この集落の後背湿地は、近世以降水田として利用され、山、海とともに個性豊かな山原型の土地利用が形作られてきた。人口は62,121人、世帯数は27,729世帯を数え(平成27年1月31日現在)、55行政区から構成されている。

第2節 東江地域の地理的環境

本市の地形は大きく①本部半島部、②脊梁山地部、③両者に挟まれた丘陵地域と屋我地地域の3つに分けることができる。本部半島部は、嘉津宇岳(標高448m)、八重岳(標高453m)、安和岳(標高432m)等の本部半島にある高い山々を含む地域である。この地域は、表層地質が古い時代の地層で構成されるため、谷が発達し山々の傾斜が大きい地形を形成する。表層地質は、灰色石灰岩、チャート、黒色千枚岩～黒色頁岩を主体とした古生代二疊紀～中生代末期の本部層や与那嶺層、湧川層が分布する。

脊梁山地部は、名護岳(標高345.2m)、多野岳(標高385.2m)、久志岳(標高335m)、辺野古岳(標高332m)等の沖縄島の脊梁山地を形成する地域である。この脊梁山地を形成する沖縄島の島軸は、北東～南西の軸を持ち、山々や丘陵の高さにおいて北側に高く、南側に低い傾向がある。この地域は国頭層群(名護層、嘉陽層)からなる地形であるが、局部的に国頭礫層で構成される段丘面の発達が見られる。その傾向は東海岸において顕著である。段丘面より海側では、山地が海岸へ急角度で接するが、この高さも北側では急斜面をなし、南側に行くほど傾斜は弱くなる。表層地質は、黒色頁岩～黒色千枚岩、緑色岩類、褐色砂岩層や黒色頁岩層を主体とする名護層や嘉陽層が分布する。

東江は名護市の中心市街地の東側にあって、大兼久・城とならぶ名護三箇の一つである。集落の北側は名護岳を山頂とする山裾が南へと傾斜し、集住域の東にヤマガ(山川)、西に幸地川が海へと注ぐ。国道58号線と東江五丁目一帯は海であったが、埋め立ててできた陸地である。

第3節 東江地域の歴史的・文化的環境

市内には、現在までに約80箇所の埋蔵文化財が確認されている(第2図)。これまでの考古学

上の調査成果から、本市の歴史は沖縄貝塚時代早期前葉(約7,000~5,000年前)まで遡ることができる。本市における資料で最古のものは、大堂原貝塚から出土した無文土器である。特に縄文時代に相当する貝塚時代早期~中期の遺跡についてみると、そのほとんどが屋我地島に集中している。

先史時代の主な生業は、発達したサンゴ礁のイノー(浅海)や内湾の海に生息する多様な貝類や魚類を獲物とした漁労活動を主体とした狩猟採集の時代であったことから、名護湾を臨む名護、屋部、恩納村の北側には、遺跡前面に形成されたサンゴ礁や河川沿いに遺跡が点在し



第3図 1945年の名護市街航空写真 ■調査箇所

ている。西から安和与那川原遺跡、屋部貝塚、部瀬名貝塚、伊武部貝塚などは縄文時代並行期以降、弥生時代～平安時代並行期に相当する貝塚時代後期まで長期にわたり遺跡が形成されたと考えられ、市街地の名護は開発に伴って僅かにこれらの時代の遺物が回収される遺跡が点在している。これまで行われた名護貝塚や溝原貝塚の発掘調査では貝塚時代後期後半のくびれ平底土器などが出土している。

グスク時代以降になると、名護市域では羽地地区に遺跡が集中する傾向にある。グスク時代の遺跡の大半は近世まで続き、その上に現在の集落が形成される例が多くみられる。東江等市街地域の地下からしばしばグスク時代の遺物が回収されており、人々の営みはグスク時代から古琉球にかけて形成されたと考えられる。市域において最大の規模を誇るナングシクは、名護按司の居城と伝えられ、名護の発祥の地とされる。名護按司が歴史書に登場するのは、尚巴志が今帰仁グスクを攻略した際にその名がでてくる。その際に羽地按司の名もみられる。ナングシクのある丘陵地にはグスクを中心とした集落が形成されていたが、16世紀の尚真王の中央主権政策により名護按司及びその家臣が首里へ引き上げると、人々は山を下りて周辺の平地へ移住していったと伝わる。

東江が村名として史料に見えるのは、近世末の同治4年(1865)になってからで、17世紀中頃の『琉球国高究帳』(17世紀中頃)や『琉球国由来紀』(1713)には東江・城・大兼久の三力村はみえず「名護村」だけが記されることから名護村が三力村を含むと解釈されている(名護市史1988:186p)。近世東江には名護間切番所が置かれた、1673年当時東江原の銭川森の南麓にあったが、1695年に現名護博物館のある場所に移転したとされる(比嘉1958)。近世から近代の東江は名護の行政の中心地であった。明治45年には番所から町役場となり、国頭郡役所、名護尋常高等小学校、病院、税務署などが設けられている(第4図・第1表)。



第4図 東江集落民俗地図 (『名護市史本編』 9 名護市史編さん室 2003年 p116-117 転一部加筆)

今回の調査対象となった地区の東側にはジンガガーの湧水があって、根神屋などの神屋が調査地区に隣接している。また、北側にある現在の名護博物館敷地に旧名護町役所があり、遡れば名護間切番所である。また、明治13年(1880)に羽地番所に国頭地方役所が設置されるがその2年後羽地にあった役所は大兼久村に、警察分署を名護間切番所内に移し首里警察署名護分署となる。後者の場所が現在の年金事務所敷地にあたり、明治22年(1889)に名護警察署と国頭地方役所の両庁舎が交換移転され、現年金事務所敷地は国頭地方役所即ち国頭郡役所となった。大正15年(1926)郡制の廃止に伴い郡役所跡地は沖縄県第3土木事務所が設置される。

当地には、戦後昭和21年(1946)には、いち早く琉球政府の土木・建築両出張所が設置されている。調査地の一部はこの国頭郡役所の一部を含んでいる。溝原貝塚はこのように先史時代の貝塚であるとともに、東江集落の歴史や名護間切あるいは国頭郡役所など近世から近代の官庁街としての歴史遺産が数多く分布する地域である。なお、当該地の民俗空間や歴史的変遷については、比嘉親平「名護間切番所敷地の変遷」『名護博物館紀要 あじまあ2』(1986)、『名護市史本編・9 民俗Ⅲ』(2003)p113-122に詳しい。

第1表 東江(溝原貝塚周辺)の主な出来事

時代区分		西暦	中国/和	月	出来事
先史	貝塚時代	6～11世紀頃			東江・溝原に貝塚時代の集落が営まれる
古琉球	グスク時代	12世紀頃～			東江にグスク時代の集落が営まれる
		14世紀頃			名護グシクに、今帰仁城主の弟が名護按司として居城と伝わる
		15世紀中頃			名護按司中山による北山の討伐に参加と伝わる。北山滅亡
近世琉球	名護間切	1609	万曆37年		薩摩軍の琉球侵攻
		1673	康熙12年		東江原の錢川森の南麓に名護間切番所が置かれる
近代沖縄	沖縄県	1695	康熙30年		名護間切番所が現在 名護博物館のある場所へ移転
		1728	雍正6年		程順則が名護間切総地頭職に任命される
	名護町	1872	明治5年	9月	琉球藩設置される。同年、名護間切に指揮司を置く
		1879	明治12年	4月	琉球藩を廃し沖縄県とする旨布告
		1882	明治15年	4月	名護小学校 創立。名護間切番所内に首里警察署名護分署設置
		1884	明治17年	2月	名護分署落成、名護警察署に昇格
		1888	明治21年	4月	名護小学校が名護尋常小学校に改称
		1889	明治22年	5月	大兼久にある国頭地方役所と名護警察署の両庁舎を交換移転
		1896	明治29年	4月	群区編成に伴い国頭地方役所を国頭郡役所に改称
		1902	明治35年	3月	名護尋常小学校に高等科が併置され、名護尋常高等学校になる
		1903	明治36年	6月	国頭税務署が東江に移転
		1908	明治41年		沖縄県及び島嶼町村制が施行され、名護間切は名護村となる
		1926	大正15年	6月	郡制廃止
			〃	8月	郡役所跡に沖縄県第3土木工区事務所設置
	米統治	1935	昭和10年	4月	国頭郡畜産組合、東江兼久に家畜市場を設ける
		1941	昭和16年	4月	国民学校令が施行され、名護尋常高等小学校から名護国民学校へ改称
	名護市	1944	昭和19年		大兼久が大東・大西・大中・大南・大北の5区に分かれる
		1945	昭和20年	12月	終戦後、東江初等学校として再開
	戦後沖縄	1951	昭和26年	4月	東江初等学校から東江小学校へ改称
		1958	昭和33年		東江小学校が現在の場所に移転し、東江小跡地には名護英語学校が移転
		1970	昭和45年	8月	名護町・久志村・屋部村・羽地村・屋我地村が合併し名護市となる
		1972	昭和47年	5月	本土復帰
		1973	昭和48年	6月	東江のミフクラギ、市の天然記念物に指定
		1981	昭和56年	6月	市役所庁舎が現在の場所に移転。跡地はその後、博物館として利用される溝原貝塚試掘調査
		1984～1985			溝原貝塚発掘調査
		1995	平成7年		溝原貝塚発掘調査 (博物館駐車場整備に伴う緊急発掘)
		2013～2014			溝原貝塚発掘調査 (市道山手線街路事業に伴う緊急発掘)
		平成25～26年			

第3章 調査の方法

第1節 溝原貝塚の位置と概要

溝原貝塚は、名護市名護溝原の海岸砂丘地にあり、現在では名護博物館（名護間切番所跡・旧名護町役所）から東江公民館付近にかけて立地する（第5図）。標高は約3mで海岸線よりおよそ500m内陸に位置している。また、遺跡から北西側へ約150mの位置には幸地川が流れている。遺跡周辺にはナングシク遺跡群・名護貝塚・アパスク貝塚等の先史、原史時代の遺跡が10ヶ所程分布していることから、名護湾をひかえたこの一帯が当時好適な生活環境であったことが窺える。



第5図 溝原貝塚周辺の遺跡及び地形図

溝原貝塚は名護市教育委員会が昭和54年度(1979)から昭和56年度(1981)にかけて実施した「名護市遺跡分布調査」の際にその存在が確認された。発見の翌年、昭和56年(1981)7月に最初の試掘調査を実施している。試掘調査において尖底土器の底部が発見されたことから、貝塚時代後期の包含層を含む遺跡であることが確認された。

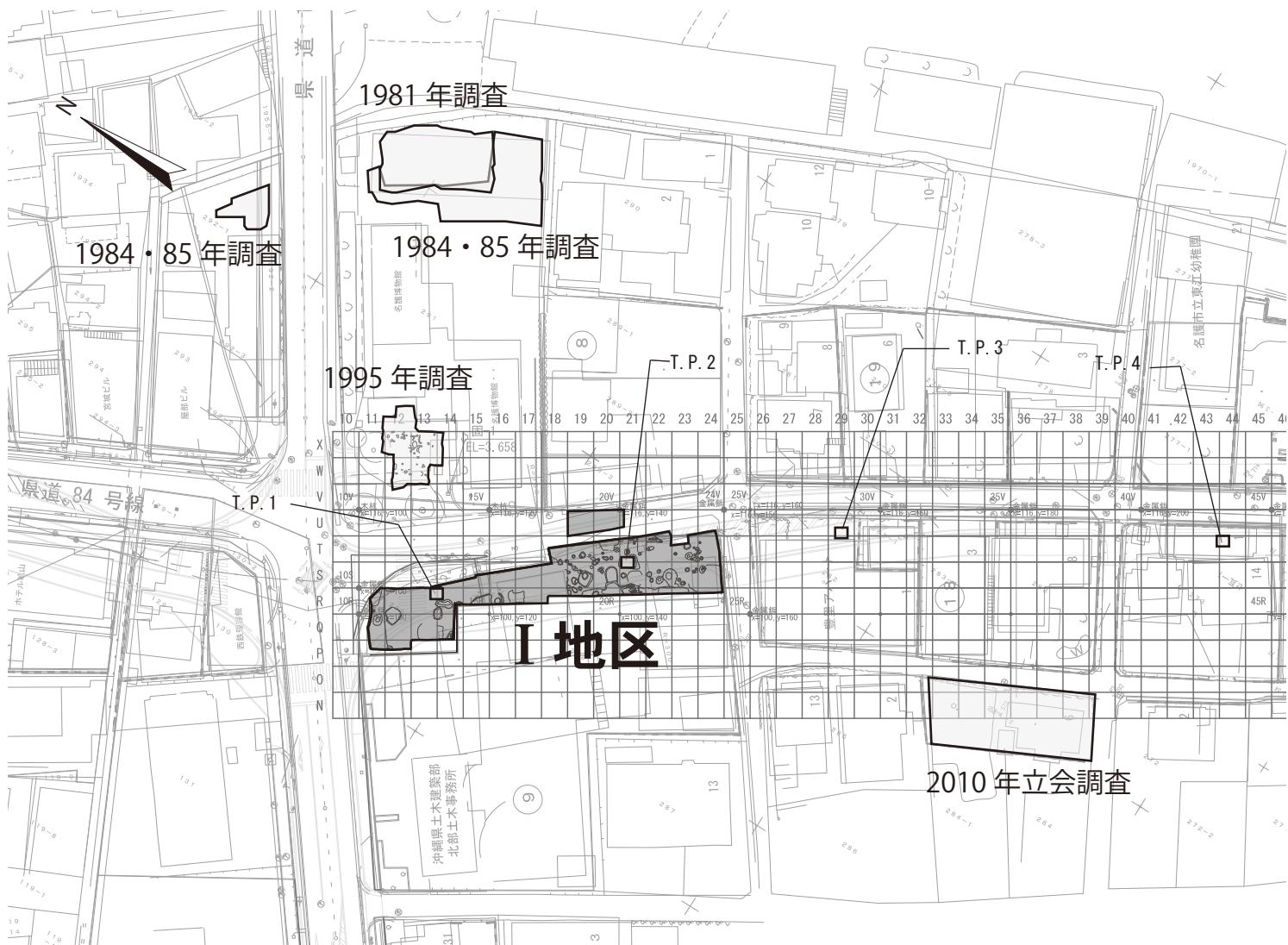
昭和59年度(1984)には名護博物館の収蔵庫建設に伴う第1次緊急調査を実施し、昭和60年度(1985)には収蔵庫建設予定地に加え隣接する個人商店新築に伴う第2次緊急調査を実施した。これら第1次・第2次緊急発掘調査の調査成果をまとめた報告書を平成元年(1989)3月に刊行している。

その後、平成6年度(1994)には博物館駐車場の整備に伴う緊急発掘調査を実施している。

平成26年(2014)1月に遺跡範囲東側の隣接地において試掘調査を実施したところ、貝塚時代後期・グスク時代の遺物を含む包含層が確認されたことから、新たに溝原貝塚の遺跡範囲に加えている。

第2節 調査区の設定

調査区は道路工事施工区域を対象範囲とした。調査グリッドは過去実施された昭和59-60年(1984・85)調査、平成6年度(1994)の調査区配置や名称などを考慮し、おおよそ道路工事とも並行となるように、座標北を西へ57度28分30秒(57.4750度)振った任意の基準線を用いてい



第6図 調査区及び試掘調査区配置図

る。具体的にはX=100, Y=100をR-10(公共座標第XV系X=65016.929, Y=48460.4708)を基準点として、東西南北に一辺4m四方の升目(16m²)を単位とするグリッドを設け実施した。

グリッド名は任意の座標上西から東へ算用数字を昇順に付し、南北にアルファベットをP/Q/R…と付して、U-15/U-16…のようにアルファベットと算用数字を用いてグリッド名としている。なお、Pからとした理由は、前回(1984・85年度、1994年度)の調査でA/B/C…のグリッド名が使用されており、重複を避けるためである。

遺跡予想範囲の中でも、試掘調査の成果などに基づいて、以下のI/II/IIIの3つの地区に分けて進めることとした(第6図)。

I地区は名護市東江288番地と隣接地約1,000m²の範囲で、このうち750m²の調査を実施した。グリッド名では東西はR/Q-11からS/T-24まで。南北はV-21からP-12/13までの、東西14グリッド、南北グリッドの範囲とした。遺跡の予想範囲の最も西側に位置する場所で、北側には現在の名護博物館が、南には名護年金事務所が所在している。戦前に博物館所在地は名護間切番所で、後者の年金事務所は国頭郡役所が所在する官公庁街であった。また、名護博物館の施設整備等によってこれまでにも数回の発掘調査が行われており、砂丘地に貝塚時代後期の遺物を含む貝塚であることが確認されている。事前の確認調査でも同様の成果が得られていたため貝塚時代後期の遺物包含層及び国頭郡役所の施設に係る遺構などの検出が期待された。

II地区は276-3番地と隣接地約1,000m²の範囲でこのうち200m²の調査を実施した。遺跡予想範囲の東側の地域で、試掘調査の結果わずかに貝塚時代後期の土器を出土する事が確認されていたため、本調査に臨んだ地域である。グリッド名ではV/W-50からT-58まで、東西8グリッド、南北4グリッドの範囲とした。詳細は次章以降述べるが、結果だけ述べると搅乱が深



く、一部の調査をもって調査範囲を縮小することとなった。

Ⅲ地区は258-4番地と隣接地約1,000m²の範囲でこのうち約400m²の調査を実施した。当初遺跡の範囲の西側の外に当たる場所で、調査途中に遺跡の範囲が広がることが判明し平成25年度の緊急発掘調査地に追加した地域である。

I・II地区が海岸砂丘地であるのに対し、Ⅲ地区は同じ砂丘でもジンガガーと呼ばれる湧水地の流路上にあって、いわゆる後背湿地帯と考えられる場所にあたる。グリッド名ではS-79からP-82までの東西4グリッド、南北4グリッドを範囲とした。

第3節 平成24年度試掘調査概要

本調査に先立ち、平成24年8月22日から29日に行った調査について概要を報告する。当該調査は事前の試掘調査で実施されたもので、事業は市教育委員会主体事業（文化庁補助事業、市内遺跡発掘調査）として実施されたものである。本調査地域の調査範囲の決定などに資する成果であるという性格上、概要を記して報告を行う。

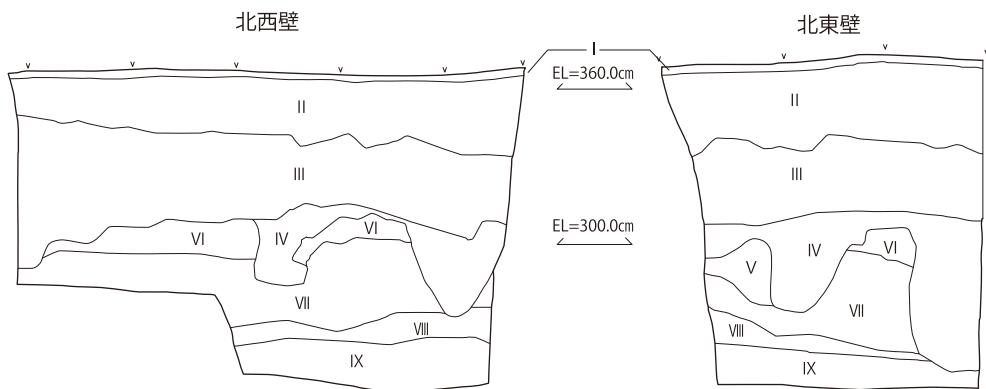
設定した調査区は、用地取得等が行われ条件の整った名護市東江一丁目288-1、288、282-3、273-3、275-4、266-6番地において2m×2m=4m²の試掘調査坑を設定した。当初8カ所を予定したが、調査状況等を鑑みて最終的にT.P.1～5の5箇所の調査で完了している（第6図）。以下、遺物包含層の認められたT.P.2と5について、詳述する。

T.P.2の層序（第7図1）は、I層が表土層。バラス（碎石）を含む固く締った堆積層、II層は客土層でにぶい黄褐色（10YR5/4）混礫土やや粘質、バラスや枝サンゴを含み、黒褐色（10YR3/2）混砂土でやや粘質、コンクリート片含む）、浅黄橙色（10RY8/3）が層状に堆積する。締りは良い。III～V層が遺物包含層で層が遺物包含層となる。III層は黒褐色（10YR3/2）混土砂層で、やや粘質で締りが良く。貝殻、サンゴ片、軽石及び礫を含む。土器片が出土。北東壁の東端に礫が多くみられる礫だまりが確認されている。IV層は黒褐色（10YR3/2）砂層。枝サンゴ及び白砂が混じる。下に行くにつれ枝サンゴの量が増える。また、貝殻や微量の礫及び軽石を含む。III層よりも締りが悪い。V層はVI層への漸移層。黒褐色（10YR3/2）砂に黄褐色（2.5Y5/4）砂が混じる。枝サンゴ、礫及び軽石を含む。締りは悪い。VI層以下は地山と考えられ、VI層は黄褐色（2.5Y5/4）砂層。枝サンゴ、軽石及び貝殻を含む締りの無い層。VII層は黄褐色（2.5Y5/4）枝サンゴ層。枝サンゴが密に堆積、締りは無く脆い。VIII層は黄褐色（2.5Y5/4）砂層。枝サンゴ及び礫を含む。締りは無く脆い。IX層は礫層で海砂利の締りの無い脆い層。

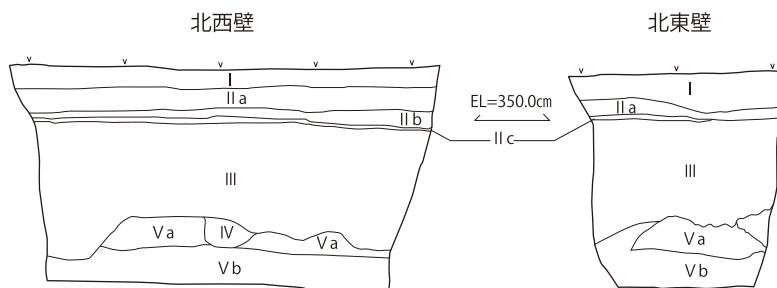
T.P.5の層序（第7図2）は、I層は表土層でバラス（碎石）を主体に構成される締りが良い客土層。II層は客土層で、IIa層はにぶい黄橙色（10YR7/4）。細かい切込み碎石とシルト質砂。締りが良い客土層。IIb層は黒褐色（10YR3/2）混土砂層。基質はIII層と同一礫を含む。締りが良い土層。IIc層 客土層。にぶい黄橙色（10YR6/4）砂層。締りは良い。

III層は遺物包含層で黒褐色（10YR3/2）混砂土層。礫及び貝殻を含む。また、部分的に軽石及び枝サンゴを含む。炭化物及び焼土が多く見られる。土器が出土する締りの良い堆積層。IV層は漸移層。土色は暗褐色（10YR3/3）締りの無い砂層。V層以下は地山で、Va層は黄褐色（2.5Y5/4）混礫砂層。枝サンゴ及び貝殻も含む。粗粒砂。締りが無く脆い。Vb層は黄褐色2.5Y5/4砂層。枝サンゴや礫を殆ど含まない。粗粒砂。締りが無く脆い。

以上の成果を踏まえて、平成25年度に実施する調査区をT.P.1・2を中心とした地域をI地区、T.P.5を中心としたT.P.4に及ばない地域をII地区として、工事対象地となっているT.P.3・4の地域については、これまで実施された工事立会の状況なども勘案して本調査対象地域からは除外した。



1. T.P. 2



2. T.P. 5

第7図 平成24年度試掘調査断面図

0 (S=1/30) 1m

第4節 平成25年度試掘調査概要

本調査を進める中、現在市教育委員会で把握している溝原貝塚遺跡範囲の東側において、遺跡の広がりを確認する必要が生じた。当該地域については、平成25年1月6日から1月10日まで試掘調査を行った。事業は市教育委員会主体事業（文化庁補助事業、市内遺跡発掘調査）として実施されたものであるが、本調査地域の調査範囲の決定などに資する成果であるという性格上、概要を記して報告を行う。

設定した調査区は、名護市東江258-4／263に $2\text{m} \times 2\text{m} = 4\text{m}^2$ の試掘調査坑を6箇所設定して調査を行った。なお、試掘調査坑のNo.は前年度調査坑から連番としてT.P.6からT.P.11を付した。T.P.6からT.P.8では遺物包含層は確認されなかったが、T.P.9からT.P.11で一部攪乱を受けていたものの遺物包含層を確認することができた。以下T.P.9からT.P.11について詳述する。

T.P.9の層序（第8図5）は以下のとおりである。I層は現在の表土層で黒褐色（10YR2/3）を呈する巨礫混じりの客土である。土は固く締まっている。IIa層は暗灰黄色（2.5Y4/2）を呈する粘質土層で、小礫を少量含む土が固く締まった堆積層である。旧耕作土と考えられる。IIb層は暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）を呈する混土砂層で、1cm前後の小礫を多量に含み土は固く締まっている。また、全体的に鉄分による沈着が見られ鉄分の塊を多量に含んでいる。III層はオリーブ褐色（2.5Y4/3）を呈する土の締りが弱い混礫混土砂層で川原石が少量混じる。IV層はオリーブ褐色（2.5Y4/4）を呈する締りの弱い混礫砂層で、大小様々なサイズの川原石を大量含む。

T.P.10の層序（第8図6）は以下の通りである。I層は現在の表土で近現代の土木工事等の影

響を強く受けた攪乱層である。土色は黒褐色(10YR2/3)を呈しており、土は固く締まっている。Ⅱb層は暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)を呈する混土砂層で、全体的に鉄分による沈着が見られ鉄分の塊を多量に含んでいる。T.P.10では断面でⅡa層を確認することはできなかったが、調査中には僅かに残るⅡa層を確認している。

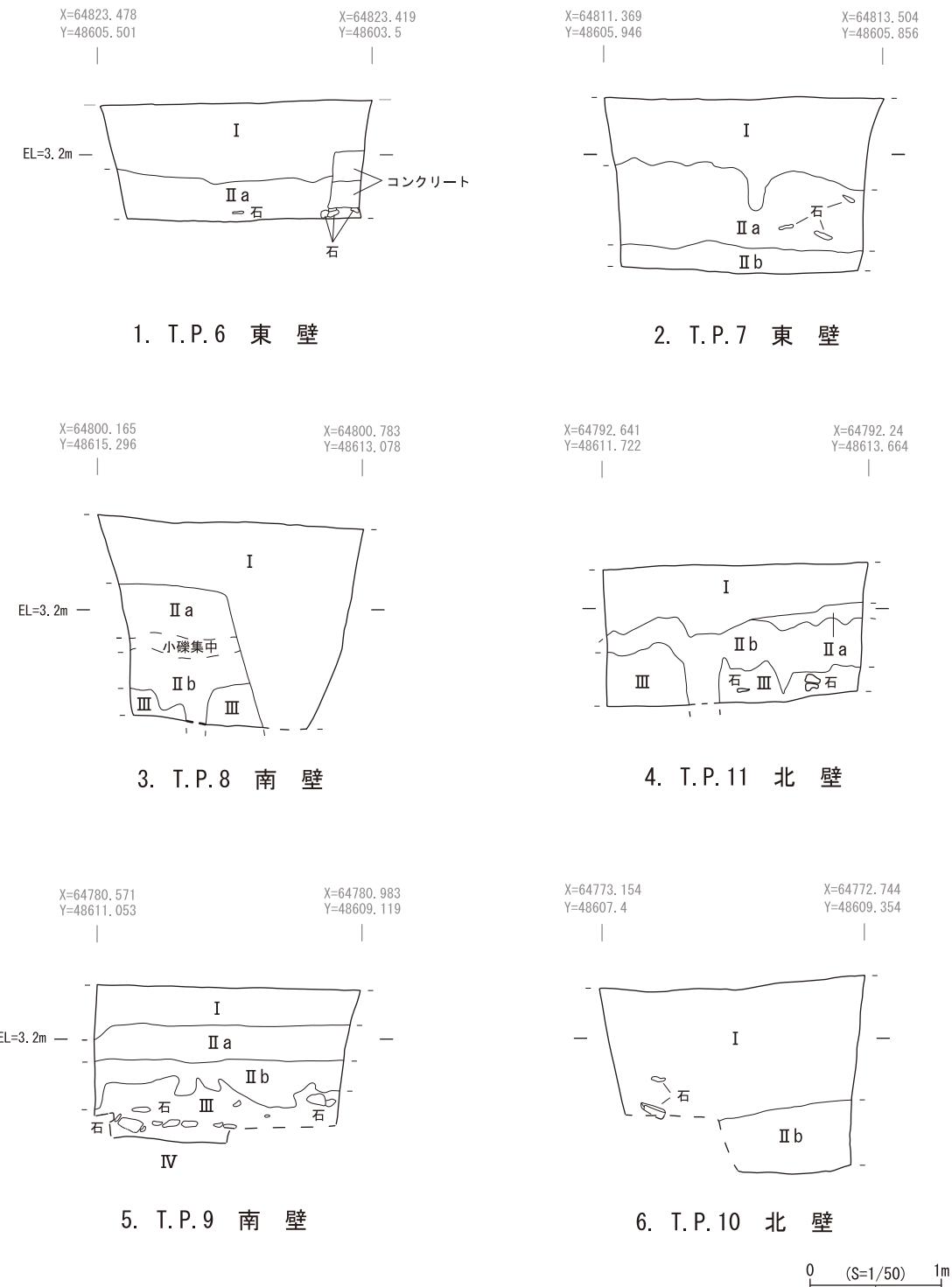
T.P.11の層序(第8図4)は以下の通りである。I層は現代の表土層で黒褐色(10YR2/3)を呈する。巨礫混じりの客土で土は固く締まっている。Ⅱa層は暗灰黄色(2.5Y4/2)を呈する粘質土層で、小礫をわずかに含む土が固く締まつた堆積層である。

旧耕作土と考えられる。Ⅱb層は暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)を呈する混土砂層で、1cm前後の小礫を多量に含み土は固く締まっている。また、全体的に鉄分による沈着が見られ鉄分の塊を多量に含んでいる。Ⅲ層はオリーブ褐色(2.5Y4/3)を呈する土の締りが弱い混礫混土砂層で川原石が少量混じる。

第2表 平成25年度試掘調査出土遺物一覧

分類	器形	部位	試掘調査区												小計						
			TP. 5			TP. 6			TP. 7			TP. 8			TP. 9			TP. 10			
			I	II	III	I	II	III													
土器	後期前半	深鉢・甕	口縁																		
			胴部				1								2	1	10		1	3	18
			底部											1							1
	奄美系?	不明	口縁																		
			胴部																		3
	弥生土器?	不明	口縁																		
			胴部																		
	後期後半	くびれ平底	底部																		
	グスク土器	不明	胴部																		
			滑石混																		
中国陶磁	類別不明土器	不明	胴部																		1
			底部																		
	白磁IV類?	碗	口縁																		
			胴部											1		1					2
			底部																		1
	青磁	碗	口縁																		
			胴部																		
			底部																		
	青花A群	皿	口縁																		
			胴部																		
			底部																		
	青花不明	不明	口縁																		3
			胴部											1							1
			底部										1								
本土産	清朝青花	碗	口縁																		2
			胴部																		1
			底部				1														
	褐釉陶器	壺	口縁																		3
			胴部											1							
			底部																		
	銅緑釉	碗	口縁																		1
			胴部																		1
			底部																		1
沖縄産	無釉陶器	壺・甕	口縁				1														2
			底部				1														4
			胴部				1														1
	不明	壺	口縁	5	4	2											6	11	1		29
沖縄産施釉陶器	上焼	碗	口縁																		4
			胴部				1														4
			底部				2														
	香炉		底部							1											2
			胴部							1											2
沖縄産陶質土器	灰釉	碗	口縁																		1
			胴部																		1
	陶質土器(アカムヌー)	不明	口縁				4								1						5
本土産近代	磁器	碗	口縁	3	1	3				1						1		5			14
			胴部	1		1				3								4	1		10
	陶器	不明	口縁				1														6
不明陶器	不明	胴部																			1
石器	赤瓦	丸瓦	玉縁部				1														1
			端部					1													2
			広部				1														1
	羽口	不明	体部		14	2										2	5				23
			磨滅	4	5	4			2								3				18
	鐵滓	擦り石	完形																		
		叩き石	完形																		
		三稜	完形																		
				41	19	21	1	8		3	3	27			50	2	4				179

以上の成果を踏まえて、平成25年度に実施中であった溝原貝塚の発掘調査について新たにⅢ地区を設け、契約期間中であったことも考慮し、年度途中で本調査地域に組み込み記録保存調査を実施している。



第8図 平成25年度試掘調査断面図

第4章 調査の成果

第1節 I 地区の調査成果

I 地区は調査域西側にあって北側は名護博物館、南側は名護年金事務所に隣接する。当該域は古くから名護行政の中心地として行政機関が集中する地域であった。1695年(元禄8年)に東江原の錢川森の南麓にあった名護間切番所が、現在の名護博物館が位置する場所へ移転したと伝えられる。明治41年(1908)の「島嶼町村制」により名護間切番所が廃止された後も、番所跡は旧名護町役場や旧名護市役所として利用されてきた。I 地区として発掘調査を実施した地点には明治22年(1889)に国頭地方役所が設置されている。明治29年(1896)の郡区編成に伴い国頭郡役所へ改称されたが、大正15年(1926)に郡制が廃止されるまで地方行政の中枢機関として機能した。その後、国頭郡役所跡は第三土木工区事務所や国営職業紹介所などとして利用されていたが、昭和17年(1942)に国頭地方事務所として復活している。この様に I 地区を含む一帯は長年に渡り様々な行政機関が設置されており、地方行政の中心地として機能してきた経緯がある。

I 地区の調査は大きく南東区／南西区の2つに分けることが出来る(第9図)。調査の行程は東から順次実施し、南東区／南西区の調査終了後にそこを迂回路として北側の既存道路部分の掘削を行った。

層順は試掘調査成果を鑑みて I 層の表土、IIa層／II層の包含層とし、IIb層はII層とIII層の中間層にあたる無遺物層で、III層は地山となる。IIa層は客土ではないが、近代の遺物を含む包含層として後述するSB01のコンクリート製構造物に伴う堆積層と考えられる。なお、I 層の表土層はバックホーを用いて除去したのち調査を開始している。

遺構の残存状況は決して良好なものとは言えないが、いくつかの特徴的な遺構を検出することができたので以下、層序および遺構について詳述する。

1 基本層序

I 地区で確認された層は、近現代の構造物建築や土木工事などにより大きく攪乱を受けた造成層と、近世からグスク時代・貝塚時代後期の遺物を包含する堆積に大別できる。基本層序(第10図)は以下の通りである。

I 層: 現代の表土層および近現代の開発に伴う造成層。バラスやコンクリート片、ガラス片、赤瓦など近現代の遺物を多数含む。土色は基本的に暗褐色(10YR3/3)であるが、地点によってはにぶい黄褐色(10YR4/3)や黒褐色(10YR2/3)といった土色の土も混じる。土は固く締まっている。

IIa層: 黒褐色(10YR2/2)を呈する混砂土の堆積層で土の締りは弱い。コンクリート製構造物や礎石基礎の直下に見られる他、S-20グリッドより西側では全域に存在している。客土ではないものの近現代の開発や土木工事によるものと思われる破壊を受けている。大小の礫片を多数含むと共に近現代の遺物の他、青磁や本土産及び沖縄産陶器、貝塚時代後期土器も少量混じる。

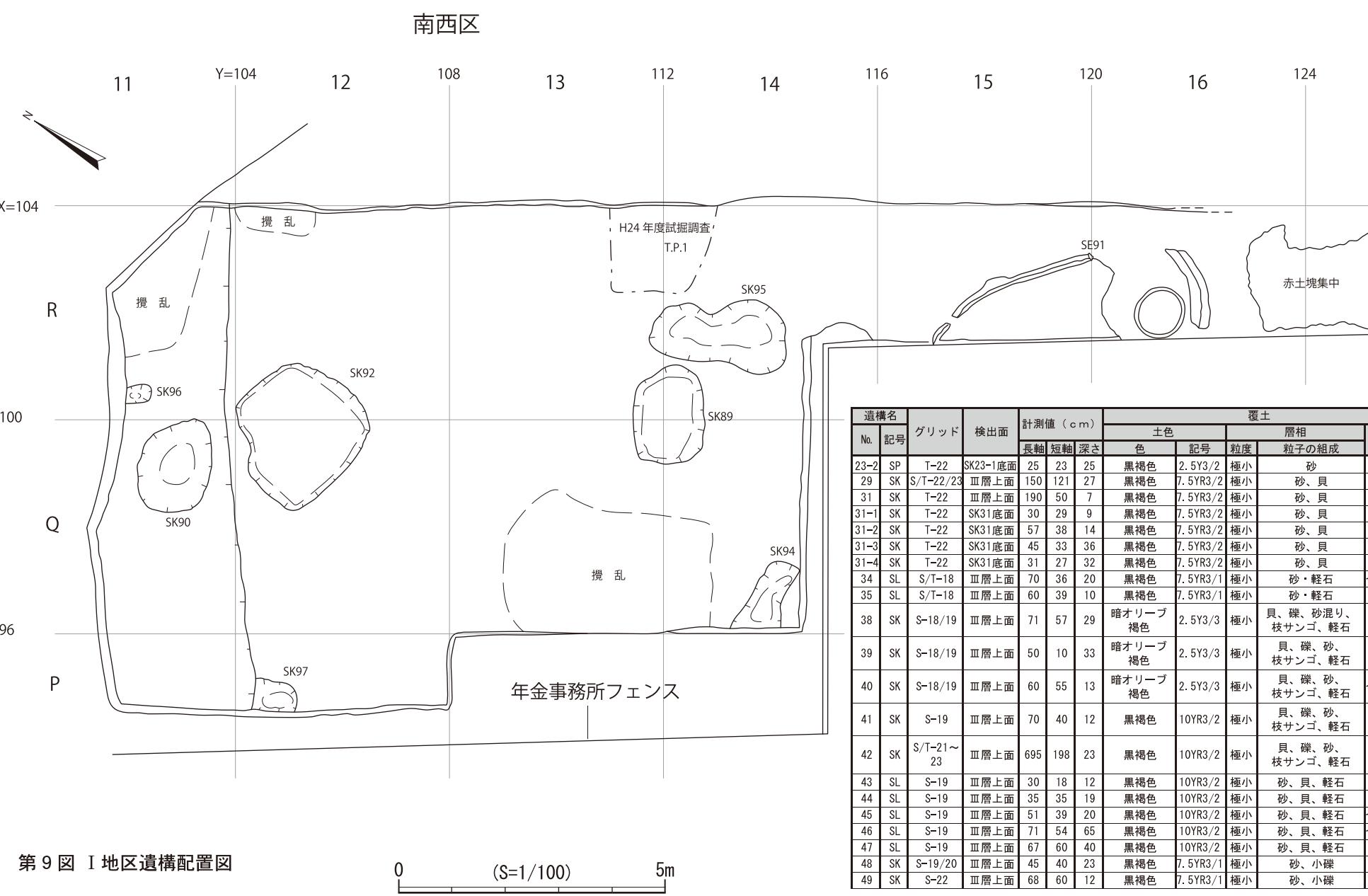
II層: 黒褐色(10YR2/2)を呈する混礫混砂土の堆積層で土の締りは弱い。近世の遺物のほかグスク時代や貝塚時代後期の遺物も含む包含層。貝殻や枝サンゴを僅かに含む他、1cm～5cm程の礫が混じる。I 地区のS-21グリッドより東側の全域に存在するが、大部分で近現代の開発および土木工事による破壊を受けている。だが、グスク時代や貝塚時代後期の遺物が主体

I 地区南西区遺構所見表

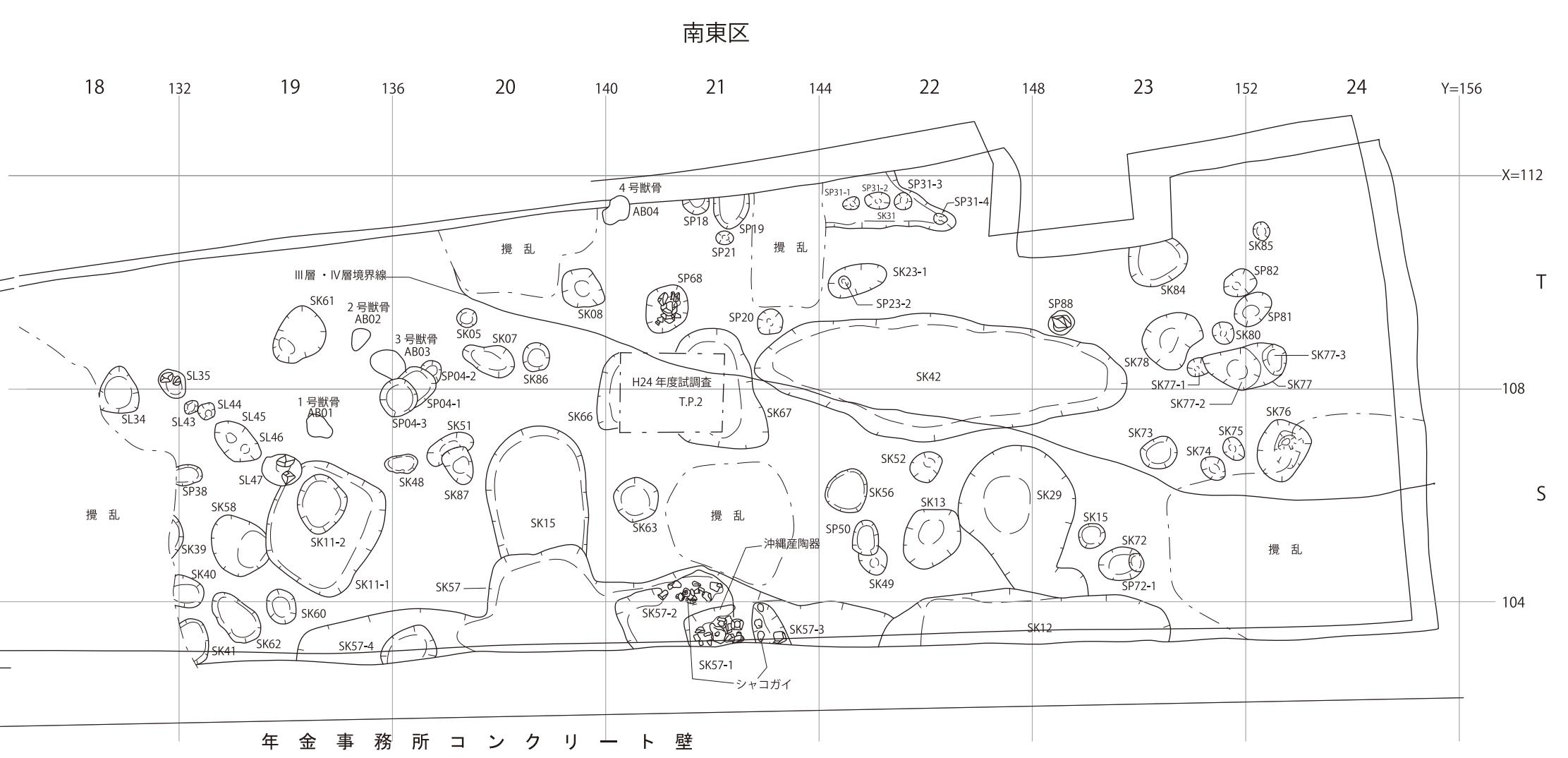
遺構名	グリッド	検出面	計測値(cm)	覆土						
				土色		記号	粒度	層相	粒子の組成	団結度
				長軸	短軸	深さ	色			
89 SK	Q/R-13	III層上面	165 114 49	暗オリーブ褐色	2.5Y3/3	1	極小	砂、小礫、貝、木炭	固い	
90 SK	Q-11	III層上面	190 135 46	暗オリーブ褐色	2.5Y3/4	1	極小	砂、大いの礫、貝、木炭	固い	
91 SE	R-15~16	III層上面	540 150 30	暗オリーブ褐色	2.5Y3/4	1	極小	砂、礫、貝	弱い	
92 SK	R-12/13	III層上面	263 173 49	暗オリーブ褐色	2.5Y3/4	1	極小	砂、礫、貝	弱い	
94 SK	Q-14	III層上面	240 57 46	暗オリーブ褐色	2.5Y3/4	1	極小	砂、礫、貝	弱い	
95 SK	R-14	III層上面	140 136 46	暗オリーブ褐色	2.5Y3/4	1	極小	砂、礫、貝	弱い	
96 SP	R-11	III層上面	53 35 19	暗オリーブ褐色	2.5Y3/4	1	極小	砂、礫、貝	弱い	
97 SK	P-12	III層上面	70 59 31	暗オリーブ褐色	2.5Y3/4	1	極小	砂、礫、貝	弱い	

I 地区南東区遺構所見表

遺構名	グリッド	検出面	計測値(cm)	覆土						
				土色		記号	粒度	層相	粒子の組成	団結度
				長軸	短軸	深さ	色			
01 SK	S-19	II層上面	54 35 10	黒褐色	2.5Y3/2	1	極小	砂	弱い	
01 AB	T-19	II層上面	70 44 15	黒褐色	2.5Y3/2	1	極小	砂	弱い	
02 AB	T-19	II層上面	71 51 15	黒褐色	2.5Y3/2	1	極小	砂	弱い	
04 AB	T-20/21	II層上面	60 34 10	黒褐色	2.5Y3/2	1	極小	砂、貝	弱い	
04-1 SK	S-19	II層上面	88 69 13	黒褐色	2.5Y3/2	1	極小	砂	弱い	
04-2 SK	S-19	II層上面	27 25 23	黒褐色	2.5Y3/2	1	極小	砂	弱い	
04-3 SK	S-19	底面	60 60 22	黒褐色	2.5Y3/2	1	極小	砂	弱い	
05 SK	T-20	II層上面	30 30 16	黒褐色	2.5Y3/2	1	極小	砂	弱い	
07 SK	T-20	II層上面	110 45 5	黒褐色	2.5Y3/2	1	極小	砂、枝サンゴ	弱い	
08 SK	T-20	II層上面	84 73 10	黒褐色	2.5Y3/2	1	極小	砂、枝サンゴ	弱い	
11-1 SK	S-19	II層上面	192 185 22	黒褐色	2.5Y3/2	1	極小	砂	やや固い	
11-2 SK	S-19	II層上面	100 87 11	黒褐色	2.5Y3/2	1	極小	砂	やや固い	
12 SK	R-22/23	II層上面	466 60 30	黒褐色	2.5Y3/2	1	極小	砂	弱い	
13 SK	S-22	II層上面	110 108 30	黒褐色	2.5Y3/2	1	極小	砂	弱い	
14 SK	S-23	II層上面	50 42 10	黒褐色	2.5Y3/2	1	極小	砂	弱い	
15 SK	S-20	II層上面	194 191 12	黒褐色	2.5Y3/2	1	極小	砂、貝、枝サンゴ	弱い	
18 SK	T-21	II層上面	46 31 6	黒褐色	2.5Y3/2	1	極小	砂、枝サンゴ	弱い	
19 SK	T-21	II層上面	68 62 14	黒褐色	2.5Y3/2	1	極小	砂、枝サンゴ	弱い	
21 SK	S-21	II層上面	35 30 6	黒褐色	2.5Y3/2	1	極小	砂	弱い	
23-1 SK	T-22	II層上面	94 38 9	黒褐色	2.5Y3/2	1	極小	砂	弱い	



第9図 I地区遺構配置図



遺構名	グリッド	検出面	計測値(cm)	覆土						
				土色		記号	粒度	層相	粒子の組成	団結度
				長軸	短軸	深さ	色			
23-2 SP	T-22	SK23-1底面	25 23 25	黒褐色	2.5Y3/2	1	極小	砂	弱い	
29 SK	S/T-22/23	II層上面	150 121 27	黒褐色	7.5YR3/2	1	極小	砂、貝	弱い	
31 SK	T-22	II層上面	190 50 7	黒褐色	7.5YR3/2	1	極小	砂、貝	弱い	
31-1 SK	T-22	SK31底面	30 29 9	黒褐色	7.5YR3/2	1	極小	砂、貝	弱い	
31-2 SK	T-22	SK31底面	57 38 14	黒褐色	7.5YR3/2	1	極小	砂、貝	弱い	
31-3 SK	T-22	SK31底面	45 33 36	黒褐色	7.5YR3/2	1	極小	砂、貝	弱い	
31-4 SK	T-22	SK31底面	31 27 32	黒褐色	7.5YR3/2	1	極小	砂、貝	弱い	
34 SL	S/T-18	II層上面	70 36 20	黒褐色	7.5YR3/1	1	極小	砂・軽石	やや固い	
35 SL	S/T-18	II層上面	60 39 10	黒褐色	7.5YR3/1	1	極小	砂・軽石	固い	
38 SK	S-18/19	II層上面	71 57 29	暗オリーブ褐色	2.5Y3/3	1	極小	貝、礫、砂混り、枝サンゴ、軽石	固い	
39 SK	S-18/19	II層上面	50 10 33	暗オリーブ褐色	2.5Y3/3	1	極小	貝、礫、砂	固い	
40 SK	S-18/19	II層上面	60 55 13	暗オリーブ褐色	2.5Y3/3	1	極小	枝サンゴ、軽石	やや固い	
41 SK	S-19	II層上面	70 40 12	黒褐色	10YR3/2	1	極小	貝、礫、砂、枝サンゴ、軽石	弱い	
42 SK	S/T-21~23	II層上面	695 198 23	黒褐色	10YR3/2	1	極小	貝、礫、砂、枝サンゴ、軽石	弱い	
43 SL	S-19	II層上面	30 18 12	黒褐色	10YR3/2	1	極小	砂、貝、軽石	弱い	
44 SL	S-19	II層上面	35 35 19	黒褐色	10YR3/2	1	極小	砂、貝、軽石	弱い	
45 SL	S-19	II層上面	51 39 20	黒褐色	10YR3/2	1	極小	砂、貝、軽石	やや固い	
46 SL	S-19	II層上面	71 54 65	黒褐色	10YR3/2	1	極小	砂、貝、軽石	やや硬い	
47 SL	S-19	II層上面	67 60 40	黒褐色	10YR3/2	1	極小	砂、貝、軽石	固い	
48 SK	S-19/20	II層上面	45 40 23	黒褐色	7.5YR3/1	1	極小	巨礫、枝サンゴ	弱い	
49 SK	S-22	II層上面	68 60 12	黒褐色	7.5YR3/1	1	極小	砂、小礫	弱い	

遺構名	グリッド	検出面	計測値(cm)	覆土				
土色		記号	粒度	層相	粒子の組成	団結度		
長軸	短軸	深さ	色					

<

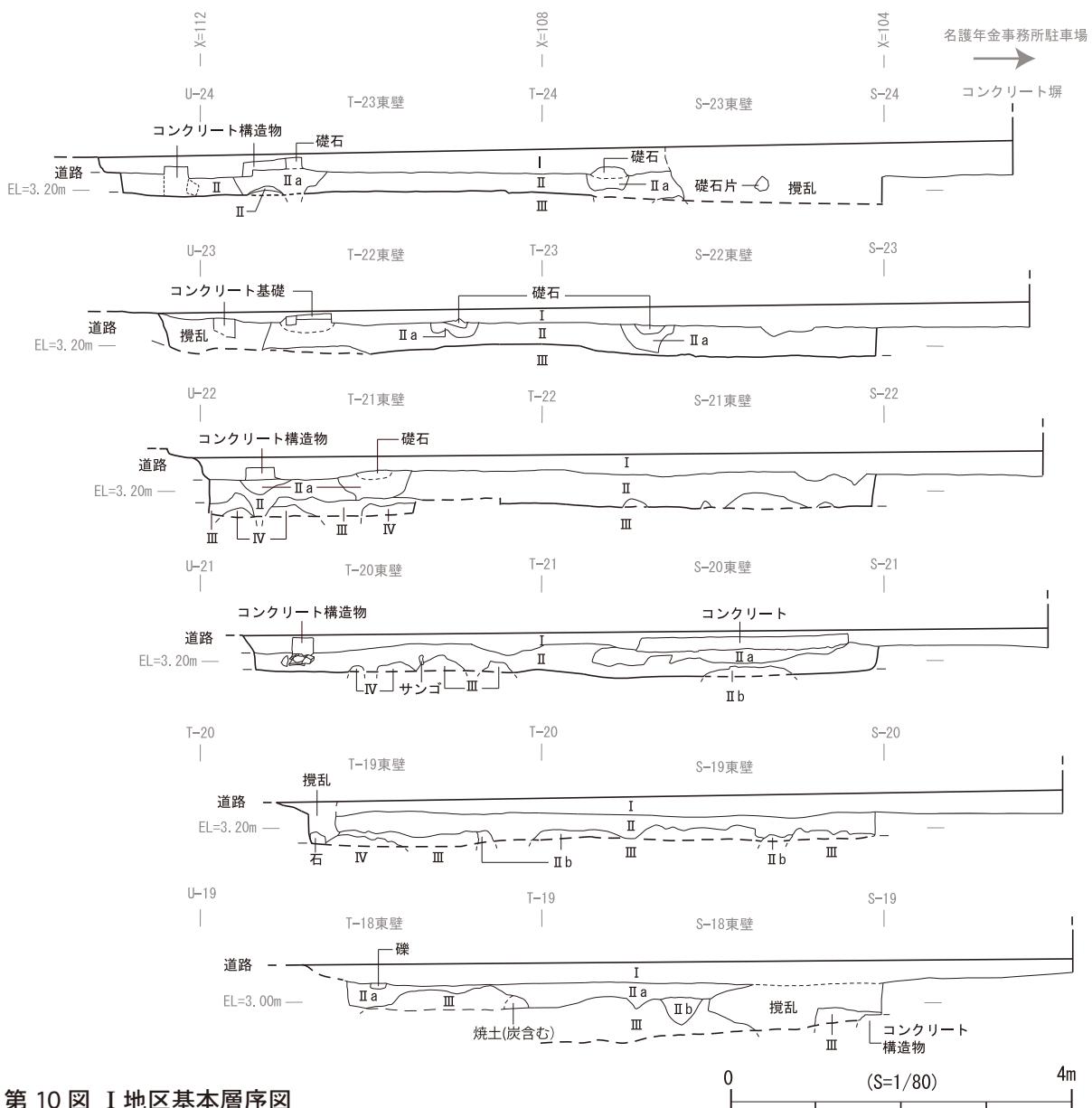
となる地点も極僅かだが存在している。

IIb層:暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)を呈する混土砂の堆積層で土の締りはやや弱い。小貝を少量含むほか、地点によっては軽石を多く含む。

Ⅲ層:白砂層。海砂の堆積層と考えられ調査区全域に見られ、Ⅲ層上面を掘込む形で複数の遺構が確認されている。小貝や枝サンゴを少量含む。土色はにぶい黄褐色(10YR7/4)を呈し、土の締りは弱い。

IV層:混礫砂層。1cm～5cm程の礫が少量混じると共に大量の枝サンゴを含む。土色はにぶい黄褐色(10YR7/4)を呈し、土の締りは非常に弱く脆い。

なお、出土した遺物を回収するにあたり、第Ⅱ層最上面から0～10cmの範囲を「Ⅱ上」層、10～20cmを「Ⅱ中」層、20～30cmを「Ⅱ下」層、それより下層でⅢ層上面直上にあたる部分を「Ⅱ最下」層、Ⅲ層最下部より出土した遺物を「Ⅲ下」層として回収している。



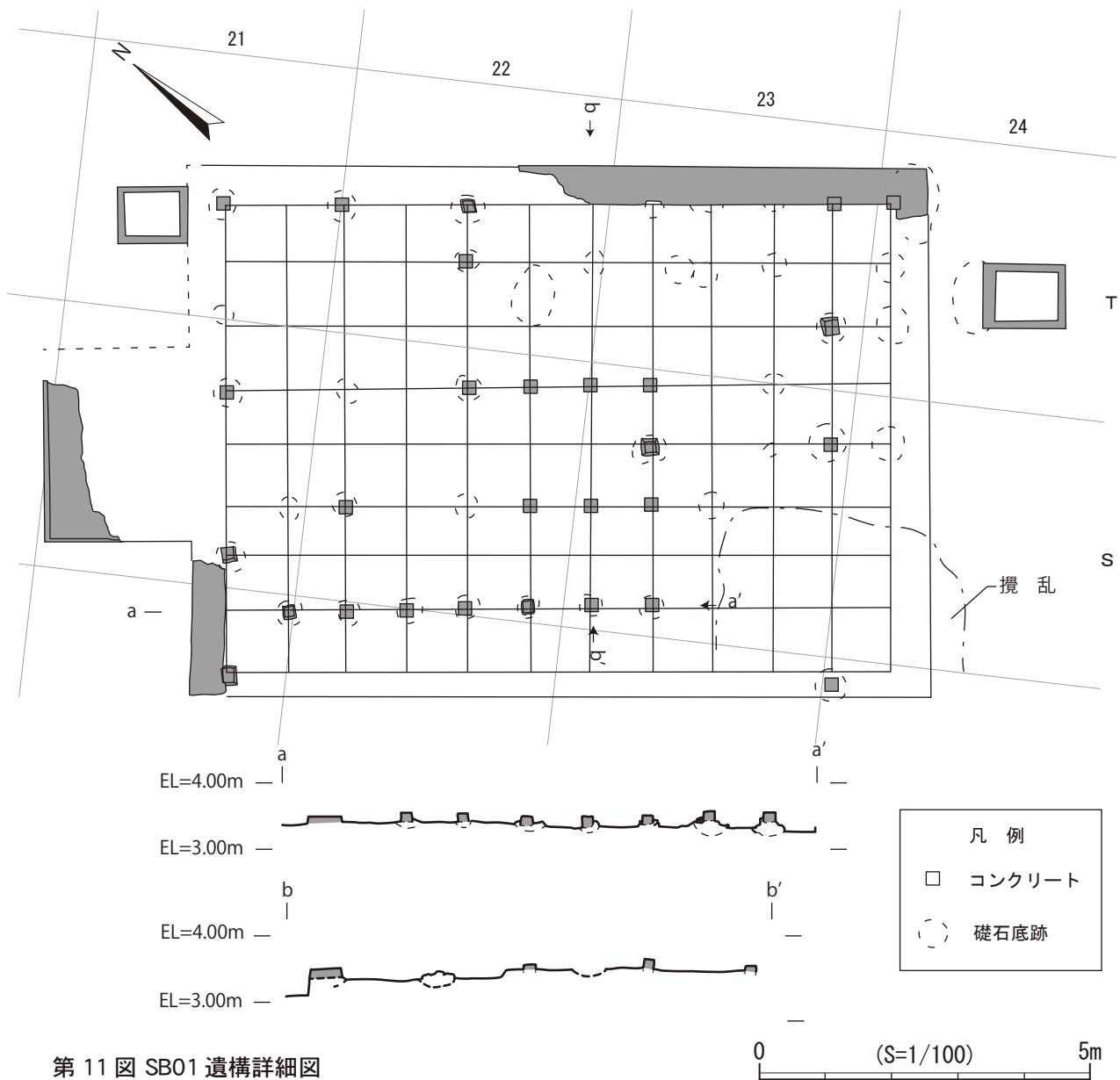
第10図 I地区基本層序図

2 遺構

I 地区ではSB(近代建物跡) 1基、SE(古井戸) 1基、SK(土坑) 72基、SL(炉跡) 7基、SP(柱穴) 10基、AB(獣骨埋葬土坑) 4基を確認した。これらの多くは近現代の開発に伴う破壊を受けていたが、特徴的な遺構をいくつか検出することができたので以下に詳述する。

(1) SB01

I 地区東側のR-21/S-21/T-21からR-24/S-24/T-24にかけてⅡ層より検出された、コンクリート製の礎石群および長方形を成す基礎部分によって構成される建物跡。検出面はⅡa層。確認された礎石数は28基で、1間の幅は概ね65cm～75cmである。前項でも述べたように、当該地には1889年に国頭地方役所(後に国頭郡役所に改称)が設置されており、役所の廃止以降も第三土木工区事務所や国営職業紹介所などの公的施設として利用されてきた経緯がある。このことから、SB01のコンクリート製構造物はこれら行政機関の建物跡との関連



が想定される。また、T-21およびT-24より方形のコンクリート製構造物が検出されているが、これらも建物跡に伴う遺構であると推察される。

(2) AB01 ブタ埋葬土坑

S-19グリッドの北側で、長軸54cm、短軸35cmの楕円形の深さ10cmの深い土坑にブタを埋葬した遺構である(第12図1)。獣骨以外の共伴遺物は含まれていない。頭位方向はほぼ真南で頭部前後足ともに西方に向いているところから右側体部を上にして埋葬されたと推定される。

検出面はⅢ層で、黄褐色砂層で枝サンゴ、軽石及び貝殻を含む縦りの無い層を掘り込み、遺構内には黒褐色(2.5Y3/2)の縦りの無い砂層が覆う。本獣骨の時代は周辺の遺構との関係から近代、遡っても近世と推定されるが共伴遺物や遺構の切り合い関係などから年代を推定することが困難であることから、骨から直接炭素14年代測定を実施し、暦年較正年代(2σ)でCalAD 1,275～1,308の結果が得られている。

なお、AB01からAB04の骨の同定所見については第5章第4節、測定した資料の理化学的分析の結果の詳細は同章第3節に詳述する。

(3) AB02 ブタ埋葬土坑

T-19グリッドの南東側で、長軸70cm、短軸44cm、深さ15cmの円形の土坑にブタを埋葬した遺構である(第12図2)。獣骨以外の共伴遺物は含まれていない。頭位方向はほぼ南で、前者AB01とほぼ類似する。

検出面はⅢ層で、縦りの無い黄褐色砂層を掘り込むように形成されており、遺構内には黒褐色(2.5Y3/2)の縦りの無い砂層で覆われている。

本遺構については、検出状態を切り取り保存することを目的に周辺の地山を掘り込んで埋葬状態で切り取りを行ったため、土坑下面の状況等については不明だがAB01同様深い土坑と推量される。

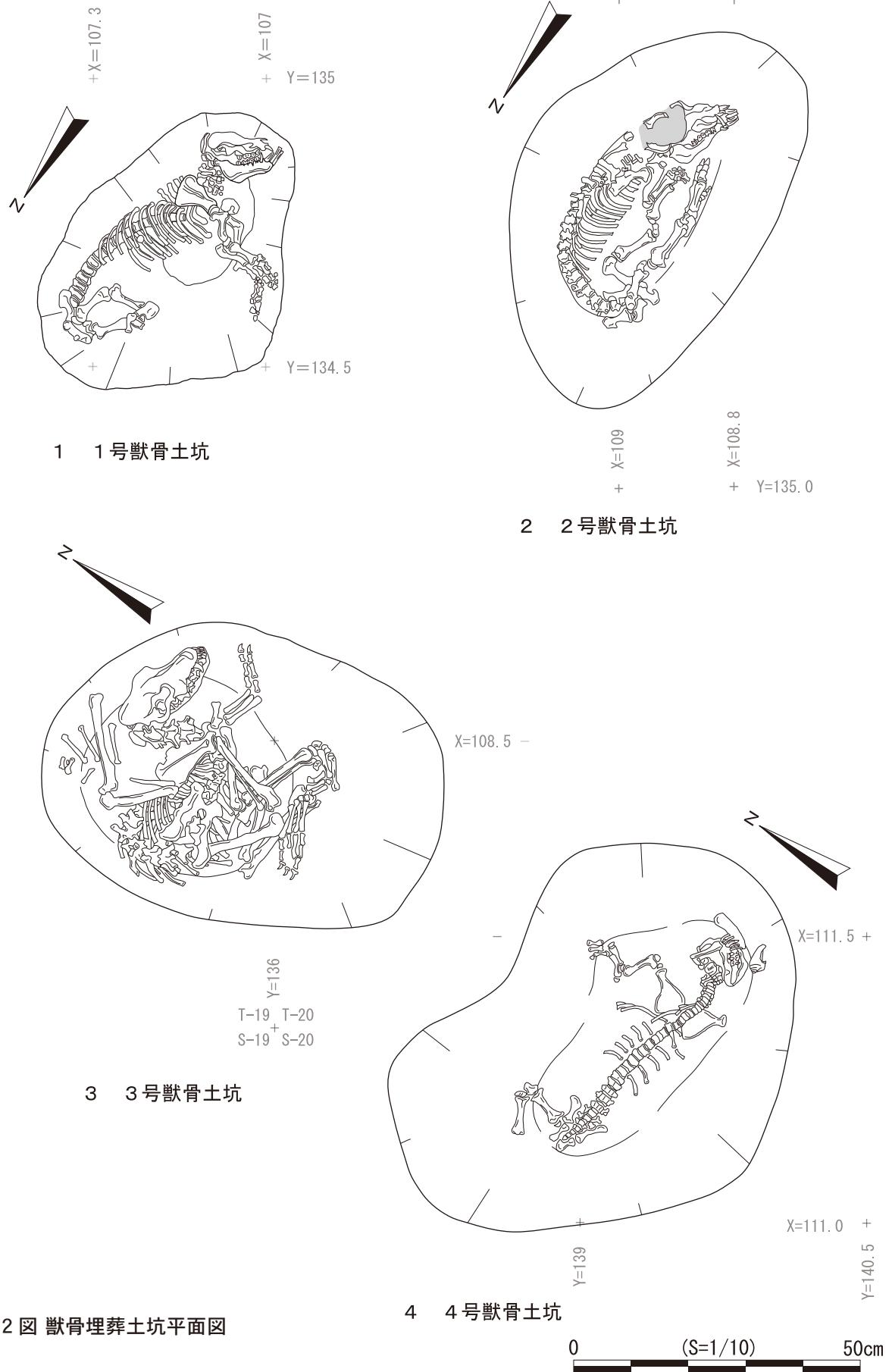
(4) AB03 イヌ埋葬土坑

T-20／21グリッドの北西で、長軸71cm、短軸51cmの円形、深さ23cmの比較的深い土坑にイヌを埋葬した遺構である(第12図3)。獣骨以外の共伴遺物は含まれていない。後足が土坑上面へ向かい、腰を折り曲げるような形で土坑に埋まっており、屈葬のような形をとる。

検出面はⅢ層で、縦りの無い黄褐色砂層を掘り込み、遺構内には黒褐色(2.5Y3/2)の縦りの無い砂層が覆う。他の獣土坑同様遺構との関係から近代遡っても近世と推定されるが共伴遺物や遺構の切り合い関係などから年代を特定することは難しい。骨から直接得られた炭素14年代測定値は暦年較正年代(2σ)でCalAD 1,643～1,669の結果が得られている。

(5) AB04 ブタ埋葬土坑(旧称 AB16)

T-19グリッドの南東側で、長軸60cm、短軸34cmの楕円形、深さ10cmの深い土坑にブタを埋葬した遺構である(第12図4)。獣骨以外の共伴遺物は含まれていないが、頭蓋に沿った配置でマガキガイを据えたような状態で検出されているが、本遺構の周辺からは一般的に得ることのできる貝類であるため意図的な据え付けか、偶発的なものかは判断できない。頭位方向はほぼ真東で、いわゆる仰向けの仰臥伸展葬の形態をとる。検出面はⅢ層で、縦りの無い黄褐色砂層を掘り込み、遺構内には黒褐色(2.5Y3/2)の縦りの無い砂層が覆う。



第 12 図 獣骨埋葬土坑平面図

(6) S・T-18・19 グリッドの土坑群

SL34 (旧 SP34) および SL35

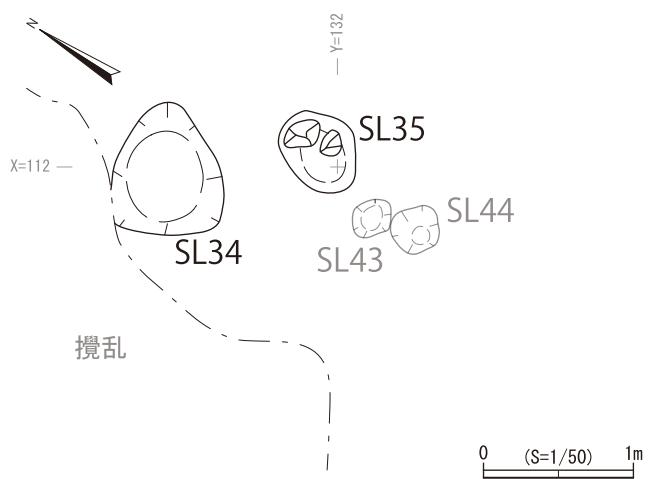
(旧 SP35) の土坑炉群

SL34およびSL35の土坑跡で、用途としては炉等の火床と考えられる。いずれもⅢ層上面で検出されており、土坑内は黒褐色(7.5YR1/3)を呈するやや固く締まった砂層で覆われている。覆土には少量の貝と共に軽石が多く含まれていた。

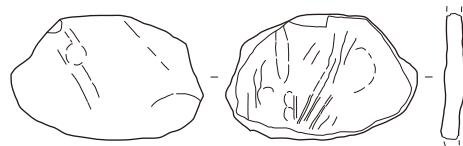
SL34はS-18グリッド北側に位置し長軸70cm、短軸36cm、深さ20cmの深い土坑で覆土には多量の木炭が含まれていた。土坑内からは貝塚時代後期のくびれ平底土器の底部(1002)と土器胴部片3点が出土、白磁小杯口縁部1点(1003)、赤瓦体部

1点が出土した。植物遺体は計33(粒/片)が確認された(第5章第2節)。1001は後期土器の胴部片と考えられる外面の調整は粗放で、粘土接合痕が容易に観察できる。内面は工具調整と考えられる痕跡が縦走する。1002はいわゆるくびれ平底土器の底部破片で底径は6.7cmを測る。外底面中央は若干上げ底状となり底面の外側が平滑になる以外は器内外面ともにナデ調整が徹底せず粗放な仕上げとなっている。1003は白磁杯の口縁で口縁外面に若干釉がかからずに露胎となる部分があり粗製の製品である。小片のため特徴に乏しく、産地・年代等については留保する。土坑内覆土からは新しい遺物も含まれるため、遺構を貝塚時代後期に比定することは難しい。

SL35はS-18グリッド北東側からT-18グリッド南東側にかけて位置し、長軸60cm、短軸39cm、深さ10cmの深い土坑で覆土には木炭が含まれていた。遺構内に人工遺物は確認されていない。出土した炭化材の年代測定および植物遺体回収を目的とした土壤サンプリングの結果、炭化材はcalAD1551 - calAD1634(2σ)の測定値が得られている(第5章第3節)。



第13図 SL34およびSL35遺構詳細図

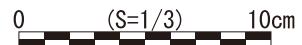


1001

1002

1003

第14図 SL34出土遺物



SL43 から SL47

(旧 SP47) の土坑炉群

SL43/SL44/SL45/SL46/SL47(旧SP47)から成る土坑炉群。Ⅲ層上面で検出されており東西に列状に並ぶ(第15図)。

SL43はS-19グリッド北西に位置する長軸30cm、短軸18cm、深さ12cmの深い土坑で黒褐色(10YR3/2)を呈する締りの弱い混砂土層で覆われている。覆土には焼土が混じるほか1~2cm程の小礫や多量の貝、獸骨や軽石、木炭も含まれていた。土坑内からは貝塚時代後期土器

胴部1点や中国清代青花底部1点、近代磁器杯完形1点を含む計32点の遺物が回収されている。

SL44はS-19グリッド北西に位置し長軸35cm、短軸35cm、深さ19cmの浅い土坑で黒褐色(10YR3/2)を呈する縦りの弱い混砂土層で覆われていた。覆土には焼土が混じるほか貝と共に軽石が含まれていた。土坑内から人工遺物は確認されなかった。

SL45はS-19グリッド北西に位置する長軸51cm、短軸39cm、深さ20cmの浅い土坑で黒褐色(10YR3/2)を呈する縦りのよい砂層で覆われていた。覆土には焼土が混じるほか貝と共に軽石が含まれていた。土坑内から人工遺物は確認されなかった。

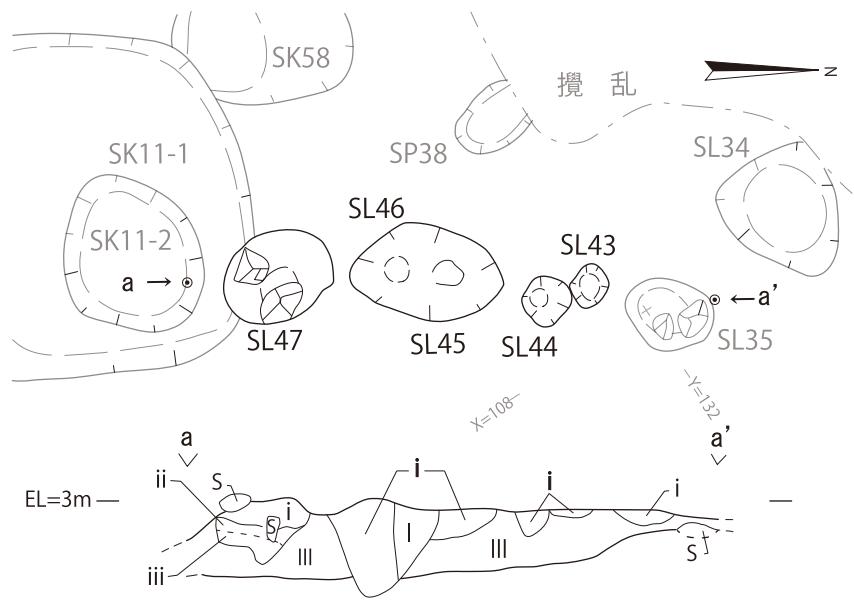
SL46はS-19グリッド北西に位置する長軸71cm、短軸54cm、深さ65cmの深い土坑で黒褐色(10YR3/2)を呈する縦りのよい混砂土層で覆われていた。覆土には焼土が混じるほか貝と共に軽石が含まれていた。土坑内に人工遺物は確認されていない。

SL47はS-19グリッド北西に位置する長軸67cm、短軸60cm、深さ40cmのやや深い土坑で2点の巨礫が含まれていた。覆土は主に焼土でi層からiii層に分層できるが、いずれの層からも人工遺物は出土しなかった。i層は暗褐色(10YR3/3)を呈する固く縦まった混砂土層で、約1cmから約20cmの大小様々なサイズの礫と共に枝サンゴや貝、軽石が混じる。また、礫や枝サンゴには焼けた跡が見られた。ii層は黄褐色(2.5Y5/3)を呈する縦りのよい砂層で、貝のほか僅かに礫も混じる。iii層は暗褐色(10YR3/3)を呈する固く縦まった混砂土層である。

SK11-1(旧SK11)およびSK11-2

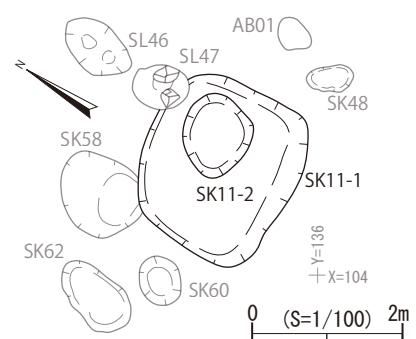
S-19グリッド南東側に位置する土坑で覆土は全体的に焼土が混じる。検出面はいずれもⅢ層である。当初は一つの土坑と考え出土遺物もSK11として取り上げていたが、調査の進捗に伴いSK11の下層より新たに土坑を1か所検出した為、外側の大きな土坑をSK11-1、内側の土坑をSK11-2として各遺構別に遺物を取り上げることとした。

SK11-1(旧SK11)は長軸192cm、短軸185cm、深さ22cmの浅い土坑で覆土は黒褐色(10YR3/2)を呈し、所々に焼土が混じるやや硬い砂層で覆われている。覆土からは清代漳州窯系青花口縁1点(1004)、錢貨3点(1006・1007・1008)のほか赤瓦体部5点、沖縄産施釉陶器17点、本土産近代白磁口縁部1点、アカムヌー胴部1点、類別不明染付胴部1点の計31点が出土した。SK11-2は長軸100cm、短軸87cm、深さ11cmの浅い土坑で黒褐色



第15図 SL43からSL47の土坑炉群遺構詳細図

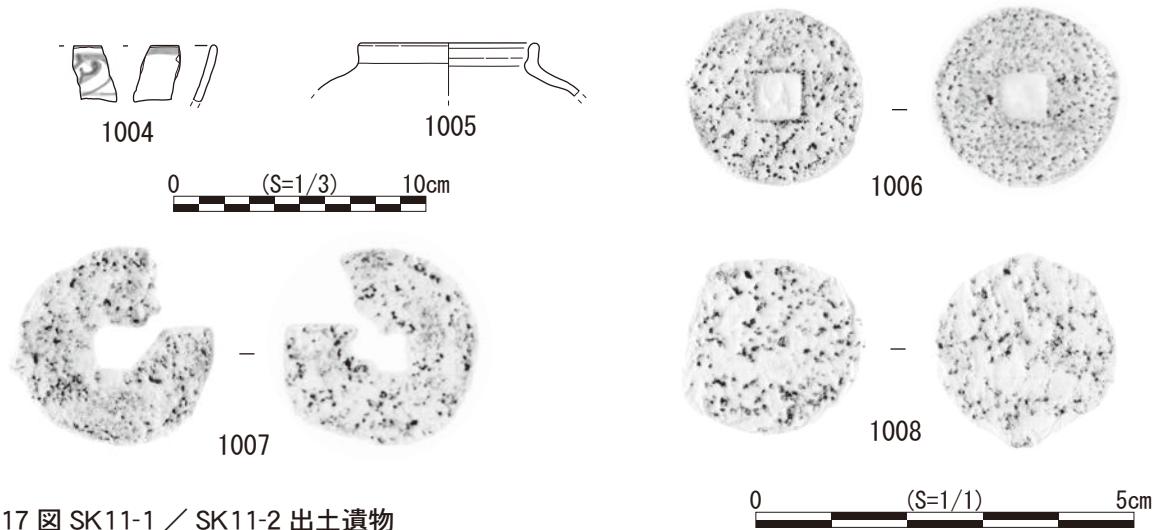
0 (S=1/50) 1m



第16図 SK11/SK11-2 遺構詳細図

(10YR3/2)を呈し、焼土混じりのやや硬い砂層で覆われている。覆土からは中国産褐釉陶器口縁1点(1005)のほか貝塚時代後期土器胴部1点、沖縄産施釉陶器5点が出土する。

SK11-2は貝塚時代後期土器が出土しているが、SK11-1、11-2とも近世／近代の遺物が多出している点を考慮する出土遺物に比して新しい時代の遺構と推察される。また、覆土は全体的に焼土も混じるが炉跡として利用された形跡は確認されなかった。



第17図 SK11-1 / SK11-2 出土遺物

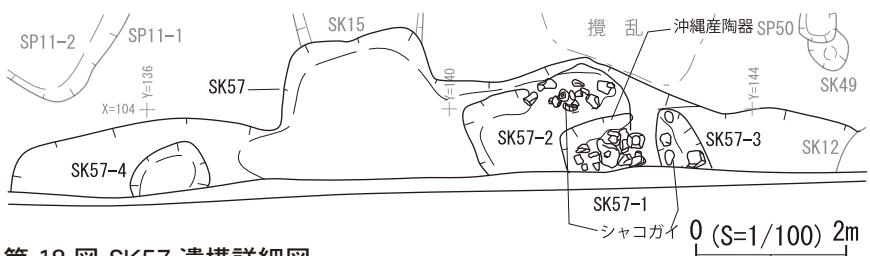
(7) R / S -19 から 22 グリッドの土坑群

SK57 / SK57-1 / SK57-2 / SK57-3

SK57はR-11 / S-19から22グリッドにかけて東西に長く伸び、長軸1170cm、短軸52cm、深さ47cmの長大な土坑で、Ⅲ層を掘り込み形成されている。土坑内は黒褐色(10YR3/2)を呈する締りの無い砂層で覆われている。覆土からは細蓮弁青磁碗(1009)、清朝青花碗口縁部1点(1010)、清代白磁皿1点(1011)、白磁(D群?)と推定される六角杯口縁部1点(1013)、肥前染付碗底部1点(1012)、沖縄産施釉陶器急須口縁1点(1014)、同施釉陶器の香炉口縁1点(2015)、沖縄産無釉陶器擂鉢口縁部1点(1016)、同火炉口縁部1点(1018)、同擂鉢底部1点(1020)、陶製煙管雁首1点(1022)、石製煙管雁首1点(1021)を含む計80点が出土した。

なお、当初は一つの土坑と考えられていたが調査が進むにつれ4つの土坑が掘り込まれていることが判明した為、それぞれにSK57-1・SK57-2・SK57-3・SK57-4の枝番号を付し遺物を回収した。SK57-1・SK57-2・SK57-3には礫が伴う。SB01に伴う他の礎石基礎部分の状況と酷似しているため、これらの土坑も礎石基礎部分の一部と推察される。SK57-4は用途不明である。

SK57-1はR-21グリッド北側に位置し検出面はSK57最下部で検出された。長軸130cm、短軸70cm、深さ36cmを成す。覆土には黒褐色(10YR3/2)を呈し枝サンゴや貝を多く含む締りの弱い砂層が堆積している。沖縄産無釉陶器灯明皿完形1点(1017)、同壺底部1点(1019)を含む計29点が出土した。

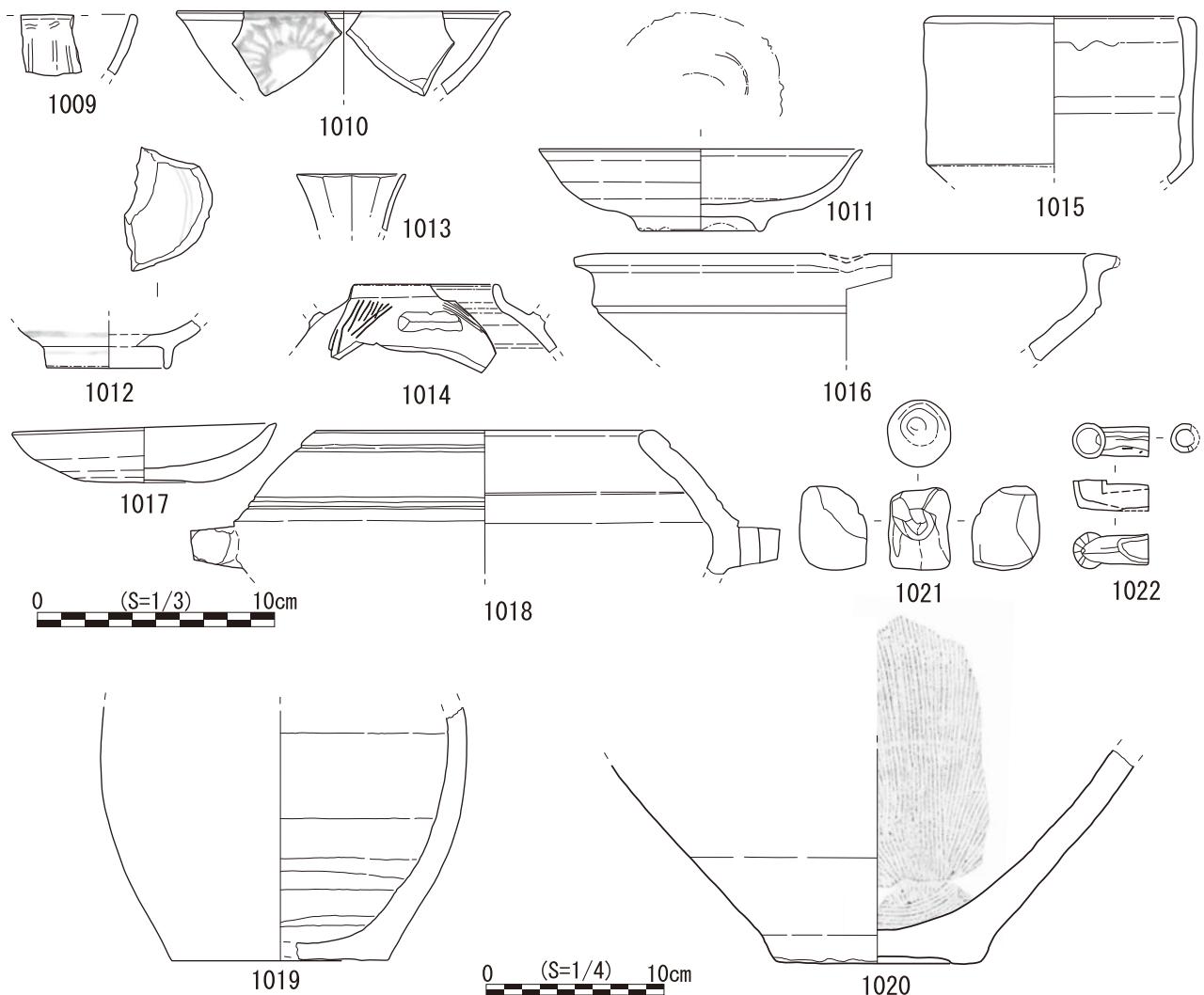


第18図 SK57 遺構詳細図

SK57-2はR-21グリッド北側からS-21グリッド南側にかけて位置し、長軸220cm、短軸115cm、深さ34cmを成す。検出面はSK57底部。覆土には黒褐色(10YR3/2)を呈し枝サンゴや貝を多く含む締りの弱い砂層が堆積する。獣骨のほか貝塚時代後期土器1点、類別不明白磁1点が出土している。

SK57-3はR-21北側に位置し、長軸80cm、短軸40cm、深さ29cmを成す。検出面はSK57底部。覆土は黒褐色(10YR3/2)を呈し枝サンゴや貝を多く含む締りの弱い砂層が堆積する。沖縄産陶器35点、陶器製煙管雁首1点、肥前染付碗1点を含む計42点が出土している。

SK57-4はR-19東側からR-20西側にかけて位置し、長軸100cm、短軸55cm、深さ24cmの浅い土坑。検出面はSK57底部。土坑内は黒褐色(10YR3/2)を呈し枝サンゴや貝を含む締りの弱い砂層で覆われている。人工遺物は回収されなかった。

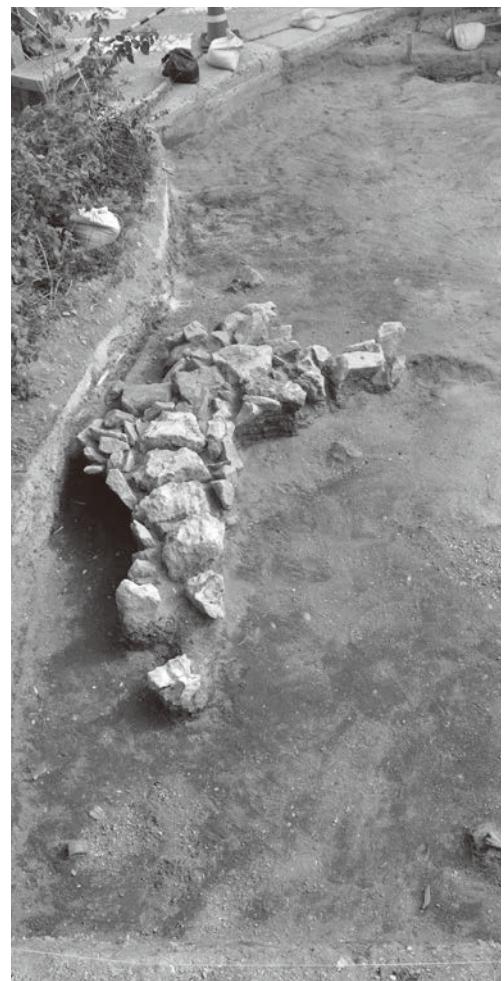


第19図 SK57/SK57-1出土遺物

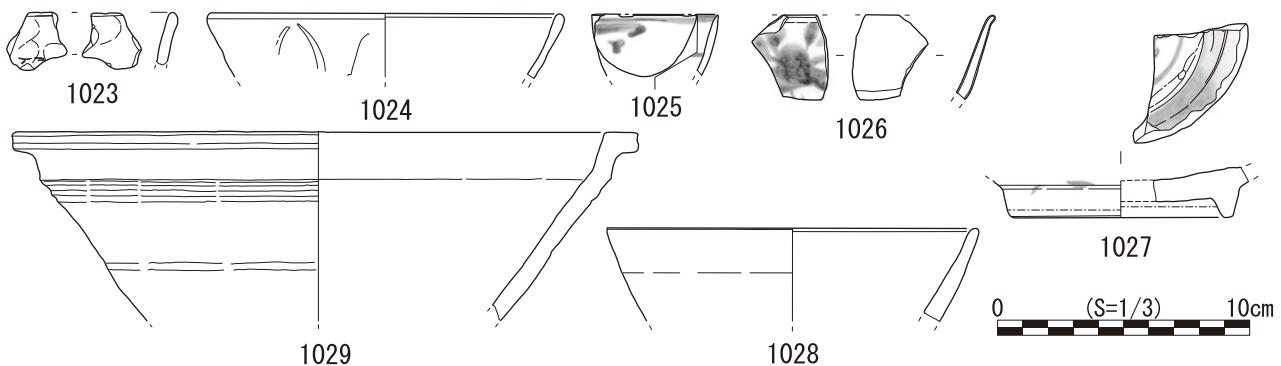
(8) Q-11 グリッドの集石遺構

SK90

Q-11グリッド南西側に位置しており長軸190cm、短軸135cm、深さ46cmの南北に伸びた長楕円形状を成す巨石の集石遺構である。検出面はⅢ層で暗オリーブ褐色(2.5Y3/4)を呈する締りのよい砂層が堆積する。出土した集石の殆どは琉球石灰岩で、一部には石垣石材と目される加工した石も認められる。I地区南西区は名護博物館の駐車場として利用されている地点であるが、本章第1節でも述べたように、かつて国頭郡役所として利用されていた経緯がある。そのため今回出土した石垣石材が国頭郡役所に伴う遺物である可能性も考えられるが、原位置で遺構として検出されていないため、断定できない。遺構覆土には貝や獸骨および木炭と共にガラス片等の現代遺物も含まれていたが、貝塚時代後期土器片1点(1023)、青磁無鎬蓮弁文碗(IV-V類か?)口縁部1点(1024)、中国青花小杯口縁部1点(1025)同清代の青花碗口縁部1点(1026)、同底部1点(1027)、沖縄産無釉陶器碗口縁部1点(1028)、同擂鉢口縁部1点(1029)を含む計17点の人工遺物が出土している。



第20図 SK90 磯集中出土状況



第21図 SK90 出土遺物

3 I 地区出土の遺物

I地区で回収された遺物は第3表に示した。貝塚時代後期、グスク時代、近世琉球及び近現代の多時期にわたる様々な遺物が出土している。以下、前節までに紹介できなかった遺構覆土出土遺物を第22・23図に、包含層出土遺物を第24～27図に掲載した。以下、個別の出土資料について紹介していく。

SE91は西側で検出された井戸跡である。井戸内には瓶などが含まれ戦後の廃棄と考えられる。遺構内から検出された主な遺物を第22図に図示した。1030は土器の胴下半部分で、粗い石灰粒が混和材として用いられており、近世期の先島地域の土器と推定される。1031は沖縄産施釉陶器で白化粧に透明釉を施す小碗で、見込みは蛇の目釉剥ぎとする。1032は沖縄産無

釉陶器の底部で、器種は不明だが壺や甕と考えられる。1033は軒丸瓦の無紋の軒部分。1034は黒い円形の石製品で碁石と考えられる。1035は沖縄戦時に米軍が用いたと考えられる銃剣で、刀身は両刃で全長52cm、刃長39cmを測る。柄は樹脂製で、その特徴からM1905銃剣(俗称1942Bayonet)と推測される。1942~43年の間に製造され、太平洋戦争で米軍によって使用されたものとされる。なお、刀身の柄側に刻字が見られ「U□H」と判読でき、□は文字の上半分が確認できるのでFもしくはEと推定される。製造メーカーにUnion Fork and Hoeというメーカーが存在するので、当該メーカーの頭文字かと推察される。

SP04-2はT-20で検出された小さな落ち込みで、落ち込み内より貝錘(1036)が出土している。SK08はT-20で検出された浅い土坑で、中国褐釉陶器の底部(1037)が1点のみ出土している。SK12はR-22/23で検出された土坑で青磁皿の底部(1038)ほか、沖縄産陶器胴部1点・本土産類別不明染付胴部1点が出土。SK13はS-22で検出されたやや深い土坑で、煙管の雁首(1039)ほか、沖縄産陶器胴部1点・赤瓦体部1点・本土産近世陶器碗胴部1点が出土。SK15はS-23で検出された浅い土坑で、貝塚後期後半の土器口縁(1040)及び胴部(1041)が出土する。AB04(旧称AB16)のブタ埋葬土坑上面より青磁碗口縁(1042)が出土している。SK29はS-22/23で検出された土坑で、白磁小杯(1043)、肥前磁器の染付底部資料(1044)が出土。後者は見込に目痕が残る特徴等より18世紀頃の製品と推定される。SK42はS/T-21~23にかけて確認された大きな落込みで、中国の明代青花磁底部(1045)等が出土、肥前染付の口縁資料(1046)は17世紀後半頃の製品と考えられる。SK49とSP50は重複しS-22で検出された土坑・ピットで、肥前陶器皿(1047)で17世紀後半頃の製品、他にグスク土器底部資料(1048)が出土している。両者の遺物の年代観と切り合い関係は整合的でないことから、両遺物とも近世以降に構築された遺構に廃絶時に覆土に混入した遺物と推察される。なお、後者グスク土器底部資料には、第5章第1節で詳述するように土器胎土中に多量のアワの圧痕が確認されている。SK56はS-22で検出された土坑で、粗製の青磁碗口縁(1049)が出土する。SK66・67は平成24年度試掘調査時の調査区によって改変を受けているが両者とも土坑と推察される。SK66から青磁の瓶等袋物の胴部(1050)、SK67からは青磁VII類口縁部(1052)および中国青花磁の杯底部(1052)等が出土している。SP72-1はS-23で検出された土坑および土坑下面で検出されたピットで貝塚後期の土器口縁部片(1053)が出土している。SK76はS-24で検出された土坑で、大部分を攪乱坑によって毀損する。青磁碗底部(1054)が出土する。

SK89・94はいずれも調査区西側で検出された近現代の遺物を含む土坑である。SK89では沖縄産無釉陶器の擂鉢底部(1055)、図上復元可能な鉢(1056)ほか沖縄産陶器、本土産近代磁器などが出土している。SK94では沖縄産施釉陶器の灰釉碗の底部資料(1057)が出土する。

包含層及び表土や攪乱から出土した遺物は、第24~27図に図示した。

1058~1074は土器で、1058~1062は貝塚後期前半の尖底土器群に分類される資料と考えられる。1063~72は貝塚後期後半の平底土器群に分類した。1073~1074はグスク土器の底部資料である。1075はカムィヤキ須恵器で胴部の小片が本資料も合わせて2点出土している。1076~1098は青磁で、特徴的な資料のみ紹介する。

青磁の分類は沖縄分類(瀬戸ほか2007)を参考にしている。Ⅲ類と目される資料は無く、Ⅳ類と考えられる口縁小片が幾つか出土、1076は無鎬の蓮弁を体部にヘラ彫りする資料が出土。1077~1078は無文外反碗の口縁資料でⅣないしはV類と考えられる。V類と目されるのは、1079~1080の雷文帯碗の口縁資料等、VIからVII類と目される資料が1083~1085の細蓮弁文の資料である。1092~1093は腰折皿で図上復元可能な資料である。1095は盤底部、1096は内外にヘラ彫りの蓮弁を描く杯、1098は見込に擂目が認められ擂鉢の底部である。1099~1102は白磁で、1099は14世紀頃の資料と目されるC群2のいわゆるビロースクタイプの碗

第3表 I 地区出土遺物集計表

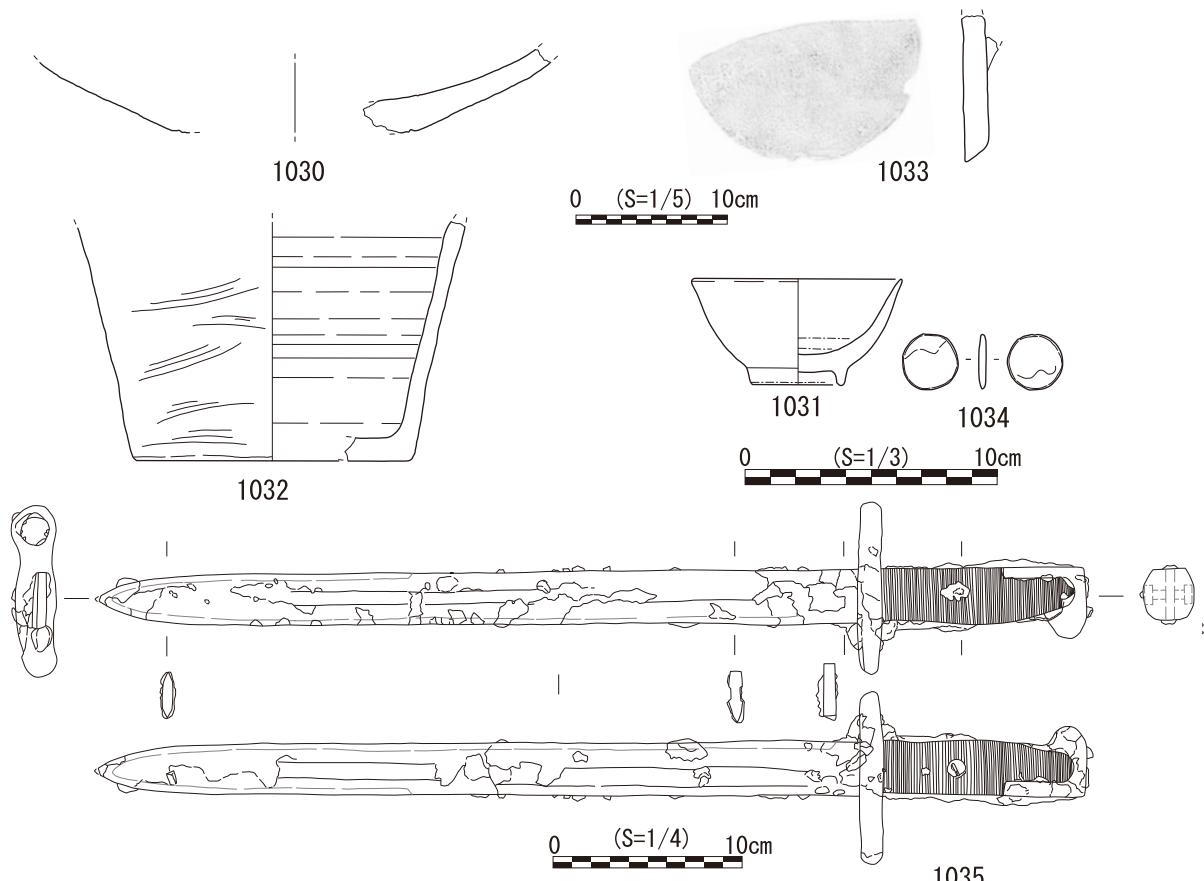
分類	器形	部位	I層	II層	遺構 覆土	小計	
土器	後期前半	口縁	3		3		
		底部	2		2		
	後期後半	口縁	13		13		
		胴部有文	2	1	3		
	後期土器	底部	4		4		
		胴部無文	26	117	15	158	
	グスク 土器	胴部無文	4		4		
		底部	2		2		
かみやけ	不明	胴部	2		2		
青磁	IV類 (外反碗無文)	口縁	6		6		
		底部	1	1	2		
	IV類碗 (無縫蓮弁文)	口縁	1		1		
		口縁雷文	1	4		5	
	V類	胴部有文	1		1		
		胴部無文	1	6	1	8	
	VI類碗	胴部無文	2		2		
		胴部	1	4		5	
	VI類碗 細蓮弁	口縁	2	7		9	
		口縁	3		3		
	盤	底部	1		1		
		口縁	2	11		13	
	皿	胴部	3		3		
		底部	1	2	3		
	完形	口縁	2		2		
		胴部	10	45	5	60	
	碗	口縁	1		1		
	鉢	口縁	1		1		
	擂鉢	底部	1		1		
	杯	口縁	1		1		
	大振碗	口縁	1		1		
		底部	1		1		
白磁	碗・皿	口縁	3	17	4	24	
		胴部	3	27	7	37	
		底部	12	1	13		
中国 明代	青花皿	口縁	3		3		
		底部	1		1		
	青花碗	口縁	1	7		8	
		胴部	2		2		
	中国 褐釉陶器	口縁	2	1	3		
		胴部	5	45	16	66	
		底部	1	3	1	5	
備前 陶器	擂鉢	胴部	3		3		
肥前 陶器	銅緑釉碗	口縁	1		1		
		胴部	1	3	1	5	
		底部	1		1		
	銅緑釉皿	口縁	2		2		
		胴部	1		1		
		底部	1		1		
その他	胴部	1			1		
	底部	1	5	1	7		
	二彩手大 皿	口縁			2	2	
	胴部	7	1	8			
中国 清代	擂鉢	胴部	3	2	5		
	青花皿	底部	3		3		
		完形	1		1		
	青花碗	口縁	2	23	2	27	
		胴部	10	46	12	68	
	青花小杯	底部	1		1		
		完形	1	1		2	
	青磁染付 小碗	口縁		1	1	2	
		底部	1		1		
	瑠璃釉小杯	胴部			1	1	
		完形	1		1		
小計(a)		78	488	76	642		
小計(b)							
小計(c)							
総計(a+b+c)							

※貝類・骨は集計省略する。

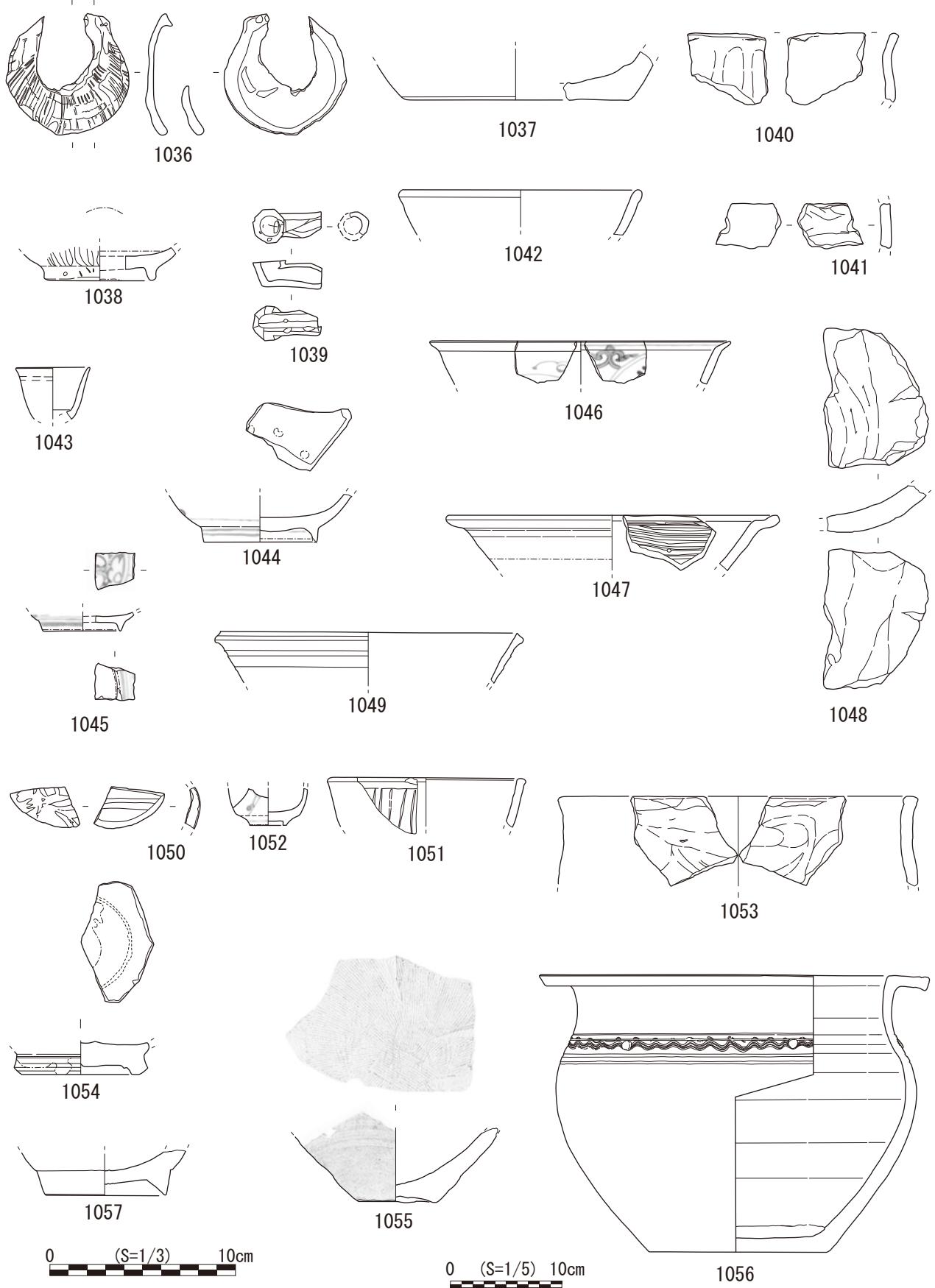
口縁資料。1100はE群と推される。1101～1104は清朝磁器と推定される白磁の碗皿口縁資料である。1105～1114は粗製の青花磁器で多くは清朝期のものと推定される。1115は瑠璃釉型造りの小杯で徳化窯の製品と考えられる。1116・1117は中国褐釉陶器、1118はタイの褐釉陶器の口縁部である。

1119～1133は主に肥前の本土産の近世陶磁器である。1119は肥前の染付碗で雲竜文を胴部に描き、1120は同一個体ないしは同種の製品で、特徴から17世紀後半の生産年代と考えられる。1121は初期伊万里の製品で17世紀前半の染付碗底部。1122は瓶等の口縁資料、1123は染付瓶の胴部資料で網目文を配するタイプで、17世紀後半以降の生産年代で沖縄でも出土例として一般的な資料である。1124は染付瓶胴部。1132・1133は肥前染付磁器の皿。1134は近代本土産染付磁器、瀬戸で生産されたものかと推定される。1135は17世紀後半～18世紀前半の京焼風陶器。1136は肥前陶器碗底部で17世紀代。1137・1138・1139は肥前陶器銅緑釉の碗・皿、1140は肥前陶器の鉢口縁で小片だが17世紀後半頃の製品と推される。

1134～1151は沖縄産陶器である。1134～1140は施釉陶器で、1137は灰釉、1134・1136は白化粧後透明釉、1135は鉄釉を施釉する陶器碗。1138は黒釉を内外面に施釉見込を釉剥ぎする資料で、底裏面に墨書を認める。1139は白化粧後透明釉体部を面取する杯。1140は褐色の釉を器外面に施釉後、胴部に黄釉の丸文を配置する。1141～1146は無釉の焼締陶器で、1141は火取等の筒型の口縁、1142～1143は壺・甕の口縁、1145は胴部を透かし彫によって装飾する器の口縁、1146は水鉢の口縁部資料である。1147～1151は陶質土器で、1147は蓋、1148は鍋の口縁、1149は燈明皿と考えられ口縁に煤が付着する。1150・1151は火炉の口縁と考えられる。



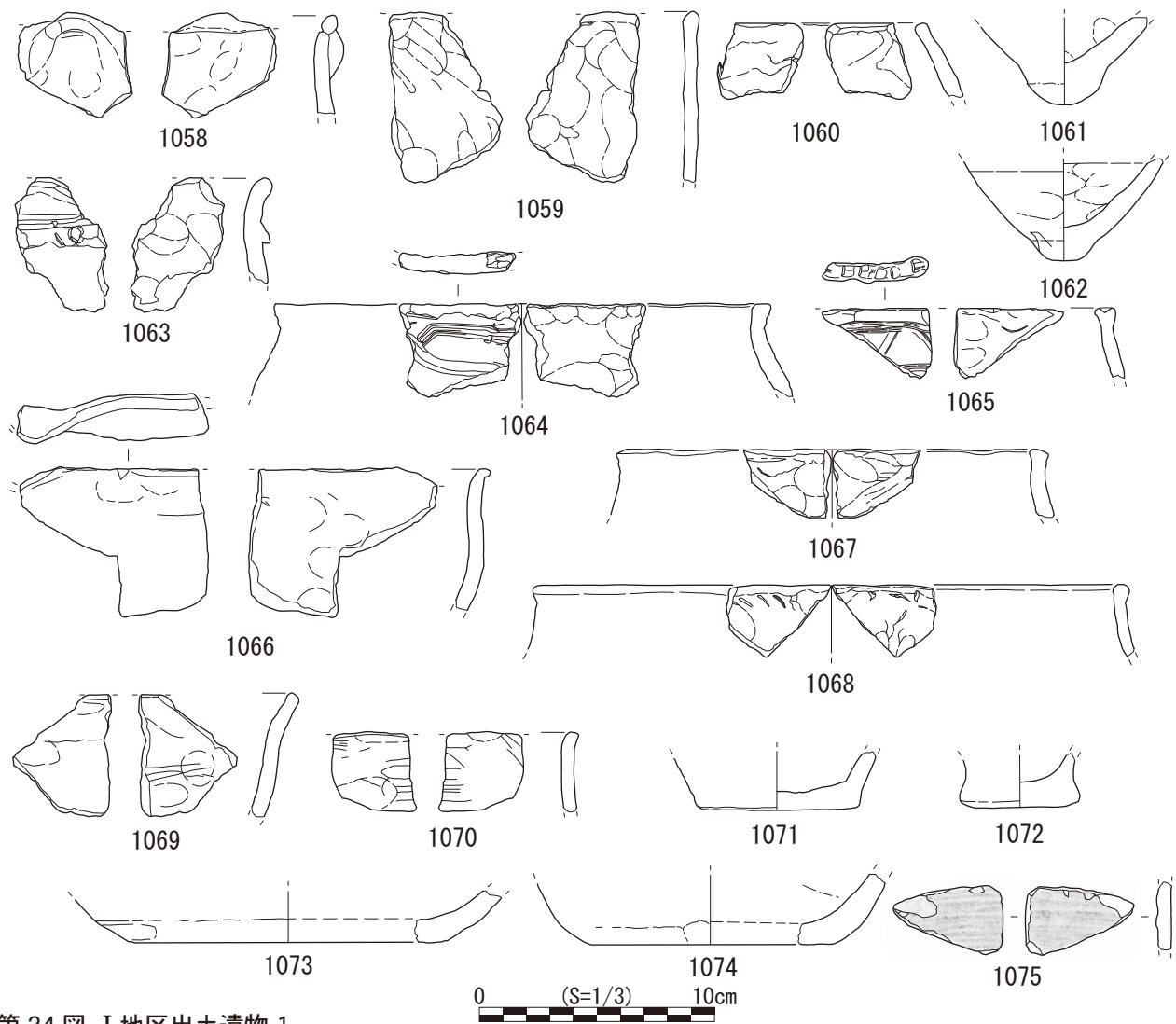
第22図 SE91出土遺物



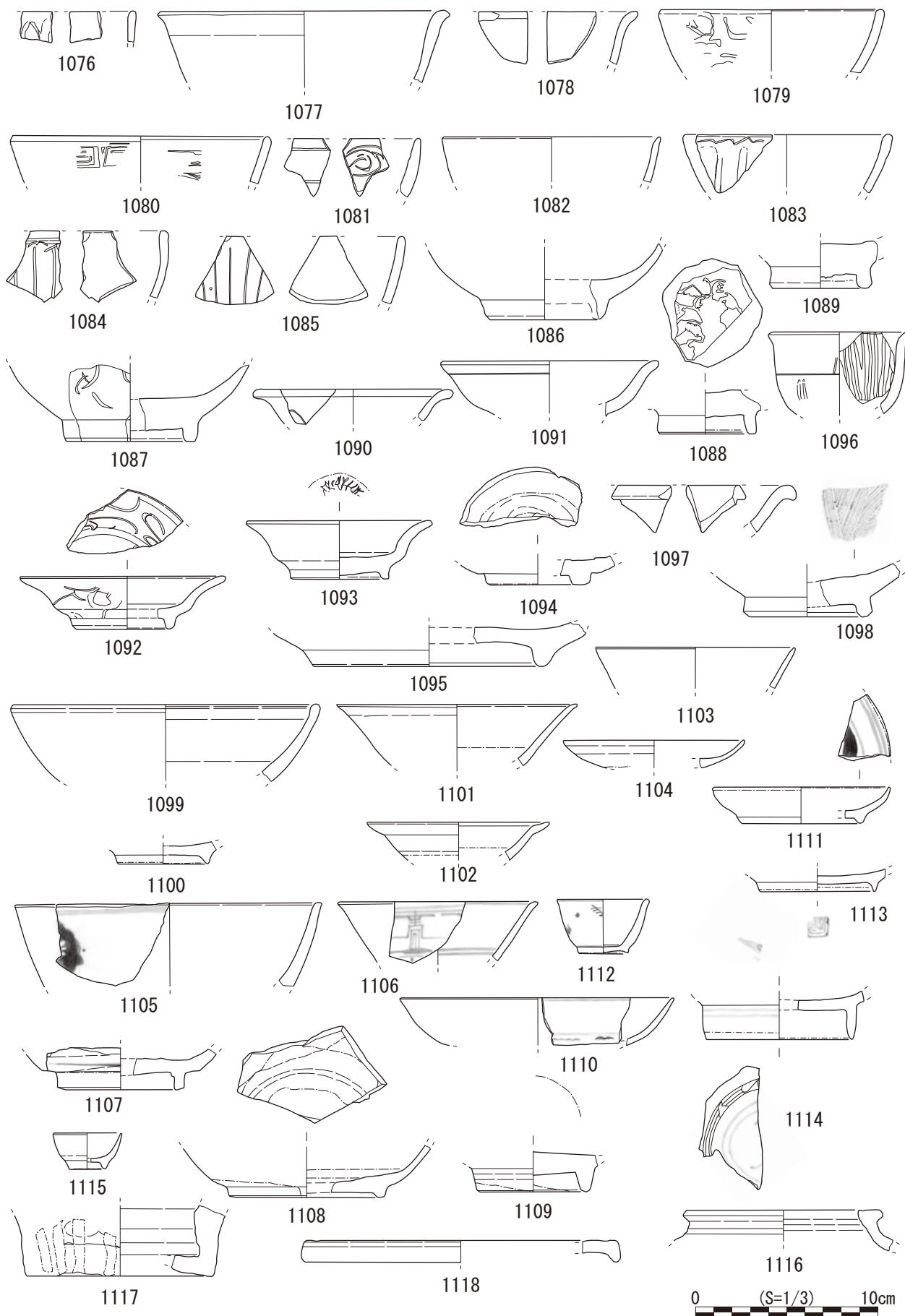
第23図 I地区遺構覆土出土遺物

1152・1153は砥石で、前者は置砥石、後者は携行用の提砥の破損品で、逆Y字状に紐通し孔を穿つ。1154・1155は黒色の円盤状の石製品で碁石等の遊戯具と考えられる。1156は本土産近代染付を円盤状に打ち欠いた製品。1157・1158は硯で、前者は縦7.7cm、横4.6cmの小型の石製の硯で、墨池部分の底に朱泥が残る。後者は人造石の硯とみられ、上端部を欠損する。1159は金属製の簪、1160は煙管吸い口である。1161・1162は石製の煙管雁首で、1163は陶製の雁首である。1164～1166は錢で本地区からは先に紹介した遺構の資料を含め総数6点が出土している。1164は宣和通宝で中国北宋(初鑄年1119年)の折二錢である。1165は咸平元宝で北宋(初鑄年998年)。1166は1/4程度欠損しているうえ文字も判読困難であることから錢種は不明である。

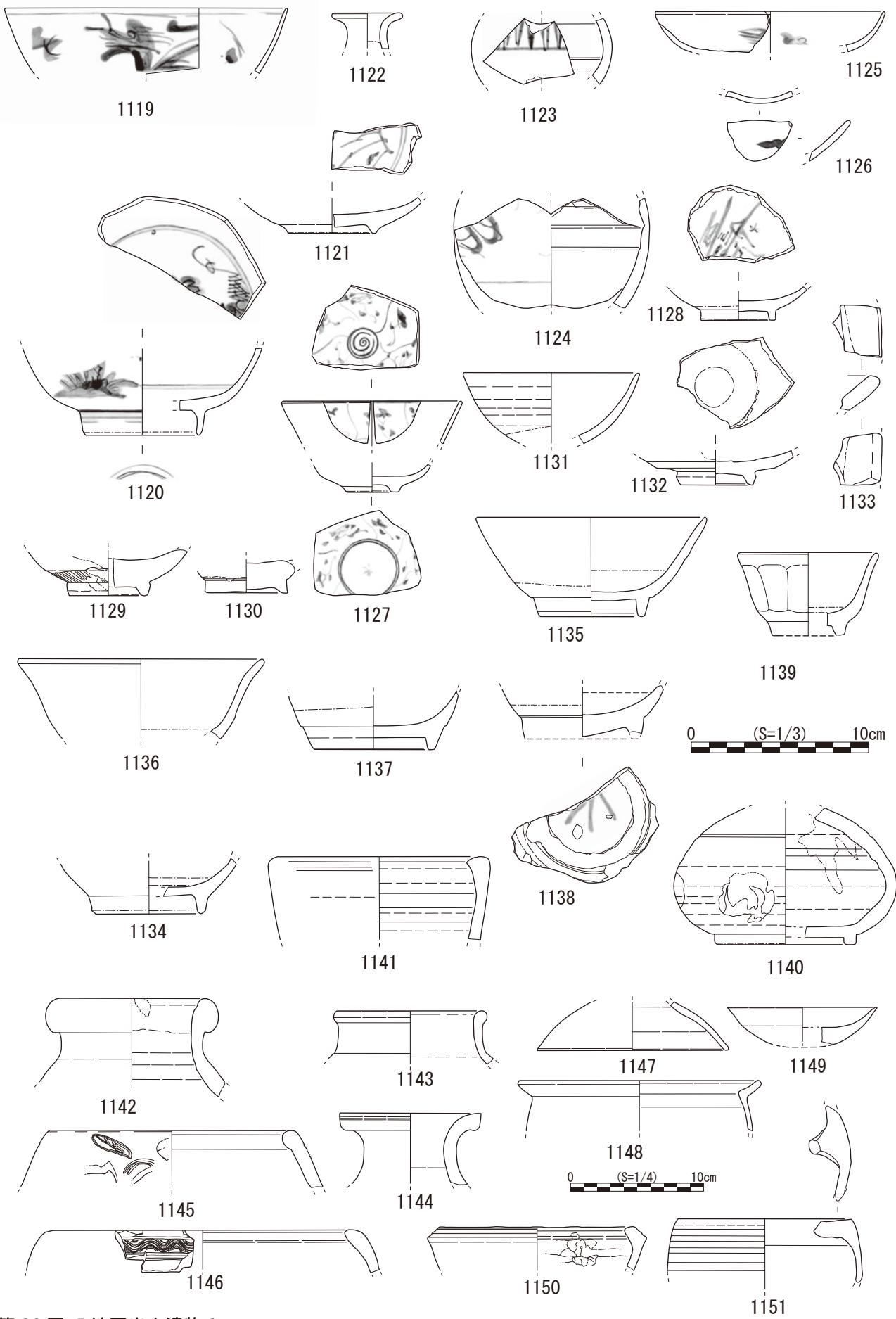
1167はSE91で出土したM1905銃剣(1035)とほぼ同品である。鞘に入っているがX線撮影の観察により両刃と考えられる。刃長は鞘に収まるため推算28cm、鞘に入れた状態の全長は40cmを測る。第二次世界大戦時に製造された米軍の装備にM1ガーランド自動小銃向けに開発された、M1銃剣(M1 Bayonet)が本出土品と同品と推察される。



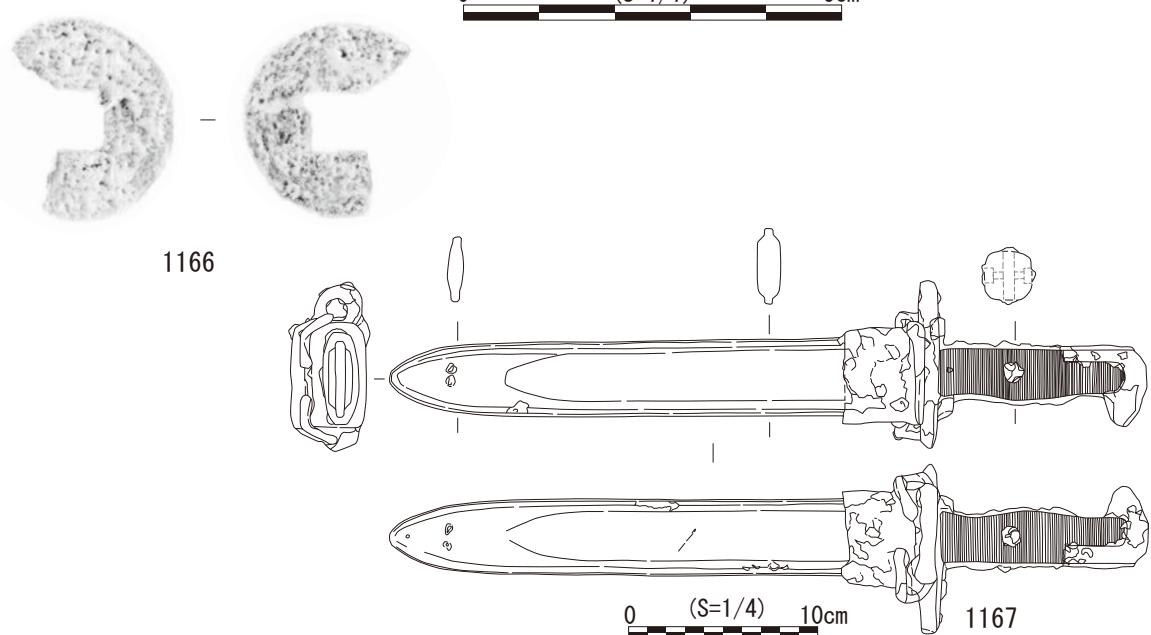
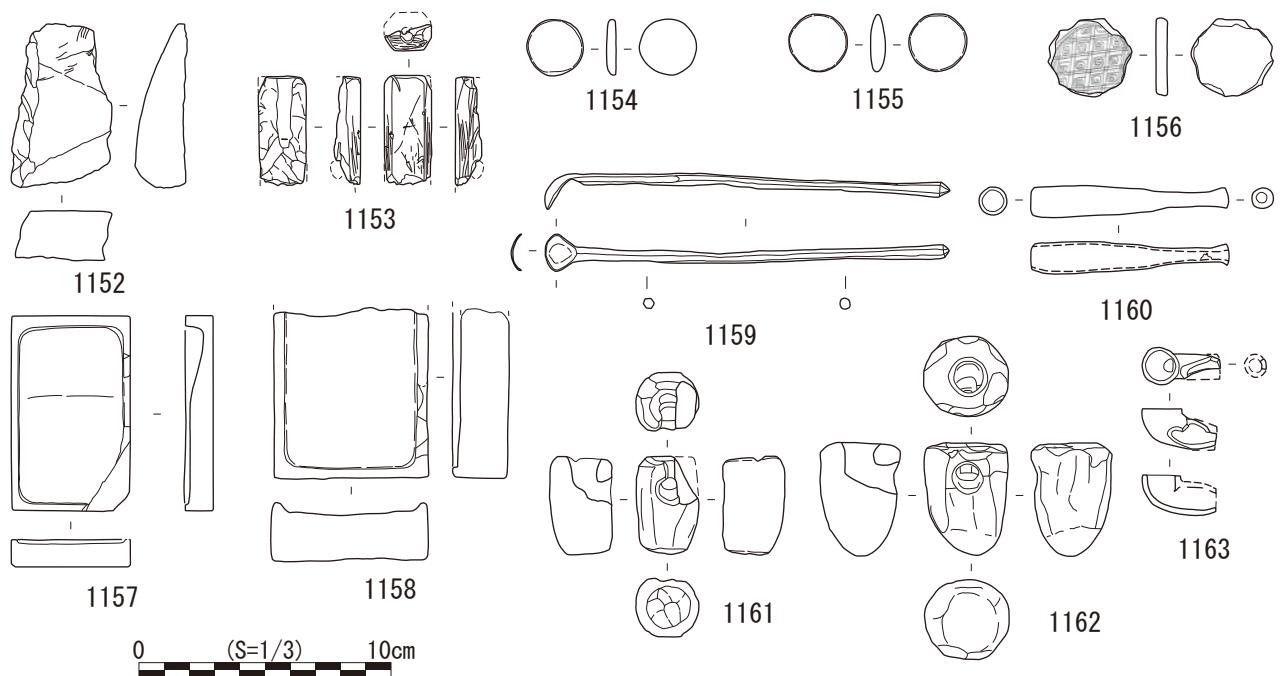
第24図 I地区出土遺物 1



第25図 I地区出土遺物2



第26図 I地区出土遺物3



第27図 I地区出土遺物4

第4表 I 地区遺物観察表 (1)

図 図版	掲載 No.	種別	分類	器種	部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	地区	グリッド	層序	遺構・ほか	Dot No.
第14図	1001	土器	後期後半	不明	胴部	—	—	—	I 地区	T-18	覆土	SL34	5
	1002	土器	後期後半	不明	底部	—	—	6.9	I 地区	T-18	覆土	SL34	6
	1003	白磁	不明	小杯	口縁	3.8	—	—	I 地区	T-18	覆土	SL34	4
第17図	1004	青花	漳州窯	碗	口縁	—	—	—	I 地区	S-19	覆土	SK11	—
	1005	中国 褐釉陶器	—	壺	口縁	7.0	—	—	I 地区	S-19	覆土	SK11-2	—
	1006	錢貨	寛永通宝	—		直径：2.4	重量：2.4g		I 地区	S-19	覆土	SK11	1
	1007	錢貨	不明			直径：約2.6	重量：3.2g		I 地区	S-19	覆土	SK11	3
	1008	錢貨	不明			直径：2.4	重量：7.2g		I 地区	S-19	覆土	SK11	2
	1009	青磁	VI類	碗	口縁	—	—	—	I 地区	R-19~23	覆土	SK57	—
第19図	1010	青花	中国（清朝）	碗	口縁	14.0	—	—	I 地区	R-19~23	覆土	SK57	—
	1011	白磁	中国（清朝）	皿	完形	13.6	3.5	5.0	I 地区	R-19~23	覆土	SK57	—
	1012	染付	肥前系？	碗	底部	—	—	5.1	I 地区	R-19~23	覆土	SK57	—
	1013	白磁	D群	杯	口縁	4.6	—	—	I 地区	R-19~23	覆土	SK57	—
	1014	沖縄產 施釉陶器	—	急須	口縁	6.0	—	—	I 地区	R-19~23	覆土	SK57	—
	1015	”施釉陶器	—	香炉	口縁	11.0	—	—	I 地区	R-19~23	覆土	SK57	—
	1016	沖縄產無釉陶器	—	擂鉢	口縁	21.5	—	—	I 地区	R-19~23	覆土	SK57	—
	1017	”無釉陶器	—	灯明皿	完形	11.2	2.1~2.5	5.0	I 地区	R-21	覆土	SK57-1	17, 18
	1018	”無釉陶器	—	火炉	口縁	14.2	—	—	I 地区	R-19~23	覆土	SK57	—
	1019	”無釉陶器	—	壺	底部	—	—	12.0	I 地区	R-21	覆土	SK57-1	13
	1020	”無釉陶器	—	擂鉢	底部	—	—	8.7	I 地区	R-21	覆土	SK57-1	15
第21図	1021	煙管	石製	雁首	完形	全長：約3.5	幅：2.6	火皿内径：1.5 羅宇接続内径：欠損 重量：28.2g	I 地区	R-19~23	覆土	SK57	—
	1022	煙管	陶製	雁首	完形	全長：約3.2	火皿内径：1.5 羅宇接続内径：— 重量：5.2g	I 地区	R-19~23	覆土	SK57	—	
第22図	1023	土器	後期後半	甕	口縁	—	—	—	I 地区	Q-11	覆土	SK90	—
	1024	青磁	IV~V類	碗	口縁	14.0	—	—	I 地区	Q-11	覆土	SK90	—
	1025	青花	中国（徳化）	小杯	口縁	5.0	—	—	I 地区	Q-11/12	覆土	SK90	—
	1026	青花	中国（徳化）	碗	口縁	—	—	—	I 地区	Q-11	覆土	SK90	—
	1027	青花	中国（清朝）	碗	底部	—	—	8.5	I 地区	Q-11	覆土	SK90	—
	1028	沖縄產 無釉陶器	—	碗	口縁	14.6	—	—	I 地区	Q-11	覆土	SK90	—
	1029	”無釉陶器	—	擂鉢	口縁	32.2	—	—	I 地区	Q-11	覆土	SK90	—
第23図	1030	土器	宮古式土器？	壺？	底部	—	—	—	I 地区	R-15/16	覆土	SE91	—
	1031	沖縄產 施釉陶器	白化粧	小碗	完形	8.2	4.2	3.6	I 地区	R-15/16	覆土	SE91	—
	1032	”無釉陶器	—	不明	底部	18.0	—	—	I 地区	R-15/16	覆土	SE91	—
	1033	瓦	赤瓦	軒丸瓦	瓦当	瓦当直径：15.3	厚み：1.5		I 地区	R-15/16	覆土	SE91	—
	1034	石製品	碁石	黒		長さ：2.2	幅：2.2	厚み：0.3 重量：2.6g	I 地区	R-15/16	覆土	SE91	—
	1035	銃剣	—	—	—	全長：52cm	刀部幅：3.0cm 刀部厚さ：0.5cm		I 地区	R-17	覆土	SE91	—
第25図	1036	貝製品	錘	—		長さ：6.6	幅：6.6	厚み：0.5 重量：25.2g 孔径縦：— 横：3.0	I 地区	S-19	覆土	SP04-2	—
	1037	中国褐釉 陶器	—	壺	底部	—	—	12.1	I 地区	T-20	覆土	SK08	—
	1038	青磁	V類	皿	底部	—	—	5.6	I 地区	R/S-22/23	覆土	SK12	—
	1039	キセル	陶器	雁首		全長：3.7	幅：—	火皿内径：1.1 羅宇接続内径：欠損 重量：6.6g	I 地区	S-22	覆土	SK13	—
	1040	土器	後期後半	甕	口縁	—	—	—	I 地区	S-20	覆土	SK15	—
	1041	土器	後期後半	不明	胴部	—	—	—	I 地区	S-20	覆土	SK15	—
	1042	青磁	VI類	碗	口縁	13.0	—	—	I 地区	T-20/21	覆土	AB16	—
	1043	白磁	不明	杯	口縁	4.0	—	—	I 地区	S-23/24	覆土	SK29	—
	1044	染付	肥前	碗	底部	—	—	約6.0	I 地区	S-22	覆土	SP29	—
	1045	中国 明代青花	A群	皿	底部	—	—	4.1	I 地区	S/T-22/23	覆土	SK42	—
	1046	染付	肥前	皿	口縁	16.0	—	—	I 地区	S/T-22/23	覆土	SK42	—
	1047	肥前陶器	二彩刷毛目	大皿	口縁	17.8	—	—	I 地区	S-22	覆土	SK49	—
	1048	土器	グスク土器	不明	底部	—	—	—	I 地区	S-22	覆土	SK49、SP50	—
	1049	青磁	VII類	碗	口縁	16.0	—	—	I 地区	S-22	覆土	SK56	—
	1050	青磁	不明	瓶	胴部	—	—	—	I 地区	S/T-20/21	覆土	SK66	—
	1051	青磁	VII類	碗	口縁	10.6	—	—	I 地区	S/T-21	覆土	SK67	—
	1052	青花	中国（清朝）	小杯	底部	—	—	2.0	I 地区	S/T-21	覆土	SK67	—
	1053	土器	後期後半	甕（片口）	口縁	19.0	—	—	I 地区	S-23	覆土	SK72、SP72-1	—
	1054	青磁	VII類	碗	底部	—	—	6.3	I 地区	S-24	覆土	SK76	—
	1055	”無釉陶器	—	擂鉢	底部	—	—	7.2	I 地区	R-14	覆土	SK89	27
第25図	1114	青花	中国（徳化）	碗	底部	—	—	8.0	I 地区	T-22/23	覆土	SK37	—
第23図	1056	沖縄產 無釉陶器	—	鉢	完形	35.00	25.00	15.90	I 地区	Q-13	覆土	SK89	—
	1057	”施釉陶器	灰釉	碗	底部	—	—	6.5	I 地区	Q-14	覆土	SK94	—

第5表 I 地区遺物觀察表 (2)

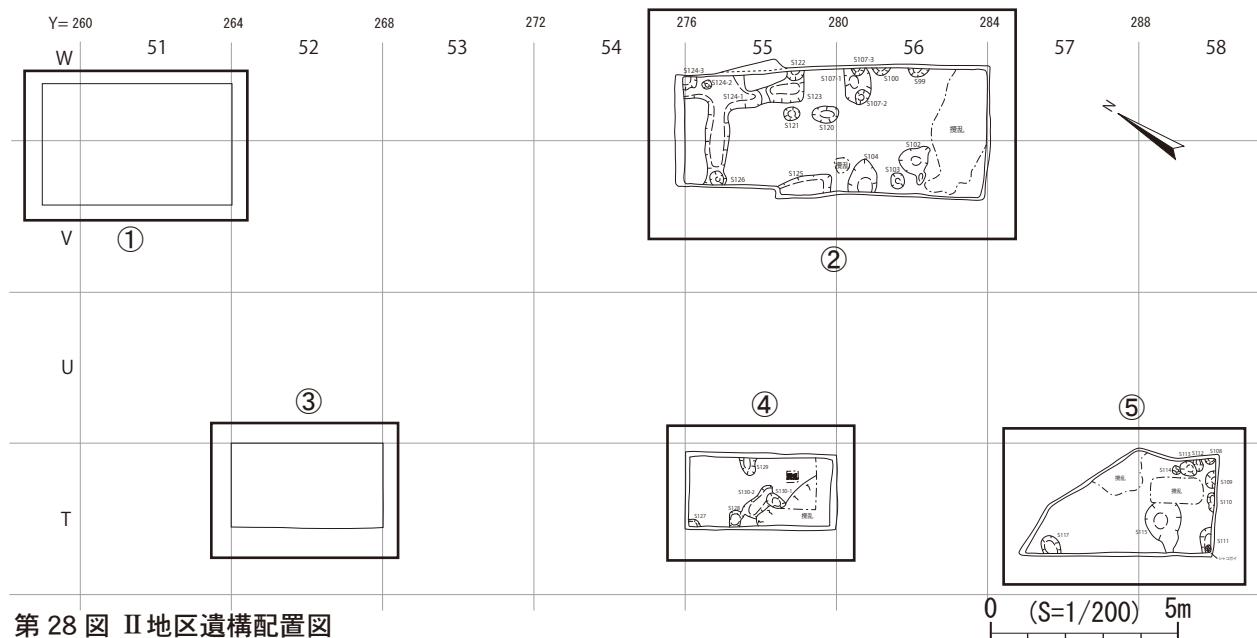
図 図版	掲載 No.	種別	分類	器種	部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	地区	グリッド	層序	遺構・ほか	Dot No.
第24図	1058	土器	後期前半	鉢(深鉢)	口縁	—	—	—	I 地区	T-21	II 上	—	—
	1059	土器	後期前半	鉢(深鉢)	口縁	—	—	—	I 地区	T-19	II 上	—	—
	1060	土器	後期前半	鉢(深鉢)	口縁	20.4	—	—	I 地区	S-18	II a	—	—
	1061	土器	後期前半	鉢(深鉢)	底部	—	—	—	I 地区	T-18	II	—	—
	1062	土器	後期前半	鉢(深鉢)	底部	—	—	—	I 地区	T-22	II 上	—	—
	1063	土器	後期後半	甕	口縁	—	—	—	I 地区	T-23	II 中	—	—
	1064	土器	後期後半	甕	口縁	21.0	—	—	I 地区	T-18	II 下	—	—
	1065	土器	後期後半	甕	口縁	—	—	—	I 地区	S-20	II 上	—	—
	1066	土器	後期後半	甕(片口)	口縁	—	—	—	I 地区	T-21	II 中	—	—
	1067	土器	後期後半	甕	口縁	18.4	—	—	I 地区	T-20	II 上	—	—
	1068	土器	後期後半	甕	口縁	25.4	—	—	I 地区	T-20	II 上	—	—
	1069	土器	後期後半	甕	口縁	—	—	—	I 地区	U-20	I	—	—
	1070	土器	後期後半	甕	口縁	—	—	—	I 地区	T-21	II 中	—	—
	1071	土器	後期後半	甕	底部	—	—	7.2	I 地区	T-19	II 上	—	—
	1072	土器	後期後半	甕	底部	—	—	5.0	I 地区	T-22	II 上	—	—
	1073	土器	グスク土器	不明	底部	—	—	13.2	I 地区	T-22	II 上	—	—
	1074	土器	グスク土器	不明	底部	—	—	10.3	I 地区	T-22	II 上	—	—
	1075	カムイヤキ	—	不明	胴部	—	—	—	I 地区	T-21	II 上	—	—
第25図	1076	青磁	IV類	碗	口縁	—	—	—	I 地区	T-22	II 上	—	—
	1077	青磁	IV類	碗	口縁	16.0	—	—	I 地区	S-22	II 中	—	—
	1078	青磁	IV類	碗	口縁	—	—	—	I 地区	T-24	II 中	—	—
	1079	青磁	V類(雷文)	碗	口縁	12.2	—	—	I 地区	S-24	II 上	—	—
	1080	青磁	—	碗	口縁	14.0	—	—	I 地区	T-23	I	—	—
	1081	青磁	V類(有文)	碗	口縁	—	—	—	I 地区	S-24	II a	—	—
	1082	青磁	V類(有文)	碗	口縁	12.0	—	—	I 地区	S-22	I	—	—
	1083	青磁	VI類(細蓮弁)	碗	口縁	11.4	—	—	I 地区	R-19	II a	—	—
	1084	青磁	VI類(細蓮弁)	碗	口縁	—	—	—	I 地区	T-23	II 上	—	—
	1085	青磁	IV類(細蓮弁)	碗	口縁	—	—	—	I 地区	S-23	II 上	—	—
	1086	青磁	IV類	碗	底部	—	—	6.0	I 地区	T-23, S-20 R-23	II 上	—	—
	1087	青磁	V類	碗	底部	—	—	7.0	I 地区	S-24	II a	—	—
	1088	青磁	VI類	碗	底部	—	—	5.4	I 地区	S-21	II 上	—	—
	1089	青磁	VI類	碗	底部	—	—	5.3	I 地区	T-22	II 上	—	—
	1090	青磁	口折皿	皿	口縁	10.6	—	—	I 地区	S-19	II 上	—	—
	1091	青磁	外反皿	皿	口縁	11.8	—	—	I 地区	不明	I	—	—
	1092	青磁	腰折皿	皿	完形	11.3	2.9	5.1	I 地区	T-24	II 上	—	—
	1093	青磁	腰折皿	皿	完形	10.0	3.0	5.4	I 地区	T-22	II 上	—	—
	1094	青磁	粗製碗	碗	底部	—	—	5.2	I 地区	不明	I	—	—
	1095	青磁	—	盤	底部	—	—	12.6	I 地区	S-18	II 中	—	—
	1096	青磁	—	杯	口縁	7.6	—	—	I 地区	Q-11	II a	—	—
	1097	青磁	—	鉢	口縁	—	—	—	I 地区	T-18	II 上	—	—
	1098	青磁	—	擂鉢	底部	—	—	6.4	I 地区	T-23	II 上	—	—
	1099	白磁	C群	碗	口縁	16.8	—	—	I 地区	Q-12	I	—	—
	1100	白磁	E群	皿	底部	—	—	5.0	I 地区	T-22	II 上	—	—
	1101	白磁	不明	碗	口縁	13.2	—	—	I 地区	T-20	II 中	—	—
	1102	白磁	不明	碗	口縁	10.0	—	—	I 地区	R-21	II 上	—	—
	1103	沖縄産施釉陶器	灰釉	碗	口縁	10.8	—	—	I 地区	T-22	I	—	—
	1104	白磁	不明	皿	口縁	10.0	—	—	I 地区	S-23	II 上	—	—
	1105	中国清代青花	—	碗	口縁	16.6	—	—	I 地区	T-22/23	II 最下	—	—
	1106	中国清代青花	—	碗	口縁	10.8	—	—	I 地区	R-15	II a	—	—
	1107	中国清代青花	—	碗	底部	—	—	6.1	I 地区	T-21	II 上	—	—
	1108	白磁	不明	碗	底部	—	—	8.2	I 地区	S-23	II 中	—	—
	1109	沖縄産施釉陶器	染付	碗	底部	—	—	5.8	I 地区	R-21~19	II 最下	—	—
	1110	中国明代青花	E群	皿	口縁	15.0	—	—	I 地区	S-21	II 中	—	—
	1111	中国清代青花	—	皿	完形	9.6	2.0	6.5	I 地区	R-21	II 中	—	—
	1112	中国清代青花	—	小杯	完形	5.0	3.0	2.7	I 地区	S-20	I	—	—
	1113	中国明代青花	E群	皿	底部	—	—	6.3	I 地区	T-22/23	II	—	—
	1114	青花	中国(德化)	碗	底部	—	—	8.0	I 地区	T-22/23	II	—	—
	1115	中国瑠璃釉	徳化	小杯	完形	3.7	2.0	2.0	I 地区	S-21	II 上	—	—
	1116	中国褐釉陶器	—	壺	口縁	10.6	—	—	I 地区	T-24	II 上	—	—
	1117	中国褐釉陶器	—	壺	底部	—	—	10.2	I 地区	T-24	II 上	—	—
	1118	タイ産褐釉陶器	—	壺	口縁	17.0	—	—	I 地区	不明	I	—	—

第6表 I 地区遺物觀察表 (3)

図 図版	掲載 No.	種別	分類	器種	部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	地区	グリッド	層序	遺構・ほか	Dot No.
第26図	1119	肥前磁器	染付	碗	口縁	16.0	—	—	I 地区	S-19	II 上	—	—
	1120	肥前磁器	染付	碗	底部	—	—	6.4	I 地区	R-19	II a	—	—
	1121	肥前磁器	染付	碗	底部	—	—	5.0	I 地区	R-11	II a	—	—
	1122	肥前磁器	白磁	瓶	口縁	3.8	—	—	I 地区	不明	I	—	—
	1123	肥前磁器	染付	瓶	胴部	—	—	—	I 地区	R-21	II 上	—	—
	1124	肥前磁器	染付	瓶	胴部	—	—	—	I 地区	R19~21	II 最下	—	—
	1125	肥前磁器	染付	皿	口縁	13.0	—	—	I 地区	S-19	II 最下	—	—
	1126	肥前磁器	染付	皿	口縁	—	—	—	I 地区	S-21	II 上	—	—
	1127	中国 清代青花	—	杯	完形	10.0	—	2.9	I 地区	T-19 U-19	II 上 I	—	—
	1128	肥前陶器	京焼風	碗	底部	—	—	4.2	I 地区	Q-13	I	—	—
	1129	肥前陶器	不明	碗	底部	—	—	5.4	I 地区	S-20	II 上	—	—
	1130	肥前陶器	銅綠釉	碗	底部	—	—	4.5	I 地区	T-22	II 上	—	—
	1131	肥前陶器	銅綠釉	碗	口縁	10.0	—	—	I 地区	S-22	II 中	—	—
	1132	肥前陶器	銅綠釉	皿	底部	—	—	4.0	I 地区	T-22	II 下	—	—
	1133	肥前陶器	施釉陶器	擂鉢	口縁	—	—	—	I 地区	T-23	II 中	—	—
	1134	沖縄産 施釉陶器	白化粧	碗	底部	—	—	6.0	I 地区	T-18	II 上	—	—
	1135	" 施釉陶器	掛け分け	碗	完形	12.8	5.6	5.8	I 地区	R-19	II a	—	—
	1136	" 施釉陶器	白化粧	碗	口縁	13.6	—	—	I 地区	R-11	II a	—	—
	1137	" 施釉陶器	灰釉	碗	底部	—	—	6.8	I 地区	T-18	II 下	—	—
	1138	" 施釉陶器	掛け分け	碗	底部	—	—	6.3	I 地区	S-18	II 下	—	—
	1139	" 施釉陶器	白化粧	小碗	完形	7.8	4.7	4.0	I 地区	T-19	II 上	—	—
	1140	" 施釉陶器	—	瓶	底部	—	—	7.8	I 地区	不明	不明	—	—
	1141	" 施釉陶器	—	香炉	口縁	11.8	—	—	I 地区	S-24	I	—	—
	1142	沖縄産 無釉陶器	—	大壺	口縁	11.0	—	—	I 地区	R-21	II 上	—	—
	1143	" 無釉陶器	—	小壺	口縁	11.0	—	—	I 地区	S-19	II 上	—	—
	1144	" 無釉陶器	—	中壺	口縁	10.6	—	—	I 地区	T-21	II 上	—	—
	1145	" 無釉陶器	—	不明鉢	口縁	18.8	—	—	I 地区	T-24	II 上	—	—
	1146	" 無釉陶器	—	浅鉢	口縁	22.8	—	—	I 地区	T-22	II 最下	—	—
	1147	沖縄産 陶質土器	—	蓋	端部	14.4	—	—	I 地区	R-15	II a	—	—
	1148	" 陶質土器	—	鍋	口縁	18.0	—	—	I 地区	Q-11	II a	—	—
	1149	" 陶質土器	—	灯明皿	完形	11.2	推定: 3.0	—	I 地区	T-18	II 上	—	—
	1150	" 陶質土器	—	火炉	口縁	14.6	—	—	I 地区	不明	I	—	—
	1151	" 陶質土器	—	火炉	口縁	13.0	—	—	I 地区	Q-12	II	—	—
第27図	1152	石器	砥石	—	—	長さ: 6.5 幅: 0.4 厚さ: 2.0 重量: 52.7g			I 地区	T-22	II 上	—	—
	1153	石器	砥石	提砥	—	長さ: 4.2 幅: 1.9 厚さ: 1.0 重量: 11.5g			I 地区	R-22	II 上	—	—
	1154	石製品	碁石	—	—	長さ: 2.2 幅: 2.25 厚さ: 0.4 重量: 3.6g			I 地区	不明	不明	—	—
	1155	石製品	碁石	—	—	長さ: 2.3 幅: 2.3 厚さ: 0.6 重量: 3.7g			I 地区	P-12	II a	—	—
	1156	円盤状製品	—	—	—	長さ: 3.1 幅: 3.4 厚み: 約0.5 重量: 7.2g			I 地区	不明	I	—	—
	1157	石製品	硯	—	—	長さ: 7.8 幅: 4.7 厚さ: 1.1 重量: 81.3g			I 地区	R-16	II a	—	—
	1158	石製品	硯	—	—	長さ: 約6.8 幅: 6.1 厚さ: 2.2 重量: 151.4g			I 地区	S-24	II a	—	—
	1159	金属製品	簪	—	—	長さ: 16 重量: 18.7g			I 地区	P-11	II a	—	—
	1160	金属製品	煙管	吸口	—	全長: 約7.9 幅: 1 吸い口: 約0.9 羅宇接続内径: 0.4 重量: 19.0g			I 地区	S-22	II 上	—	—
	1161	石製品	煙管	雁首	—	全長: 約3.9 幅: 2.5 火皿内径: 1 羅宇接続内径: 1.1 重量: 26.4g			I 地区	R-21	II 中	—	—
	1162	石製品	煙管	雁首	—	全長: 約4.5 幅: 3.3 火皿内径: 1.5 羅宇接続内径: 1.2 重量: 53.8g			I 地区	T-21	III	—	—
	1163	陶製	煙管	雁首	—	全長: 約3.1 幅: 1.2 火皿内径: 1.2 羅宇接続内径: 1 重量: 3.0g			I 地区	不明	I	—	—
	1164	銭貨	宣和通宝 (折二)	北宋 初鑄1119	完形	直径: 3.0 重量: 5.8g			I 地区	Q-13	I	—	23
	1165	銭貨	咸平元宝	北宋 初鑄998	完形	直径: 2.6 重量: 3.6g			I 地区	T-23	II 上	—	—
	1166	銭貨	□□元宝	—	一部欠損	直径: 2.7 重量: 2.2g			I 地区	T-23	II 上	—	—
	1167	銃剣	—	—	—	全長: 40.0 鞘部幅: 4.0 鞘部厚さ: 1.0			I 地区	S-24	I 層	—	—

第2節 II地区の調査成果

II地区は調査域東側にあって、住宅街に位置するため、生活導線確保等の制約からいくつかのグリッドを部分的に調査することとなった。調査は①V/W-50/51、②V/W-55/56、③T-52、④T-55、⑤T-57/58の5つに分けて行い(第28図)、③T-52→②V/W-55/56→⑤T-57/58→①V/W-50/51→④T-55→の順で調査を実施した。層序は試掘調査成果を鑑みてI層の表土、II層の包含層としIII層は地山となる。IIa層は客土ではないがI地区を参考に近代の遺物を含む包含層であることからIIa層として遺物を回収している。なお、I層の表土層はバックホーを用いて除去し調査を開始した。調査では土坑32基を確認している。I地区同様、遺構の残存状況は良好ではないものの、一部に特徴的な遺構を検出することができたので、以下グリッド毎に詳述する。出土遺物の集計は第7表に示した。



第28図 II地区遺構配置図

1 V/W-50/51 グリッド (第28図①)

V/W-50/51グリッドは全体で現代の土木工事に伴う著しい破壊を受けていた為、すべてが攪乱層でありプライマリーな遺物包含層や遺構を確認することはできなかった。攪乱層中より計119点の遺物を回収している。

2 V/W-55/56 グリッド (第28図②)

(1)層序(第29図)

I層:現代の表土層および近現代の開発に伴う造成層。バラスやコンクリート片、ガラス片、赤瓦など近現代の遺物を多数含む。土色は明褐色(7.5YR5/6)を呈しており、土は固く締まっている。

IIa層:混砂土層。II地区全域に存在しており、客土ではないものの大部分において近現代の開発に伴う破壊を受けている堆積層。大小の礫片を多数含むと共に近現代の遺物を含むが、一部では貝塚時代後期土器およびグスク土器も少量含む。土色は黒褐色(2.5Y3/1)を呈し、土の締りは弱い。

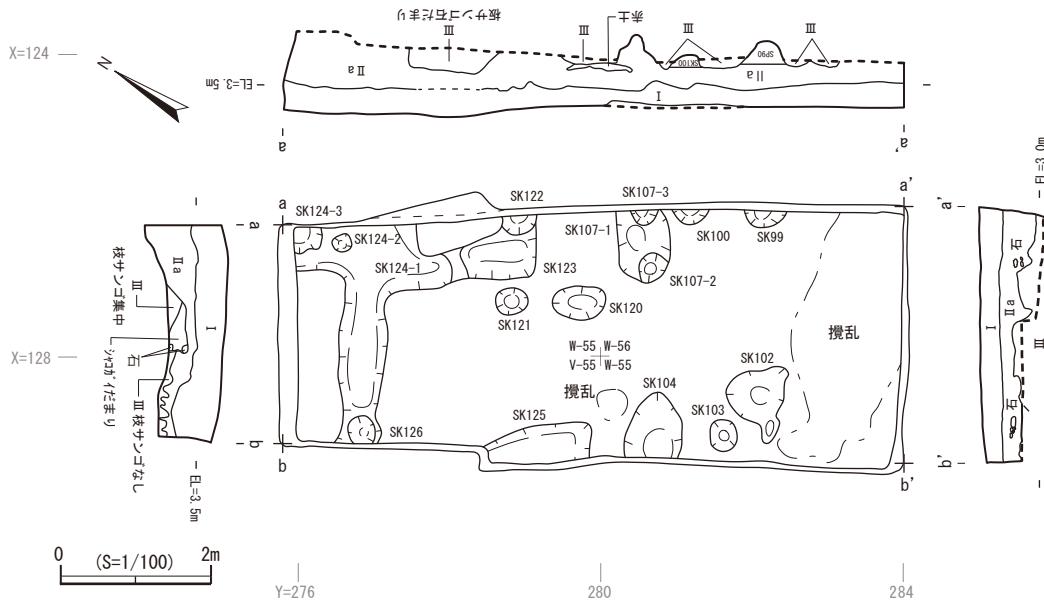
III層:混礫白砂層。海砂と思われ調査区全域に見られる。小貝や枝サンゴを多く含むとともに礫を多く含む。土色は暗灰黄色(2.5Y4/2)を呈し、土の締りは弱い。

第7表 II 地区出土遺物集計表

分類	器形	部位	①V・W -50・51	②V・W-55・56						③T-52			④T-55				⑤T-57・58					総計		
				I	IIa	II	II下	遺構	小計	I	II	小計	I	IIa	遺構	小計	I	II	IIa	SK115	SK117			
土器	後期後半	くびれ平底	口縁							1	1		1		1	3				3		5		
		胴部		3	1	7		3	14	1	1		8	4	12	4	8		5	1	13	45		
		頸部								1			1		1					1		2		
	グスク土器	鍋	口縁														1	1					2	
		口縁											1		1								1	
		胴部			1			1					1		1		1		1				4	
		胴部	滑石混入										1		1		1						2	
		底部				1			1														1	
カムイヤキ	不明	胴部											1		1									
青磁	VI類 細蓮弁	碗	口縁										1		1								1	
		口縁											1		1								1	
		胴部											1		1								1	
	VI-VII類	碗	口縁		1				1									3		3		4		
		胴部															3	4				7		
	V-VI類 稜花	皿	口縁														1						1	
		蓋	胴部														1						1	
		不明	口縁														1						6	
		胴部		3	2			5		1	1						1						7	
白磁	不明	不明	口縁			2			2									2						4
			胴部			1	5		6								1	1					8	
			底部			1			1														1	
中国	明青花	不明	口縁			2			2				2		2		1	2					7	
中国褐釉陶器	不明	胴部		1	2			3					1	1	2								5	
肥前陶磁	銅緑釉陶器	碗・皿	口縁							1	1												1	
		胴部		1													1						2	
	染付	不明	口縁														1						1	
		胴部															2						2	
中国	清朝青花	不明	口縁	1	1	5	2		8	10	10	3	3	1	4			5						27
			胴部	1	1	1	2		1	5	8	8	4	4	2	3		5						23
			底部	1	1		1		2	1	1													3
不明	色絵	碗	口縁										1	1										1
			胴部										1	1										1
タイ産褐釉陶器	不明	胴部	口縁		1			1															1	
			胴部		1			1															1	
沖縄産施釉陶器	沖縄産褐釉陶器	碗・皿等	口縁	5						22	22												27	
		胴部	17						1	24	25												42	
	沖縄産施釉陶器	不明	口縁	2					3	3		4	4	8	14	16	2	30	1				5	
		胴部	3	8	5		4	19					8	1	1								60	
		底部	4	7		4	15						1	1									17	
沖縄産無釉陶器	沖縄産無釉陶器	不明	口縁	1	1	7		9					4	4	3	8		11	24				1	
		胴部	3	8	5	4	19					8	1	1	14	16	2	30	1				60	
	擂鉢	蓋	1				1																1	
		胴部	2			2		2		3	3												1	
沖縄産	陶質土器 (アカムヌー)	不明	口縁			1		1		1	1	1	1	1	2	2			4				11	
		胴部	2	2	2	4		2	10	11	11	5	5	5	2								3	
		底部	1						1	1												2		
本土産	苗代川	不明	口縁									1	1										1	
	統制陶器	碗	完形						1														1	
	近代陶器	不明	口縁		1	1	1		3	1	1												4	
			胴部		1	5	1	1	8														8	
本土産近代磁器	砥部焼	碗・皿	口縁	5						1	1		2	2	4				4				12	
		胴部	2						2	2													4	
	染付	不明	口縁	2	1			3															3	
		底部	1				1																1	
	碗・皿等	口縁	14	2	10		2	14	7	7						18	6			24			59	
		胴部	15	5	8	1		14	12	12						24	13			37			78	
		底部	12	2	1	2		5	4	4						7	3			10			31	
	不明	口縁										1	6	7									7	
		胴部										11	11										11	
		底部										2	2										2	
赤瓦	体部	6	2		3		1	6				1	12	13	5	1				6			31	
陶片加工品	完形				1			1															1	
貝製品	貝錘	完形	1	1	4			5															7	
石器	敲打器類				1			1											1	2		3		
近代銭貨	アルミ円形	完形	1																				1	
錢文不明																								

※貝類・骨は集計省略する。

119 39 44 112 3 20 218 1 147 148 3 86 5 94 119 107 1 10 1 230 818



第29図 V/W-55/56 遺構詳細図

第8表 II地区 V/W-55/56 遺構所見表

No.	遺構名 記号	グリッド	検出面	計測値 (cm)			覆土				團結度
				長軸	短軸	深さ	土色	記号	粒度	粒子の組成	
99	SK	W-56	III層上面	50	30	24	暗オリーブ褐色	2.5Y3/4	極小	砂、礫、貝	弱い
100	SK	W-56	III層上面	40	27	11	暗オリーブ褐色	2.5Y3/4	極小	砂、礫、貝	弱い
102	SK	V-56	III層上面	100	70	35	暗オリーブ褐色	2.5Y3/4	極小	砂、礫、貝	弱い
103	SK	V-56	III層上面	33	32	22	暗オリーブ褐色	2.5Y3/4	極小	砂、礫、貝	弱い
104	SK	V-56	III層上面	76	57	23	暗オリーブ褐色	2.5Y3/4	極小	砂、礫、貝	弱い
105	SK	V-56	III層上面	140	50	31	暗オリーブ褐色	2.5Y3/4	極小	砂、礫、貝	弱い
107-1	SK	W-55	III層上面	101	72	16	暗オリーブ褐色	2.5Y3/4	極小	砂、礫、貝	弱い
107-2	SK	W-55	III層上面	40	34	27	暗オリーブ褐色	2.5Y3/4	極小	砂、礫、貝	弱い
107-3	SK	W-55	III層上面	33	25	42	暗オリーブ褐色	2.5Y3/4	極小	砂、礫、貝	弱い
120	SK	W-55	III層上面	74	43	16	暗オリーブ褐色	2.5Y3/4	極小	砂、礫、貝	弱い
121	SK	W-55	III層上面	40	25	9	暗オリーブ褐色	2.5Y3/4	極小	砂、礫、貝	弱い
122	SK	W-55	III層上面	35	14	28	暗オリーブ褐色	2.5Y3/4	極小	砂、礫、貝	弱い
123	SK	W-55/56	III層上面	100	53	28	暗オリーブ褐色	2.5Y3/4	極小	砂、礫、貝	弱い
124-1	SK	V/W-55	III層上面	288	54	26	暗オリーブ褐色	2.5Y3/4	極小	砂、礫、貝	弱い
124-2	SK	W-55	SK124-1底面	21	21	15	暗オリーブ褐色	2.5Y3/4	極小	砂、礫、貝	弱い
124-3	SK	W-55	SK124-1底面	30	25	14	暗オリーブ褐色	2.5Y3/4	極小	砂、礫、貝	弱い
125	SK	V-55	III層上面	103	31	17	暗オリーブ褐色	2.5Y3/4	極小	砂、礫、貝	弱い
126	SK	V-55	III層上面	38	30	23	暗オリーブ褐色	2.5Y3/4	極小	砂、礫、貝	弱い

(2) 遺構 (第29図)

V/W-55/56では土坑18基を検出している。その大部分は遺物を含まない不定形の落込みであったが、SK102・SK107-1は比較的保存状態が良好だったので以下に詳述する。

SK102 (旧SP102)

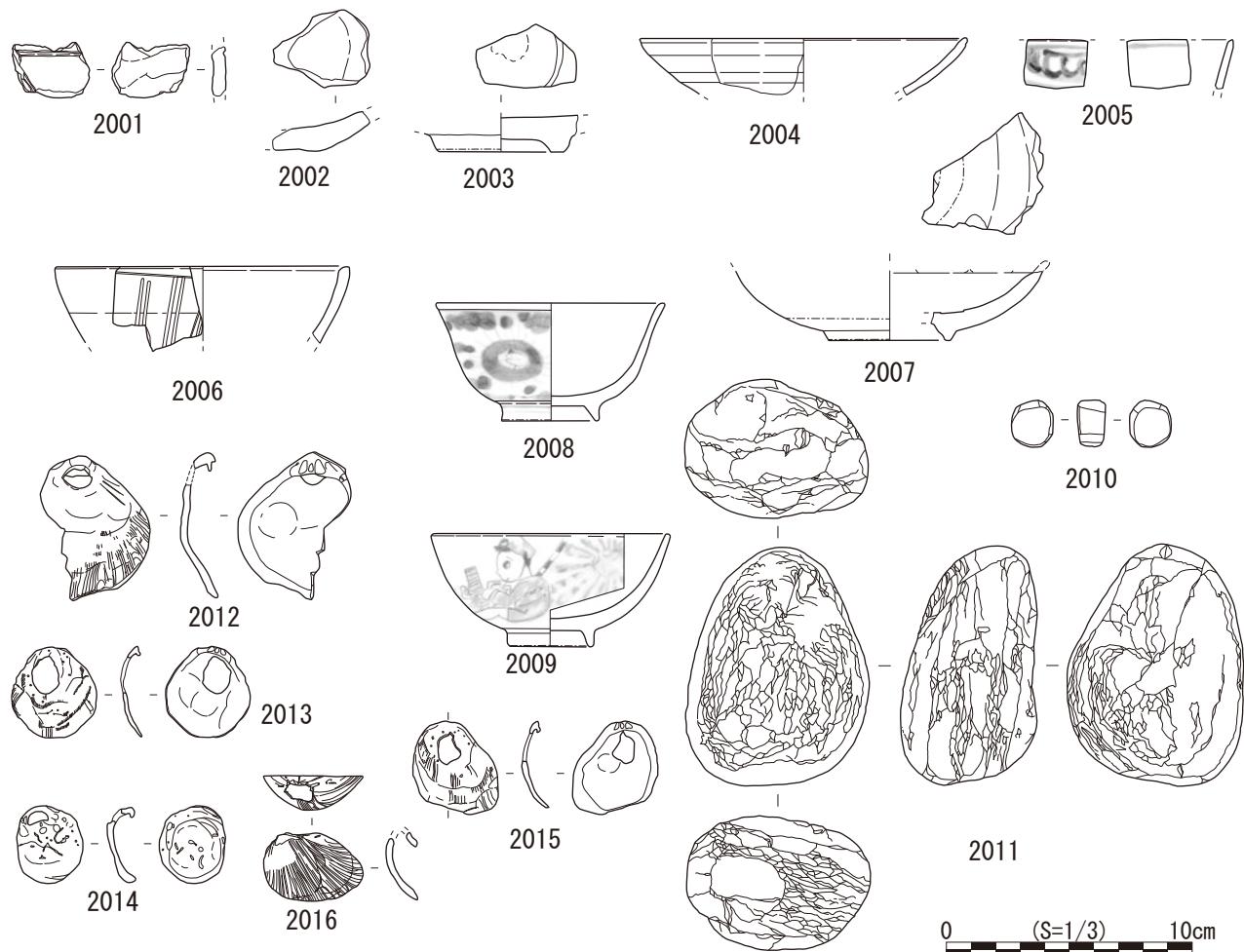
V-56グリッドの中央部に位置し長軸100cm、短軸70cm、深さ35cmの深い土坑で、暗オリーブ褐色(2.5Y3/4)を呈しIII層を掘り込む形で形成されており、小礫および貝混じりの締りの弱い砂層で覆われている。検出面はIII層。覆土からは貝塚時代後期土器1点および貝錘1点が出土している。

SK107-1

W-56グリッド南西側に位置し長軸101cm、短軸72cm、深さ16cmの浅い土坑で、暗オリーブ褐色(2.5Y3/4)を呈し、Ⅲ層を掘り込む形で形成されており、小礫および貝混じりの綿りの弱い砂層で覆われている。覆土からは貝塚時代後期土器1点、中国産褐釉陶器1点が出土している。また、SK107-1を掘り込む形でSK107-2・SK107-3が形成されているが、これらから人工遺物は回収されなかった。

(3) 遺物

遺物包含層及び土坑内覆土より218点の遺物が回収された。貝塚後期の土器と目される土器片が14点出土するが、いずれも胴部片である。小片ながら沈線文が施される資料が1点(2001)得られている。グスク土器と目される土器片が胴部1点、底部1点(2002)出土している。青磁VII類碗口縁で弁頭の無い細蓮弁を施す粗製品(2006)、青磁皿(2003)も粗造の製品である。白磁の口縁資料(2004)と漳州窯口縁部はいずれも清代の中国製品と考えられる。本土産の近世陶磁が出土、小碗は肥前系の小碗(2008)。肥前陶器の皿底部片で底径は5cmを測る(2007)。特徴的な資料として本土産近代陶磁器に統制期の製品と考えられる小碗(2009)が1点出土する。子ども用の碗と考えられる。陶片を円盤状に加工した資料(2010)が出土、用途は不明である。石器は敲石(2011)が1点出土する。貝錘(2012~2015)が5点出土全て図示した。2012~2015はメンガイ、2016はリュウキュウザルボウの右殻を利用し、殻頂部を穿孔し貝錘として利用したものと思われる。



第30図 V/W-55/56グリッド出土遺物

3 T-52 グリッド（第 28 図③）

T-52 グリッドは店舗前に位置する関係上、営業日を避けて定休日を利用して 1 日で掘削から埋戻しまで完了しなければならないという時間的制約があった。そのため、Ⅲ層上面を検出し東壁断面図を作成した時点で調査を終了し埋戻しを行った。

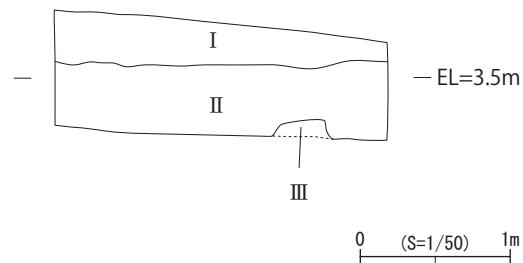
（1）層序

Ⅰ層：現代の表土層および近現代の開発に伴う造成層。バラスやコンクリート片、ガラス片、赤瓦など近現代の遺物を多数含む。土色は明褐色（7.5YR5/6）を呈しており、土は固く締まっている。

Ⅱ層：混砂土層。Ⅱ地区全域でまばらに見られる。1 cm～15 cm ほどの礫を少量含む。I 地区

のⅡ層に比べ、やや砂の混じる量が少ない。土色は黒褐色（2.5Y3/1）を呈し、土の締りは弱い。

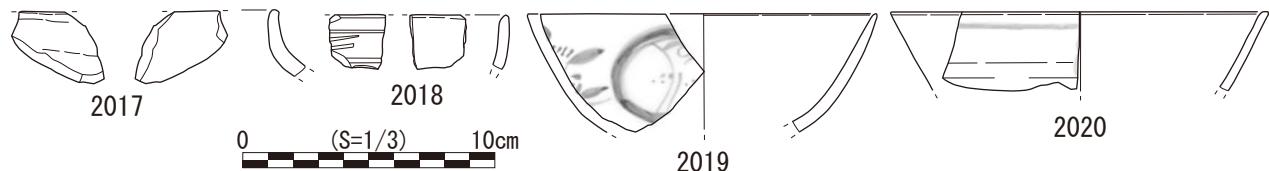
Ⅲ層：混礫白砂層。海砂と思われ調査区全域に見られる。小貝や枝サンゴを多く含むとともに礫を多く含む。土色は暗灰黄色（2.5Y4/2）を呈し、土の締りは弱い。



第 31 図 T-52 東壁断面図

（2）出土遺物

遺物包含層より 148 点の遺物を回収した。貝塚後期土器後半（くびれ平底）と目される土器片が 2 点出土しており、口縁部 1 点、底部 1 点が確認された。甕型土器の口縁部片資料（2017）は貝塚後期後半の土器片と考えられる。類別不明ながら青磁片（2018）の口縁部片 1 点（V 類？）が出土する。中国清代青花が口縁部片 10 点、胴部片 8 点、底部片 1 点出土する。2019・2020 はいずれも碗の口縁部片資料で清朝青花と考えられる。他にも、明代中国青花磁、肥前陶器、沖縄産陶器などが出土する。本土産陶磁としては、鹿児島の苗代川と目される口縁片 1 点が出土、本土産の近代磁器として砥部焼なども出土している。



第 32 図 T-52 出土遺物

4 T-55 グリッド（第 28 図④）

（1）層序

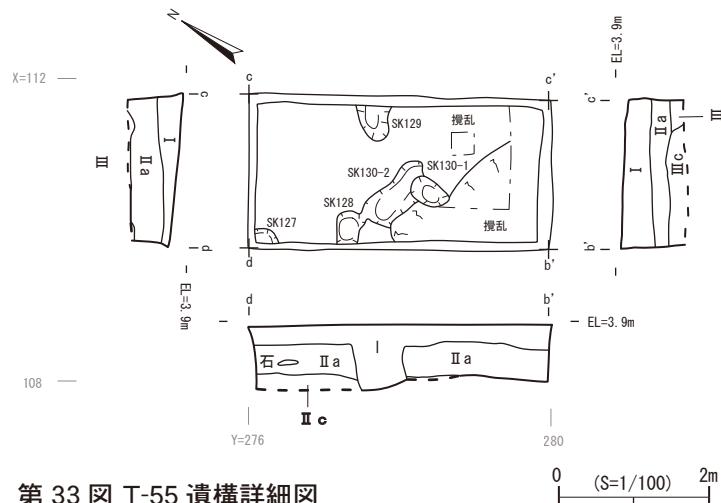
Ⅰ層：現代の表土層および近現代の開発に伴う造成層。バラスやコンクリート片、ガラス片、赤瓦など近現代の遺物を多数含む。土色は明褐色（7.5YR5/6）を呈しており、土は固く締まっている。

Ⅱa層：混砂土層。Ⅱ地区全域に存在しており、客土ではないものの大部分において近現代の開発および土木工事に伴う破壊を受けている堆積層。大小の礫片を多数含むと共に、近現代の遺物に加えて貝塚時代後期土器およびグスク土器も少量含む。土色は黒褐色（2.5Y3/1）を呈し、土の締りは弱い。

IIc層:混土砂層。III層にII層の堆積土が僅かに混じる。小貝が少量混じる。主に土色は暗オーリーブ褐色(2.5Y3/3)を呈し、土の締りは弱い。

III層:混礫白砂層。海砂と思われ、調査区全域に見られる。小貝や枝サンゴを多く含むとともに、礫を多く含む。土色は暗灰黄色(2.5Y4/2)を呈し、土の締りは弱い。

IIIc層:混礫砂層。地山である。小礫が混じる他、枝サンゴを大量に含む。土色はにぶい黄褐色(10YR7/4)を呈し、土の締りは非常に弱く脆い。



第33図 T-55 遺構詳細図

第9表 II地区 T-55 遺構所見

No.	記号	グリッド	検出面	計測値 (cm)			覆土				団結度	
							土色		層相			
				長軸	短軸	深さ	色	記号	粒度	粒子の組成		
127	SK	T-55	III層上面	29	22	20	黒褐色	10YR2/2	極小	砂、礫、貝	弱い	
128	SK	T-55	III層上面	40	29	14	黒褐色	10YR2/2	極小	砂、礫、貝	弱い	
129	SK	T-55	III層上面	49	38	23	黒色	10YR1.7/1	極小	砂、礫、貝	弱い	
130-1	SK	T-55	III層上面	50	17	32	黒色	10YR1.7/1	極小	砂、礫、貝	弱い	
130-2	SK	T-55	III層上面	102	41	16	黒色	10YR1.7/2	極小	砂、礫、貝	弱い	

(2) 遺構

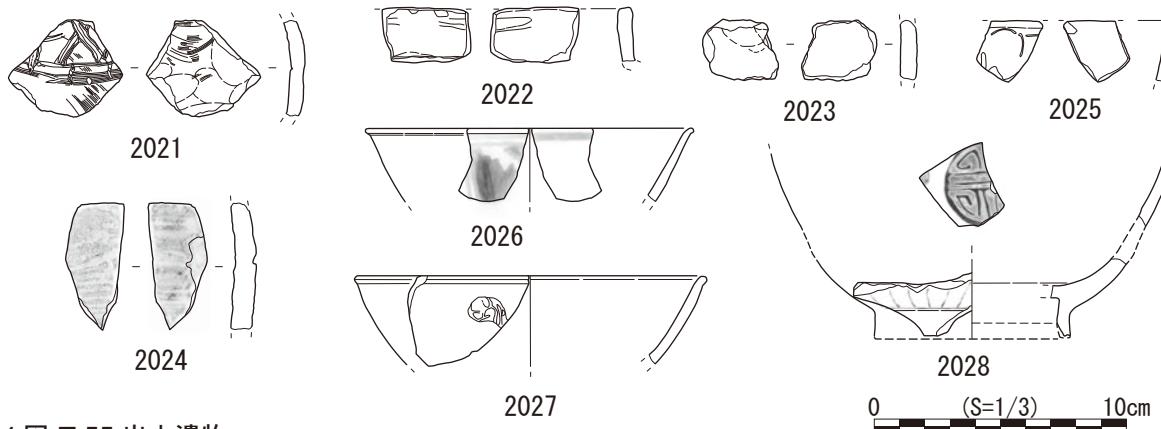
T-55グリッドでは土坑5基を確認している。覆土に遺物を含むのはSK128とSK130-1の2基のみであった。

SK128 T-55グリッドのほぼ中央に位置し、長軸40cm、短軸29cm、深さ14cmの橢円形状を有する用途不明の浅い土坑である。III層を浅く掘り込む形で形成されおり、黒褐色(10YR2/2)を呈し貝殻や小礫を含む締りの弱い砂層で覆われている。また、覆土から貝塚後期土器の胴部2点が出土している。

SK130-1(旧SK130) T-55グリッドのほぼ中央に位置し、長軸50cm、短軸17cm、深さ32cmの橢円形状を有する用途不明の土坑である。III層上面で検出されており、一部はSK130-2を掘り込む形で切り合っている。土坑内は黒褐色(10YR2/2)の砂層で、貝殻や小礫を含む締りの弱い堆積土で覆われている。また、土坑内から貝塚時代後期土器の胴部2点、中国褐釉陶器の胴部1点が出土している。

(3) 出土遺物

遺物包含層および遺構内覆土より94点の遺物を回収した。貝塚時代後期後半(くびれ平底)に類別される土器片が口縁部1点、胴部1点(2021)得られている。2021に図示した貝塚後期土器の胴部片は沈線による区画文が頸部に一条、これを格子状の文様を沈線で口縁部に施している。特徴から壺の頸部資料と目される。グスク土器は2022の壺型と考えられる口縁片と2023の胎土に滑石を含む胴部片が出土する。カムィヤキの胴部片1点が出土している



第34図 T-55出土遺物

(2024)。青磁のIV類細蓮弁に分類される破片が口縁部1点(2025)出土、VI類に分類される細蓮弁の碗口縁部資料。清代青花碗(2026)。産地不明ながら色絵と目される破片が口縁部1点、胴部1点、底部1点出土している同一個体と考えられ2027・2028に図示した。他にも、中国褐釉陶器、沖縄産施釉陶器、土産近代陶磁、赤瓦片が出土する。

5 T-57／58 グリッド (第28図⑤)

(1) T-57／58 グリッド層序

I層: 現代の表土層および近現代の開発に伴う造成層。バラスやコンクリート片、ガラス片、赤瓦など近現代の遺物を多数含む。土色は明褐色(7.5YR5/6)を呈しており、土は固く締まっている。

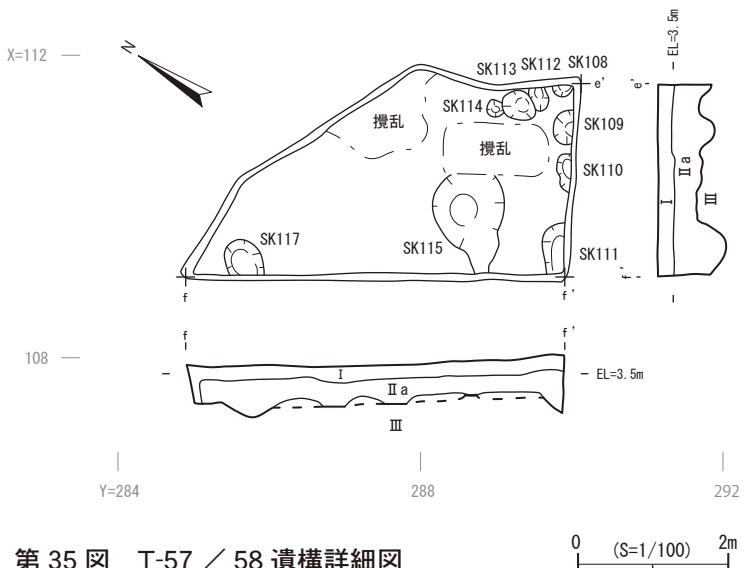
IIa層: 混砂土層。II地区全域に存在しており、客土ではないものの大部分において近現代の開発および土木工事に伴う破壊を受けている堆積層。大小の礫片を多数含むと共に、近現代の遺物に加えて貝塚時代後期土器およびグスク土器も少量含む。土色は黒褐色(2.5Y3/1)を呈し、土の締りは弱い。

III層: 混礫白砂層。海砂と思われ、調査区全域に見られる。小貝や枝サンゴを多く含むとともに礫を多く含む。土色は暗灰黄色(2.5Y4/2)を呈し、土の締りは弱い。

(2) 遺構

T-57／58グリッドでは土坑9基を検出しているが、覆土より遺物を回収できたのはSK117の1基のみであった。以下SK117について詳述する。

SK117 T-57グリッドの南側に位置し、長軸58cm、短軸50cm、深さ16cmの円形状を有する用途不明の土坑である。III層を浅く掘り込む形で形成されている。土坑内は暗オリーブ褐色(2.5Y3/4)を呈し、貝殻や小礫を含む締りの弱い堆積土で覆われている。土坑内からは貝塚時代後期土器の胴部が1点出土している。



第35図 T-57／58 遺構詳細図

第10表 II地区T-57／58遺構所見表

遺構名		グリッド	検出面	計測値 (cm)			覆土				団結度			
No.	記号			長軸	短軸	深さ	土色		層相					
							色	記号	粒度	粒子の組成				
108	SK	T-58	III層上面	28	19	13	暗オリーブ褐色	2.5Y3/4	極小	砂、礫、貝	弱い			
109	SK	T-58	III層上面	46	21	18	暗オリーブ褐色	2.5Y3/4	極小	砂、礫、貝	弱い			
110	SK	T-58	III層上面	46	15	5	暗オリーブ褐色	2.5Y3/4	極小	砂、礫、貝	弱い			
111	SK	T-58	III層上面	80	24	38	暗オリーブ褐色	2.5Y3/4	極小	砂、礫、貝	弱い			
112	SK	T-58	III層上面	25	19	9	暗オリーブ褐色	2.5Y3/4	極小	砂、礫、貝	弱い			
113	SK	T-58	III層上面	39	30	11	暗オリーブ褐色	2.5Y3/4	極小	砂、礫、貝	弱い			
114	SK	T-58	III層上面	22	22	10	暗オリーブ褐色	2.5Y3/4	極小	砂、礫、貝	弱い			
115	SK	T-58	III層上面	130	95	68	暗オリーブ褐色	2.5Y3/4	極小	砂、礫、貝	弱い			
117	SK	T-57	III層上面	58	50	16	暗オリーブ褐色	2.5Y3/4	極小	砂、礫、貝、軽石	弱い			

(3) 出土遺物

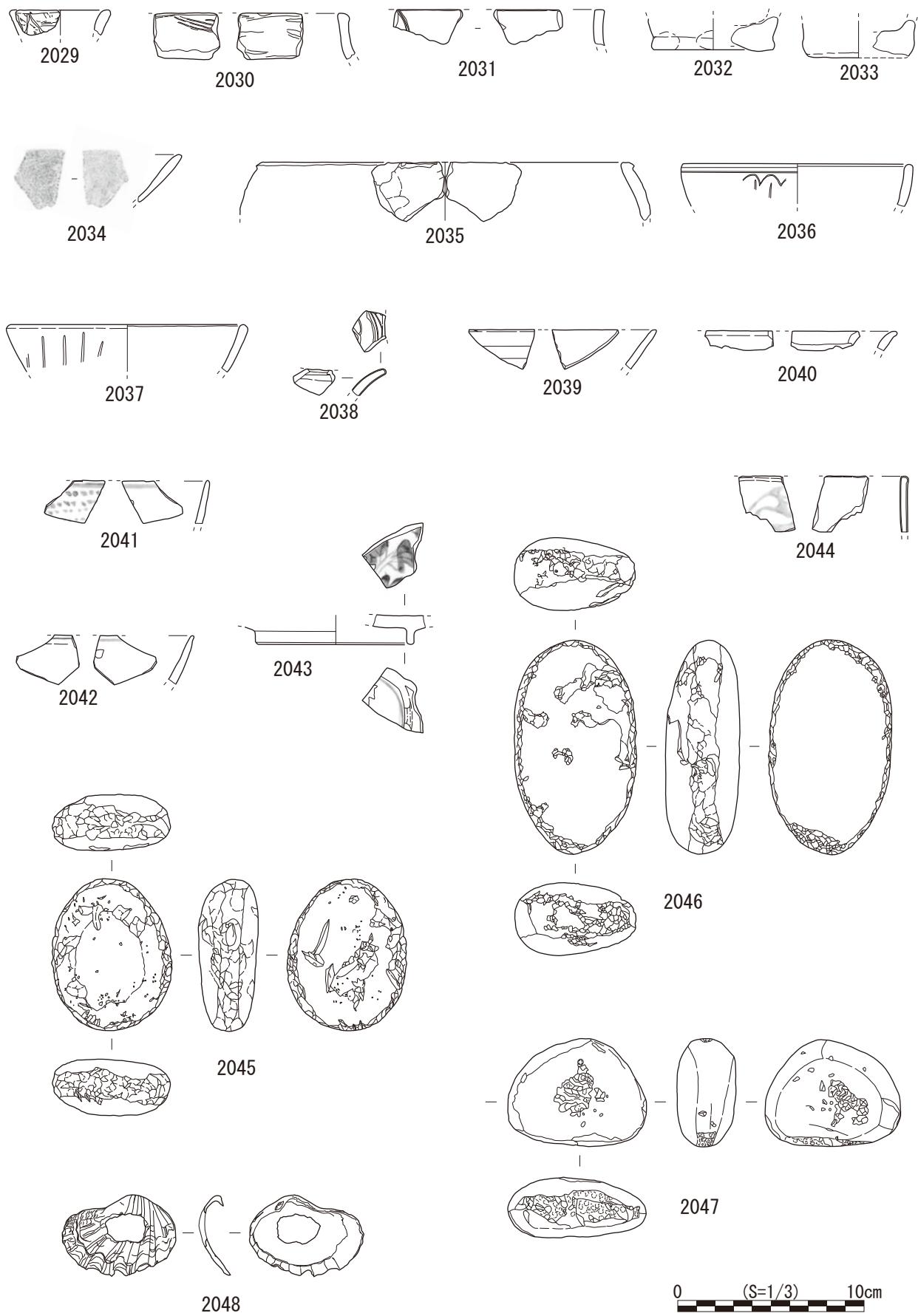
遺物包含層および遺構内覆土より230点の遺物が出土している。貝塚時代後期後半と考えられる土器片が口縁部3点(2029～2031)、底部2点(2032・2033)出土している。2029は壺形と推定される口縁小片で鋸歯状の沈線を口縁に描き、2030は甕形で口縁片にわずかに沈線が認められる。グスク土器は碗形(2034)、鍋形(2035)が出土する。青磁は細蓮弁を描く碗口縁片が出土、蓮弁の弁頭を描くVI類(2036)、これを略する粗造のVII類(2037)が出土している。青磁稜花皿(2038)の口縁片が出土。白磁の口縁小片(2039・2040)は類別不詳で特徴から清代のものかと考える。青花は明代の青花碗C群口縁(2041)、清代の粗製の青花碗口縁(2042・2044)、徳化窯系と目される底部(2043)が出土する。石器が3点出土(2045～2047)。いずれも拳大のやや扁平の自然円礫を敲打具として利用したもので、周縁に敲打痕を残す。シャコガイに孔を穿つ貝錘(2048)と考えられる資料が1点出土する。他にも、肥前陶磁器、沖縄産施釉陶器、本土産近代陶磁、赤瓦片が出土する。

(4) 小結

II地区は、当初予想されていた遺物包含層の広がりは乏しく、かつ狭小な調査区のため遺構も断片的で、小片少量の貝塚時代及びグスク時代の遺物が得られているが、主に出土したものは近世から近代の資料が主体であった。

東江集落の近世から近代の生活雑器が出土している。中でも、注目された資料として統制陶磁と呼ばれる戦時下の日本本土で焼成された陶磁器があげられる。子ども用の食器(第30図-2009)は、前節までの紹介した国頭郡役所のおかれていたI地区出土品には含まれておらず、集落と役所で若干異なる焼物のセット関係を推定することができる。

遺物は貝塚時代後期土器、グスク土器、カムィヤキ、中国の青磁、白磁、青花、肥前陶磁、中国清朝青花、沖縄産陶器、本土産近代陶磁、貝製品、石器など多彩な遺物が出土している。わずかながらタイから招来されたと考えられる陶磁器も出土している。肥前陶磁器も17世紀から19世紀の生産年代のものが間断なく出土、多出した沖縄産陶器や中国清朝磁器とともに消費財として東江村の人々によって使用されたと考えられる。



第36図 T-57／58出土遺物

第11表 II地区遺物観察表

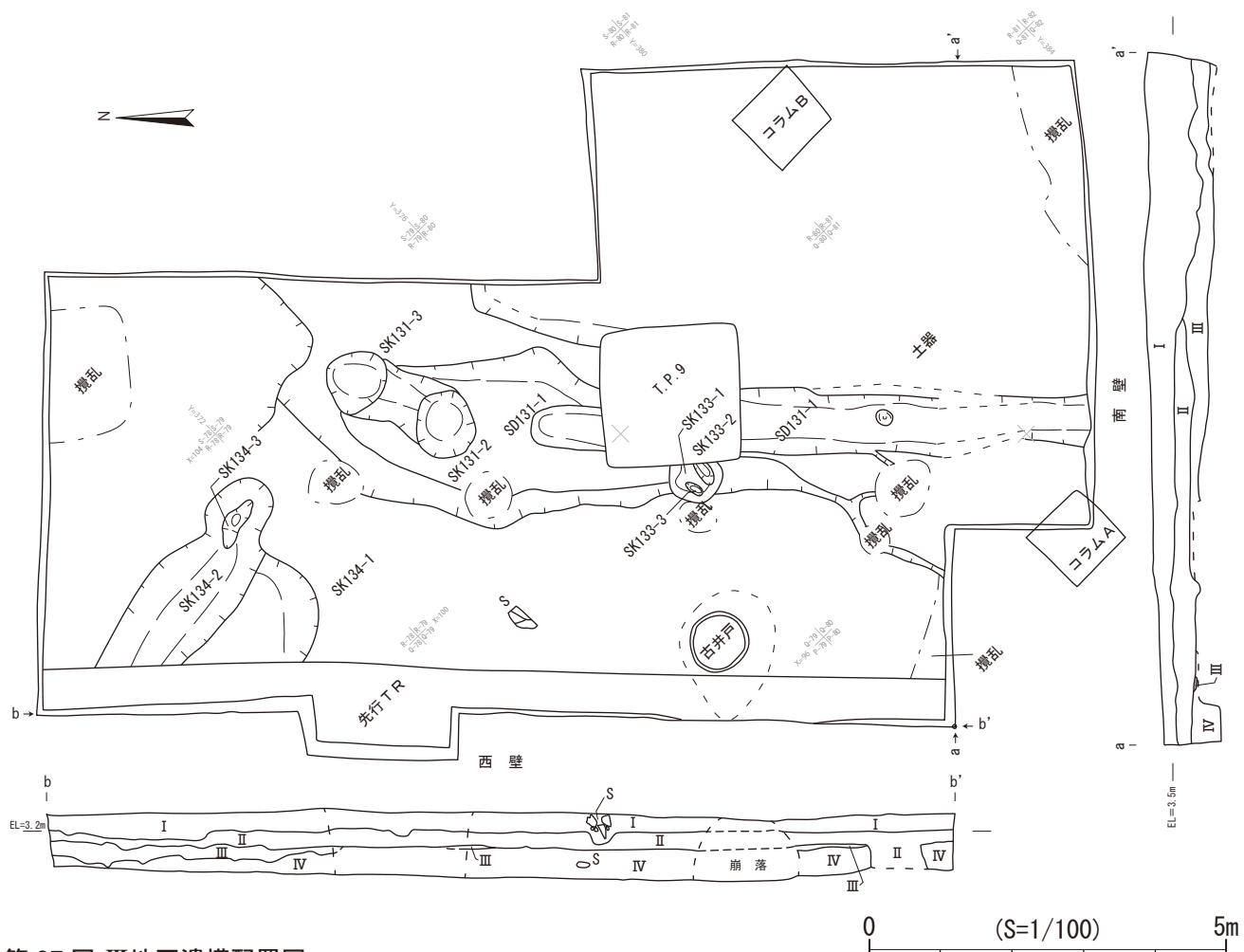
図 図版	掲載 No.	種別	分類	器種	部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	地区	グリッド	層序	遺構・ほか	Dot No.
第30図	2001	土器	後期後半	不明	胴部	—	—	—	II地区	W-55	II a	—	—
	2002	土器	グスク土器	不明	底部	—	—	—	II地区	V/W-56	II	—	—
	2003	青磁	不明	碗	底部	—	—	5.0	II地区	V/W-55	I層	—	—
	2004	白磁	不明	皿	口縁	13.4	—	—	II地区	V/W-56	III	—	—
	2005	青花	漳州窯	碗	口縁	—	—	—	II地区	V-55	II a	—	—
	2006	青磁	VII類	碗	口縁	12.0	—	—	II地区	V-55	II a	—	—
	2007	肥前陶器	不明	皿	底部	—	—	5.0	II地区	V/W-55	I層	—	—
	2008	中国 清代青花	—	小碗	完形	9.2	4.8	4.0	II地区	V/W-56	II a	—	—
	2009	本土産 近代陶器	統制陶器	碗	完形	9.6	4.6	3.3	II地区	V/W-56	II a	—	—
	2010	円盤状製品	—	—	完形	—	—	—	II地区	V/W-56	II	—	—
	2011	石器	叩き石	—	完形	縦：9.7	横：7.5	厚さ：5.6 重量：533g	II地区	V/W-55	不明	—	—
	2012	貝製品	貝錘	—		長さ：5.9 幅：4.7 厚み：0.3 重量：12.9g			II地区	V-56	覆土	SK102	—
	2013	貝製品	貝錘	—	—	孔径縦：2.5 孔径横：1.1 長さ：5.7 幅：3.4 厚み：0.2 重量：4.4g			II地区	W-55	II a	—	—
	2014	貝製品	貝錘	—	—	孔径縦：0.55 孔径横：0.85 長さ： 3.2 幅：2.7 厚さ：0.35 重量：6.3g			II地区	W-55	II a	—	—
	2015	貝製品	貝錘	—	—	孔径縦：1.3 孔径横：0.9 長さ：3.8 幅：3.4 厚さ：25 重量：4.1g			II地区	W-55	II a	—	—
	2016	貝製品	貝錘	—	—	孔径縦：0.7 孔径横：1.1 長さ：2.7 幅：4.1 厚み：0.3 重量：5.5g			II地区	V/W-55	I	—	—
第32図	2017	土器	貝塚後期 (後半)	甕	口縁	—	—	—	II地区	T-52	II	—	—
	2018	青磁	V類	碗	口縁	—	—	—	II地区	T-52	II	—	—
	2019	中国 清代青花	—	碗	口縁	13.8	—	—	II地区	T-52	II	—	—
	2020	中国 清代青花	—	碗	口縁	15.0	—	—	II地区	T-52	II	—	—
第34図	2021	土器	後期後半	壺？	胴部	—	—	—	II地区	T-55	II a	—	—
	2022	土器	グスク土器	壺？	口縁	—	—	—	II地区	T-55	II a	—	—
	2023	土器	グスク土器 (滑石混入)	不明	胴部	—	—	—	II地区	T-55	II a	—	—
	2024	カムイヤキ	—	不明	胴部	—	—	—	II地区	T-55	II	—	—
	2025	青磁	VI類	碗	口縁	—	—	—	II地区	T-55	II a	—	—
	2026	中国 清代青花	—	碗	口縁	13.0	—	—	II地区	T-55	II a	—	—
	2027	色絵	—	碗	口縁	13.6	—	—	II地区	T-55	II a	—	—
	2028	色絵	—	碗	底部	—	—	7.8	II地区	T-55	II a	—	—
第36図	2029	土器	後期後半	不明	口縁	5.2	—	—	II地区	T-57	I	—	—
	2030	土器	後期後半	甕	口縁	—	—	—	II地区	T-58	覆土	SK115	—
	2031	土器	後期後半	不明	口縁	—	—	—	II地区	T-57	I	—	—
	2032	土器	後期後半	不明	底部	—	—	6.4	II地区	T-58	II	—	—
	2033	土器	後期後半	不明	底部	—	—	5.4	II地区	T-57	I	—	—
	2034	土器	グスク土器	碗？	口縁	—	—	—	II地区	T-58	覆土	SK115	—
	2035	土器	グスク土器	鍋	口縁	19.8	—	—	II地区	T-57	I	—	—
	2036	青磁	VI類(細蓮弁)	碗	口縁	11.8	—	—	II地区	T-58	覆土	SK115	—
	2037	青磁	VII類	碗	口縁	12.6	—	—	II地区	T-58	II	—	—
	2038	青磁	V or VI類	皿	口縁	—	—	—	II地区	T-57	I	—	—
	2039	白磁	不明	碗	口縁	—	—	—	II地区	T-58	II	—	—
	2040	白磁	不明	皿	口縁	—	—	—	II地区	T-58	II	—	—
	2041	青花	C群	碗	口縁	—	—	—	II地区	T-58	II	—	—
	2042	中国 清代青花	—	碗	口縁	—	—	—	II地区	T-58	II	—	—
	2043	染付	清代	碗	底部	—	—	8.2	II地区	T-58	I	—	—
	2044	中国 清代青花	—	碗	口縁	—	—	—	II地区	T-58	II	—	—
	2045	石器	—	叩き石		長さ：8.1 幅：7.3 厚み：3.2 重量：193.3g			II地区	T-58	覆土	SK115	—
	2046	石器	—	叩き石	—	長さ：11.5 幅：6.6 厚み：4.0 重量：380.2g			II地区	T-58	II	—	—
	2047	石器	—	叩き石		長さ：5.8 幅：7.4 厚み：3.2 重量：172.1g			II地区	T-58	覆土	SK115	—
	2048	貝製品	貝錘	—	—	孔径縦：0.9 孔径横：2.2 長さ：4.3 幅：6.1 厚み：0.3 重量：12.8g			II地区	T-58	II	—	—

第3節 III地区の調査成果

III地区は東江集落の神聖な場所であるニガミヤーの北東側に隣接し、山手側には押井泉のジンガガーが位置する。平成25年1月に実施した試掘調査で貝塚時代後期・グスク時代の遺物が確認されたことから、同年1月14日に遺跡の一部範囲変更を行った地区である。I地区・II地区は琉球王府時代より集落や役所として利用されてきたことや、近現代の市街地化に伴う開発の影響から全体的に著しい破壊を受けていた。試掘調査においても、北西側に位置しII地区に近いT.P.6からT.P.8では近現代の搅乱が見られた。しかし、南東側のT.P.9からT.P.11では比較的良好な状態の包含層が確認されている。これは、南東側部分が近年まで水田として利用されてきた経緯があり、耕作放棄されたあとも空地であったことから、I地区・II地区に比べ開発による影響が少なかった為と考えられる。

調査は約10m×15mの調査範囲(第37図)にグリッド設定を行い、I層(表土層)をバックホーで除去した後調査を進めていった。事前の試掘調査結果から遺物包含層の残りが悪いと思われた南側や東側へも遺物包含層が残る事から調査区を若干広げている。

T.P.9では小片ながら白磁が回収されたことからグスク時代初期の遺物包含層と目されたが、その後本調査においてIII層より回収された遺物の多くが貝塚後期前半の土器であることが判明している。なお、調査区がジンガガーの近傍に位置することや地元の聞き取りから沼地が近いという事を考慮し、先行して西側にトレーンチを設け廃水溝とし、調査時に確認された井戸跡に廃水することとした。



第37図 III地区遺構配置図

第12表 III地区遺構所見表

遺構名		グリッド	検出面	計測値 (cm)			覆土				団結度
				長軸	短軸	深さ	土色	記号	粒度	粒子の組成	
131-1	SD	P81/Q81/Q80/R80/R79	IV層上面	562	56	15	灰色	7.5Y4/1	極小	砂	やや弱い
131-2	SK	R-80	IV層上面	92	74	18	灰色	7.5Y4/1	極小	砂	やや弱い
131-3	SK	R79	IV層上面	90	84	24	灰色	7.5Y4/1	極小	砂	やや弱い
133-1	SK	Q-80	IV層上面	75	43	14	灰色	7.5Y4/1	極小	砂	やや弱い
133-2	SK	Q-80	IV層上面	33	15	24	褐色	10YR4/6	極小	砂	やや弱い
133-3	SK	Q-80	IV層上面	29	13	23	灰色	7.5Y4/1	極小	砂	やや弱い
134-1	SK	R-78/79	IV層上面	300	75	7	灰色	7.5Y4/1	極小	砂	弱い
134-2	SK	R-78/79	SK134-1底面	300	113	7	灰色	7.5Y4/1	極小	砂	弱い
134-3	SK	R-79	SK134-2底面	67	22	20	灰色	7.5Y4/1	極小	砂	弱い

(1) 層序

III地区の基本層序(第37図)は以下の通りである。

I層: 現代の表土層および近現代の開発に伴う造成層。バラスや巨礫、現代遺物を多数含む。土色はオリーブ褐色(2.5Y4/3)を呈し、土は固く締まっている。

II層: 粘質混砂土層。旧耕作土と考えられる。土色はオリーブ褐色(2.5Y4/4)を呈し、土の締りは良い。

III層: 粘質混土砂層。貝塚時代後期からグスク時代初期の遺物を含む。全体を通して鉄分により沈着がまばらに見られるほか、5cm程の礫を僅かに含む。土色は暗灰黄色(2.5Y4/2)を呈し、土の締りは良い。

IV層: 砂層。貝塚時代後期の遺物を僅かに含む。全体的に鉄分による沈着が強く見られ、1~5cm程の鉄塊も多く含まれる。土色は暗褐色(10YR3/4)を呈し、土の締りはやや弱い。

V層: 混礫砂層。地山。5~20cmの大小さまざまな川原石を多量に含む。土色はにぶい黄褐色(10YR5/4)を呈し、土の締りは弱く脆い。

なお、調査の進捗に伴って、III層からIV層への漸次的な層を「III下」層とし分けて取り上げた。

(2) 遺構

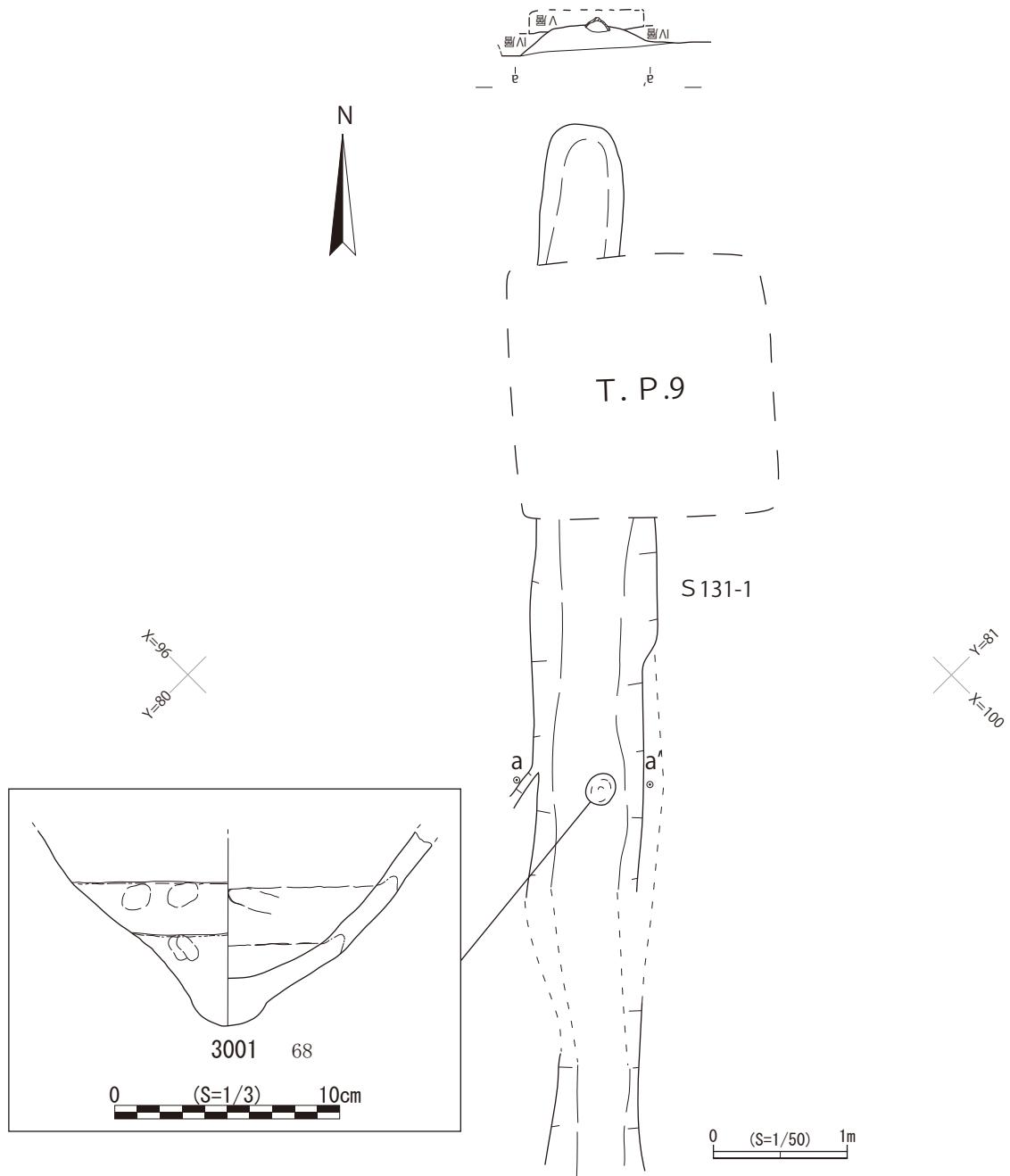
遺構は溝状遺構1基・土坑8基を検出したが、明確に遺構として認識できるようなものは溝状遺構1基のみで、土坑はすべて不定形の浅い落ち込みであった(第38図)。

SD131-1 R-80からP-81へかけて南北に延びる用途不明の溝状遺構で、IV層を浅く掘り込む形で形成されている(第37図)。幅56cm、深さ16cm。調査区外へと延びているため全長は不明。溝内は灰色(7.5Y4/1)を呈し、やや締りの弱い堆積土が覆う。覆土からは貝塚時代後期土器の底部尖底(3001)が1点出土している。

(3) 出土遺物

III地区で出土した遺物は、大量に回収された近世~近代の陶器等はバックホーで除去されたI・II層においてわずかに得られるのみで、III層はグスク時代と貝塚時代後期の遺物で構成されている。I・II地区に比して相対的に搅乱も少なくプライマリーな包含層といえる。

出土遺物の種別で見てみると、III層以下では、土器394点、石器4点、陶磁器7点で、圧倒的に土器が主体となる。中でも回収された土器の口縁部破片30点中1点のグスク土器を除き貝塚時代後期前半と推定される口縁片で占められる。溝原貝塚でこれまで回収されている貝塚時代後期後半の、いわゆるぐびれ平底土器主体とは異なる様相を見せており注目される(第13表)。以下、包含層より回収された遺物を種別ごとに詳述する。



第38図 SD131-1 遺構詳細図

3002～3014は口縁資料で、後期前半の尖底土器の口縁と推定される資料である。口縁形態からI～IV類の4種に類別した。

3002～3006は口縁を外反あるいは口縁端で折り曲げ内面に刺突文を施す有文土器でI類とした。3002は外面に縦方向の浅く幅広の沈線文を連続的に施す特徴的資料である。類例としてアンチの上貝塚(本部町教育委員会編2004:23図-62)やナガラ原東貝塚(熊本大学考古学研究室編第6集-第12図36)で出土例が報告されている資料と類似する。

3007～3011は口縁が直上する無文の資料でII類とした。3007は外器面をナデ調整、外器面には指頭痕が残りナデ調整は徹底しない資料で、色調は褐色、胎土は泥質で緻密な特徴こそ異なるが、外器面はナデ調整が徹底し平滑で内器面に指頭痕が横方向に連続する整形方や口

第13表 III地区出土遺物集計表

分類	器形	部位	III地区(本調査)							小計	
			I層	I-II層	II層	III層	III-III下層	III下層	IV層		
土器	後期前半	深鉢	口縁			16		2		18	
		・ 甕	脣部	13		2	256		34	2	307
		底部			2	1	1				4
	奄美系?	不明	口縁			8		1			9
			脣部			2		1			3
	弥生土器?	不明	口縁			1					1
			脣部		1	3					4
	後期後半	くびれ平底	底部			1					1
			脣部			8					8
		グスク土器	滑石混入			1					1
中国陶磁	不明	脣部			1						1
		底部			1						1
	白磁IV類?	碗	口縁								
			脣部							1	1
		碗	口縁								
	青磁		脣部		1						1
			底部	1							1
	青花A群	皿	口縁								
			脣部								1
			底部		1						1
			完形			1					1
本土産	青花不明	不明	脣部	1		1					2
			底部								
	清朝青花	碗	口縁	1	1						2
			脣部	1							1
			底部			1					1
	褐釉陶器	不明	口縁								6
			脣部	5		1					2
			底部								2
沖繩産	銅綠釉	碗	口縁			1					1
			脣部								
		大皿	脣部			1					1
	肥前唐津	瓶	脣部								
		壺	口縁								
			底部	1							1
	無釉陶器	壺・甕	口縁		1						1
			底部								
		擂鉢	脣部	2	3						5
			脣部	15	18	7					40
沖繩産施釉陶器	肥前磁器	不明	口縁	1							1
			脣部	2	4						6
			底部	2							2
	上焼	香炉	底部		1						1
			脣部	4	3	1					8
			底部			1					1
	灰釉	碗	口縁	1	1						2
			底部								
		壺	口縁	5	3	1					9
沖繩産陶器	陶質土器(アカムヌー)	不明	脣部	3	2						5
			底部	3	1						4
	磁器	不明	口縁	5	3	1					4
			脣部	3	2						
			底部	3	1						
	陶器	不明	口縁								4
			脣部	4							
	不明陶器	不明	脣部				1				1
石器	赤瓦	丸瓦	玉縁部	1							1
			端部								
		平瓦	狭部	2							2
			広部								
	羽口	不明	体部	5	6	1					12
			磨滅	1	2						3
	鉄滓					2					2
						1					1
	石器	擦り石	完形			1					1
		叩き石	完形			2					2
		三棱	完形			1					1

縁が直立し底部までつながる資料は無いが立面觀がホームベース形となることから、総じて貝塚後期の無文尖底土器群である浜屋原式に比定される資料と推される。3008～3011も総じてⅡ類資料と同類と考えられる。

3012・3013はやや内彎する器形で、口唇部形状は舌状を呈しておりこれをⅢ類とした。先のⅡ類が口唇端をナデ調整し断面方形を成すのに対して、調整が粗放であり浜屋原式もしくは次型式の大当原式にも共通する特徴が認められることから分離したが、小片のため型式比定は留保する。

3014・3015はⅣ類として分類する凸帶文を有する土器群である。胎土は前Ⅰ～Ⅲ類が総じて泥質で緻密混和材は微粒であるのに対して、当該Ⅳ類は混和材にⅠ～Ⅲ類に比して粒径の大きな石英を用いる。3014は口縁部小片で表裏判然としないが、口縁内面に凸帶を貼付し外反する資料である。また、3015は脣部小片だが外器面に凸帶を貼付浅い刻目を施した資料と考えられる。

3016は直立する口縁のグスク土器の口縁部である。胎土に滑石を混和材として用い、器表裏面ともに滑石の光沢を有する。

3017・3018は乳房状尖底の底部資料で、左に紹介した3001とほぼ同様の特徴を有する。底端部を突出させ厚みがあり、これまでの県内の他の遺跡で出土する事例や、本遺跡出土土器の胎土等の特徴から前述したⅠ～Ⅲ類の口縁部資料と相関にある尖底底部と考えられる。3017は外器面をナデ、内側に指頭痕を残すなどの特徴をもつ。

3019・3020は平底土器で、前者は底径5.0cmのやや小型のくびれ平底土器で、後者は3.2cmのかなり小型化の著しい底部資料である。特に後者は底部の厚みが増し、底面もやや丸みを

もって床置きした場合には不安定な形状で、底面には砂が付着するなど3019とはまた異なる特徴をもった土器である。このような特徴を有する平底土器は屋部前田原遺跡でも多数認められる。

3021・3022はグスク土器の底部もしくは底部付近の資料である。3022は混和材に滑石を混入するいわゆる滑石混入土器である。

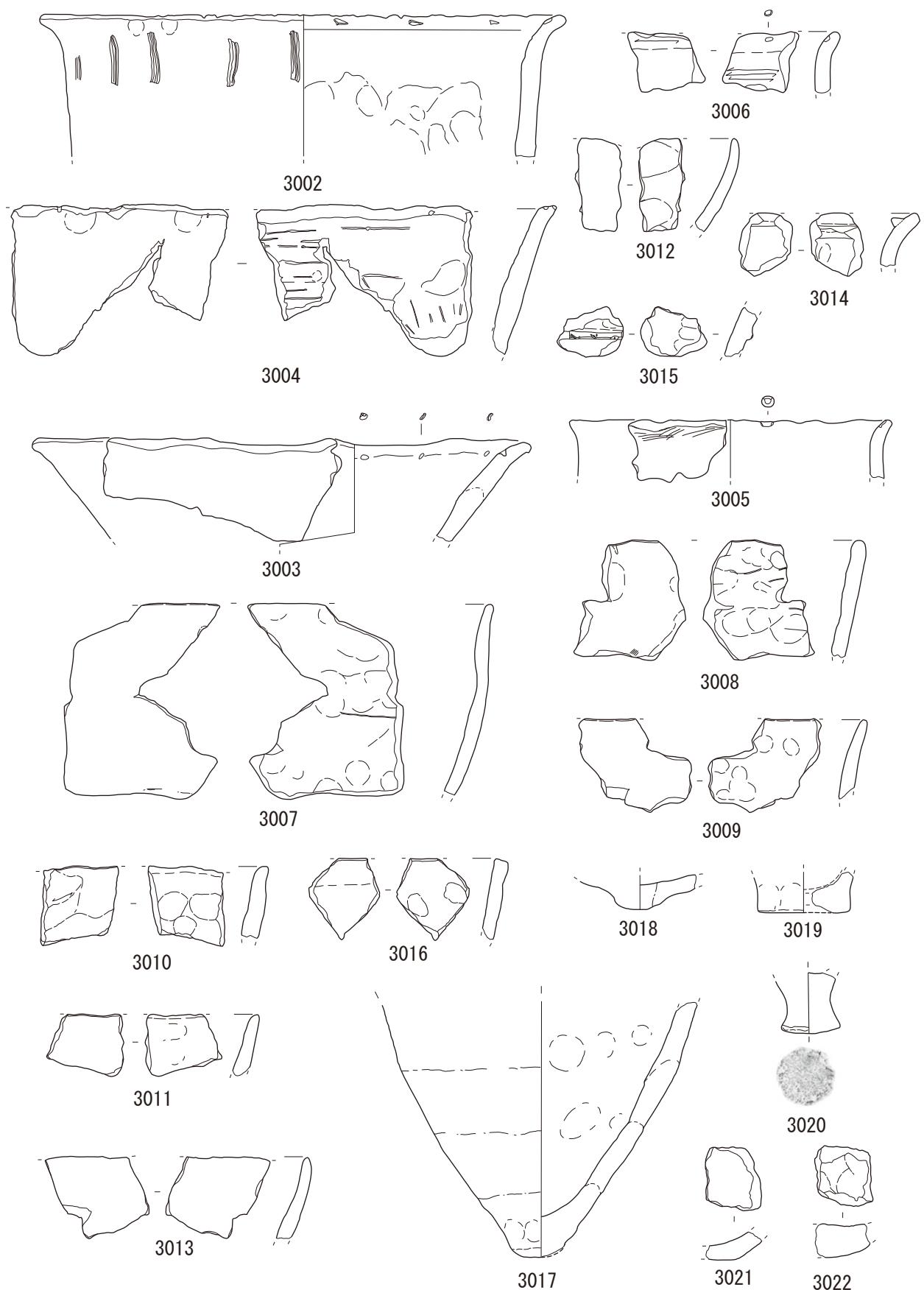
3023は白磁胴部の小片で、釉や素地の特徴から中国福建省の閩清窯系の資料、いわゆる白磁玉縁碗(IV類)もしくはビロースクタイプ等(C群)の胴部と推される。小片のため断定は避けるが、白磁IV類の可能性のある資料として図示する。3024は粗造の青磁碗底部資料でVII類と考えらえる。3025・3026は明代の青花皿でいわゆるA群に属する、同一個体とも考えられたが、接合関係にないため各々図示した。見込みに十字花文、体部外面に花唐草文を描く。3027は中国の褐釉陶器で、口縁を方形に肥厚させる無耳壺で、沖縄のグスク時代遺跡で多出する型式の壺である。

3028は扁平の拳大の円礫を利用した石器敲打具、3029はやや重量感のある円礫を利用したやはり同様の石器敲打具である。両者とも周縁部に敲打痕を残している。3030・3031は焼土塊の小片だが、その形状と付着する鉄分の塊から轍の羽口と考えられる。

(4) 小結

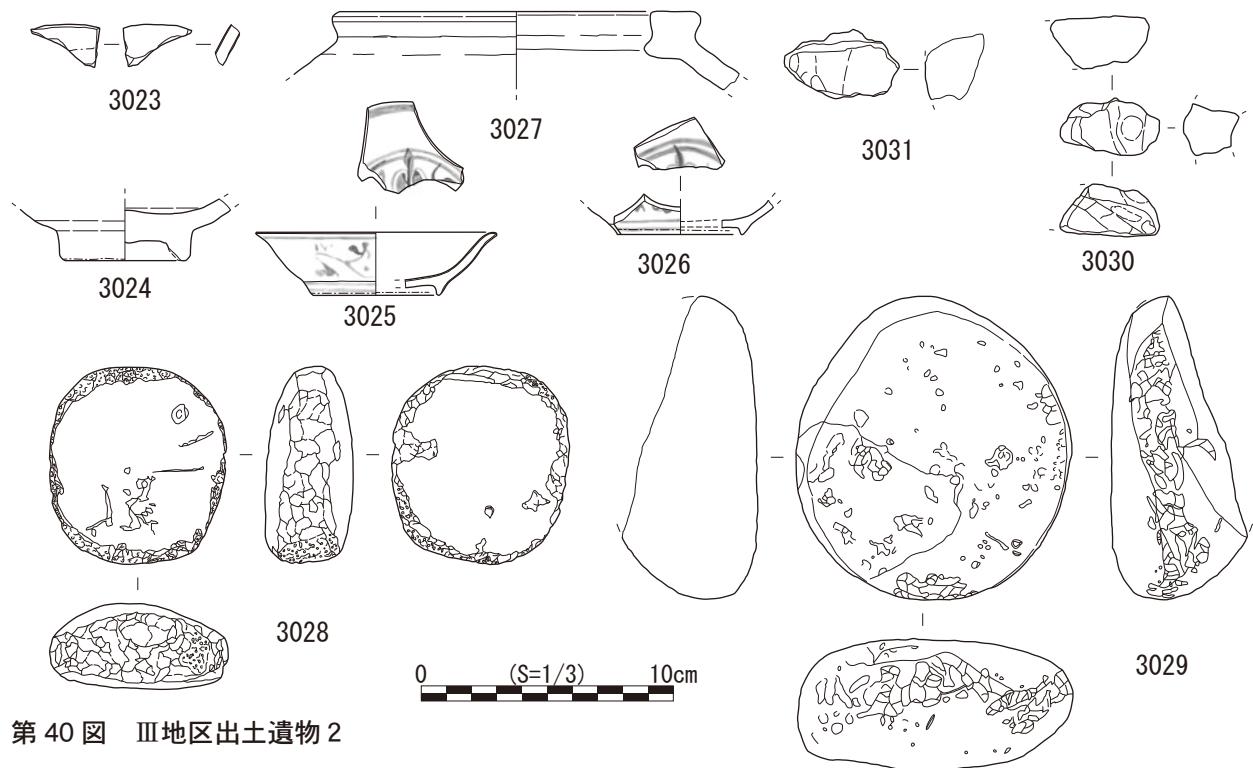
Ⅲ地区はI・II区と異なり、Ⅲ層で上位と下位とがあり、おおよそ上位はグスク時代の遺物を含み、最下部では貝塚時代後期前半の遺物が得られるというプライマリーな出土状況を確認することができた。また、総じてグスク時代の遺物が回収された地域はQ/R-81グリッドを中心とする一帯であり、グスク時代遺跡は南東側にさらに広がりをもって存在しているものと推定することができた。単純に、畠地として利用されたため後世の開発に乏しく、遺跡が保存良好な形で残存したという評価も与えることができるが、これまでの溝原貝塚の調査履歴等を鑑みると、東江の海浜部及び後背湿地の開発など先史時代から現代におよぶ集落の形成や農地耕作といった溝原貝塚から東江村における人々の営為が点的ながらもうかがい知ることができる調査地点となった。

出土土器は、以下の4種に分けられる。①貝塚後期前半のI～Ⅲ類及び尖底の資料群、②IV類の粒径1mm大の相対的に大きな砂を混和材として用いる資料の2種は弥生時代並行期の土器と考えられる。①は在地系土器で、②は小片の出土ながらも、このような特徴はいわゆる奄美諸島の弥生時代並行期の在地土器でしばしば見る事の出来る特徴であることから、当該遺跡への搬入品の可能性を考慮する必要のある資料である。③くびれ平底土器で貝塚後期後半の土器、④グスク土器が出土する。特に、①・②は溝原貝塚で出土した土器の中でも古式の資料となった。なお目視で回収できた貝類はⅢ層でシャコガイ科5点、ウミギクガイ科1点、不明1点が得られる程度で少量であった。また、コラムサンプリングを行い、フローテーションにて植物遺体の検出を行った。結果については、第5章第2節に記した。



第39図 III地区出土遺物 1

0 (S=1/3) 10cm



第40図 III地区出土遺物2

第14表 III地区遺物観察表

図 図版	掲載 No.	種別	分類	器種	部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	地区	グリッド	層序	遺構・ほか	Dot No.
第38図	3001	後期土器	後期前半	深鉢・甕	底部	—	—	—	III地区	Q-81	覆土	SD-131-1	125
	3002	後期土器	後期I類	深鉢・甕	口縁	約28.0	—	—	III地区	Q-79	III下	—	117
	3003	後期土器	後期I類	深鉢・甕	口縁	26.2	—	—	III地区	R-81	III	—	105 114
	3004	後期土器	後期I類	深鉢・甕	口縁	—	—	—	III地区	Q-80	III	—	39 813
	3005	後期土器	後期I類	深鉢・甕	口縁	17.0	—	—	III地区	Q-81	III	—	189
	3006	後期土器	後期I類	深鉢・甕	口縁	—	—	—	III地区	Q-81	III	—	135
	3007	後期土器	後期II類	深鉢・甕	口縁	—	—	—	III地区	R-81	III	—	177 178 153
	3008	後期土器	後期II類	深鉢・甕	口縁	—	—	—	III地区	Q-81	III	—	142
	3009	後期土器	後期II類	深鉢・甕	口縁	—	—	—	III地区	R-81	III	—	152, 174
	3010	後期土器	後期II類	深鉢・甕	口縁	—	—	—	III地区	Q-81	III	—	75
	3011	後期土器	後期II類	深鉢・甕	口縁	—	—	—	III地区	P-81	III	—	156
	3012	後期土器	後期III類	深鉢・甕	口縁	—	—	—	III地区	Q-81	III	—	97
	3013	後期土器	後期III類	深鉢・甕	口縁	—	—	—	III地区	Q-81	II-III	—	188, —
	3014	後期土器	後期IV類	不明	口縁	—	—	—	III地区	Q-82	III	—	—
	3015	後期土器	後期IV類	不明	胴部	—	—	—	III地区	Q-81	III下	—	210
	3016	グスク土器	滑石混入	鍋	口縁	—	—	—	III地区	R-81	III	コラムB	—
	3017	後期土器	後期前半	深鉢・甕	底部	—	—	—	III地区	Q-80, Q-81, Q82	III・III下	—	96 201 227
第39図	3018	後期土器	後期前半	深鉢・甕	底部	—	—	—	III地区	Q-79	III	—	30
	3019	後期土器	後期後半	甕	底部	—	—	5.0	III地区	Q-81	III	—	197
	3020	後期土器	後期後半	甕	底部	—	—	3.2	III地区	T.P.9	III	T.P.9	—
	3021	グスク土器	グスク土器	不明	底部	—	—	18.6	III地区	R-78	III	—	109
	3022	グスク土器	滑石混入	鍋	底部	—	—	—	III地区	Q-81	III	東側拡張部	158
第40図	3023	白磁	IV類	碗	胴部	—	—	—	III地区	R-81	IV	コラムB	—
	3024	中国青磁	VII類	碗	底部	—	—	4.8	III地区	不明	I-II	—	—
	3025	中国 明代青花	A群	皿	完形	9.6	2.5	5.0	III地区	Q-81	III	—	195
	3026	中国 明代青花	A群	皿	底部	—	—	5.0	III地区	R-81	II	—	—
	3027	中国褐釉 陶器	—	壺	口縁	14.1	—	—	III地区	Q-81	III	—	190
	3028	石器	磨石・敲石	—	—	長さ: 7.8 幅: 7.0 厚み: 3.5 重量: 236.6g	—	—	III地区	R-81	III	—	140
	3029	石器	叩石	—	—	長さ: 12.1 幅: 10.9 厚み: 5.4 重量: 756.7g	—	—	III地区	R-80	III	—	36
	3030	土製品	輪	羽口	—	残存長: 2.3 幅: — 厚み: —	—	—	III地区	R-78	覆土	SK134-2	118
	3031	土製品	輪	羽口	—	残存長: 2.8 幅: — 厚み: — 重量: 19.4g	—	—	III地区	R-79	III	—	47

第5章 自然科学分析の報告

第1節 溝原貝塚出土土器の圧痕分析報告—グスク時代のアワ粒入り土器の発見—

千田寛之（名護市教育委員会）

小畠弘己（熊本大学文学部）

1 遺跡の調査と概要

遺跡名：溝原貝塚

所在地：沖縄県名護市東江

調査期間：平成25年6月24日～平成26年2月28日

担当者：宮城弘樹・千田寛之

時期：沖縄貝塚時代後期・グスク時代・近世・近代

立地：海岸砂丘上（標高約3m）

2 対象資料および調査対象

（1）調査対象

圧痕調査の対象とした資料は、本遺跡から出土した貝塚時代後期からグスク時代にかけての、くびれ平底土器とグスク土器が中心である。調査は、千田が破片資料から完形資料までを肉眼観察し、レプリカを作成した。検出された圧痕資料の最終同定は小畠が行い、さらにそれらが検出された土器を小畠が再検討した。その結果、1点の土器に複数の種実圧痕が検出されたため、X線CTスキャナーによって潜在圧痕を検出した。

（2）圧痕検出作業の手順

本遺跡で行った圧痕調査および調査後の作業手順は、以下のとおりである。

- ①肉眼および実体顕微鏡により土器圧痕部を観察し、植物・昆虫・貝等の圧痕の可能性があるものを抽出する。
- ②圧痕部を水で洗浄し、土器全体写真および実体顕微鏡による圧痕部の拡大写真を撮影する。
- ③離型剤（パラロイドB-75 5%アセトン溶液）を圧痕内部および周囲に塗布し、シリコーンゴム（株）アグサジャパン製ブルーミックスソフトを圧痕部に充填する。
- ④やや硬化したシリコーンゴムをマウント（走査型電子顕微鏡用ピンタイプ試料台使用）に盛り、圧痕部と接合して硬化させる。
- ⑤硬化後、レプリカを取り外し、圧痕部の離型剤をアセトンで洗浄する。
- ⑥作成したレプリカを走査型電子顕微鏡（日本電子製JCM-5700型）で観察・撮影し、同定する。
- ⑦レプリカのサイズに関しては、マイクロスコープ（キーエンス社製VHK-2000）の二点間計測機能を用いてmm単位下二桁まで計測した。
- ⑧X線CTスキャナーにより、土器内部の潜在圧痕を検出し、その一部を3D画像化して、観察し、表出圧痕を参考にして、同定を行った。

3 調査結果（第41～45図、第15表）

千田が観察した資料は総計593点で、うちレプリカを作成したのは8点であり、そのうち種実の圧痕の可能性があるものは5点であった。小畠はこれら土器を再度検討し、土器No. 339に

おいて千田検出例以外にもアワらしき圧痕が土器表面に見られることを確認したため、それから再度レプリカを作成するとともに、それらの一部が断面から検出されたことから、潜在圧痕の存在を予想し、X線CTスキャナーによる撮影・測定を行った。

その結果、くびれ平底土器の底部である土器掲載No.1071(台帳番号NNMK-408)は当初アワかと期待されたが、アワではなかった。さらにグスク土器鍋形土器の底部である土器掲載No.1048(台帳番号NNMK-339)からは8点のアワ有ふ果の表出圧痕と29点のアワ有ふ果と思われる潜在圧痕を確認することができた。なお、参考のために、土器掲載No.1048(台帳番号NNMK-339)のアワ有ふ果類似圧痕についても写真および計測値をここに掲載しておく。

(1) 表出圧痕(第41図～第42図)

第41図の1(NNMK 0007)は偏平な長楕円形を呈し、当初アワ*Setaria italicica*の有ふ果と判断したものである。しかし、表面は平滑で、アワ有ふ果に特有の乳頭状突起も観察されず、さらには平面観の左側辺が不規則に窪むことから、アワではないと判断した。不明としたが、小礫の可能性もある。

第41図の2(NNMK 0009-0011, NNMK-A-E)は平面観が丸みを帯びた紡錘形を呈し、基部側が台形状にわずかに突出するという共通の特徴をもつ。表面は荒れているが、内外顎に乳頭状突起列らしき突起が観察され、アワ*Setaria italicica*の有ふ果の可能性が高い。NNMK 0009・NNMK 0010・NNMK 0011は外顎側の圧痕であり、表面の乳頭状突起の痕跡と外形からかろうじてアワと同定できるが、内顎側の特徴が観察できず、決定的根拠はない。同様に後に検出したNNMK-B・NNMK-C・NNMK-Eも圧痕が浅く、決め手となる内顎側の特徴を観察できない。有ふ果の長幅比と乳頭状突起の軍艦状突起の不在はエノコログサ*Setaria viridis*との区別点となる(Nasu et al. 2007)が、これら圧痕の長幅比はアワとしての要件を満たしている(Nasu et al. 2007 アワ平均値1.6～1.9:本資料群1.13～1.30)が、表面が粗く、乳頭状突起の形状は詳細に観察できない。しかし、NNMK-Dは先端側の圧痕であり、内外顎の接線、内顎頂部の深い窪み(小畠2013)が観察でき、アワの特徴を具えている。さらに、NNMK-Aも外顎が剥離した状態であるが、内顎側の深い窪みを認めることができ、その丸みを帯びた形態と合わせるとアワと判断できる。また、NNMK-Aは基部に小軸と思われる部分が残存している。よって、表出圧痕として検出した8点の圧痕はすべてアワ*Setaria italicica*の有ふ果と判断した。

第15表 表出圧痕一覧

掲載(図)No	整理番号	出土地点・層位同定	時期	土器(器種)	圧痕の部位	圧痕の種類	サイズ(単位:mm)
(第24図) 1071	NNMK0007	NNMK I 区T-19 II 上 No.408	貝塚時代後期	くびれ平底 (甕形土器)	底面	不明	1.49×1.25×1.15+ α
(第23図) 1048	NNMK0009	NNMK I 区S-22SP49 ふく土No.339 NNMK I 区SP50 ふく土No.361	グスク時代 I期	グスク土器 (鍋形土器)	内面	アワ有ふ果外顎側	1.69×1.38×1.02+ α
	NNMK0010				内面	アワ有ふ果外顎側	1.74×1.54×1.26+ α
	NNMK0011				内面	アワ有ふ果外顎側	1.93×1.56×1.15+ α
	NNMK-A				外面	アワ有ふ果側面側	2.02×1.58×1.47
	NNMK-B				外面	アワ有ふ果外顎側	1.70×1.31×0.92+ α
	NNMK-C				断面	アワ有ふ果外顎側	1.72×1.40×1.04+ α
	NNMK-D				断面	アワ有ふ果頭部側	0.86+ α ×1.54×1.12
	NNMK-D				外面	アワ有ふ果外顎側	1.44×1.12×0.37+ α

(2) 潜在圧痕(第43~45図)

土器No.339をX線CTスキャナー(東芝ITコントロールシステム(株)製TOSCANER-32250 μ PD)を用いて、電圧100KV、電流250 μ Aで、全体(第43・44図)：スライス厚0.14mm、拡大(第45図)：スライス厚0.04mmで測定した。

第43・44図では表出圧痕として検出したNNMK 0009-0011・NNMK-A-Eの8点以外に、1.5~2mm大の円形もしくは長楕円形の空隙(図中黒色で、白矢印で指示された部分)を29点検出した。このうち、4点(NNMK-3D-1-4)を抽出し、再度測定し、それらを3D画像化して表面形状を観察した。その結果、第45図に示したように、スライス厚が40 μ mmであり、乳頭状突起の10~20 μ mmより厚いため、その形状は再現できていないが、平面観が丸みを帯びた紡錘形を呈し、基部側が台形状にわずかに突出するという外形的特徴や内穎側先端が深く窪むなどの形態的特徴からみて、これらもアワ*Setaria italica*の有ふ果であると判断した。これらが表出圧痕と同じアワの有ふ果であることは、表出圧痕NNMK-Aと同じ外穎が剥離しかけたもの(NNMK-3D-2)が含まれる点、さらに小軸を残す例(NNMK-3D-4)がある点もこの判断の助けとなる。

4 圧痕調査の成果とその意義

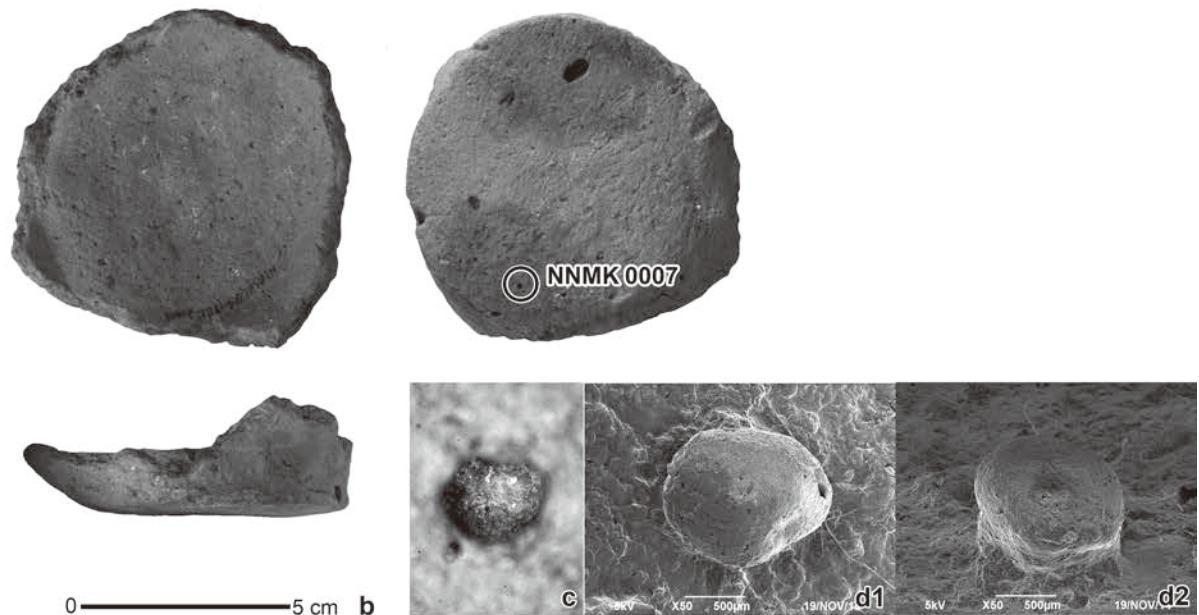
今回の圧痕調査では、グスク時代のアワ粒入り土器を科学的に初めて検証した点で大きな成果があった。従来のレプリカ法だけでなく、X線CT法を組み合わせて使用することで、7×5cmほどの底部片に37点のアワ有ふ果が混入していることを明らかにした。これらが偶然の混入であるか意図的な混入であるかの判断は、単位面積当たりの圧痕数で判断するしかない。穀物資料の基準ではないが、エゴマ果実の場合は100cm²当たり80点以上を意図的混入の根拠としている(小畠未発表)が、本資料は103点であり、その数の多さから、意図的に混入した可能性が高い。そのアワ粒の状態は、内外穎や小軸を残す小軸付小穂であり、脱穀後の産物と思われる。このアワ粒を土器胎土中に入れる行為がどのような意味を持つのかは不明であるが、同様の事例は縄文時代以来各地で認められ、それらはコナラ属種実(ドングリ)・エゴマ・ダイズ属などの食用植物の種実であるのがほとんどであり、食用植物の豊穣を願う行為であったかも知れない。

本調査に係る経費の一部は小畠が研究代表者として受けている、平成26年度日本学術振興会科学研究費研究補助金基盤研究A「先端技術を用いた東アジアにおける農耕伝播と受容過程の学際的研究」(課題番号:24242032)を使用した。

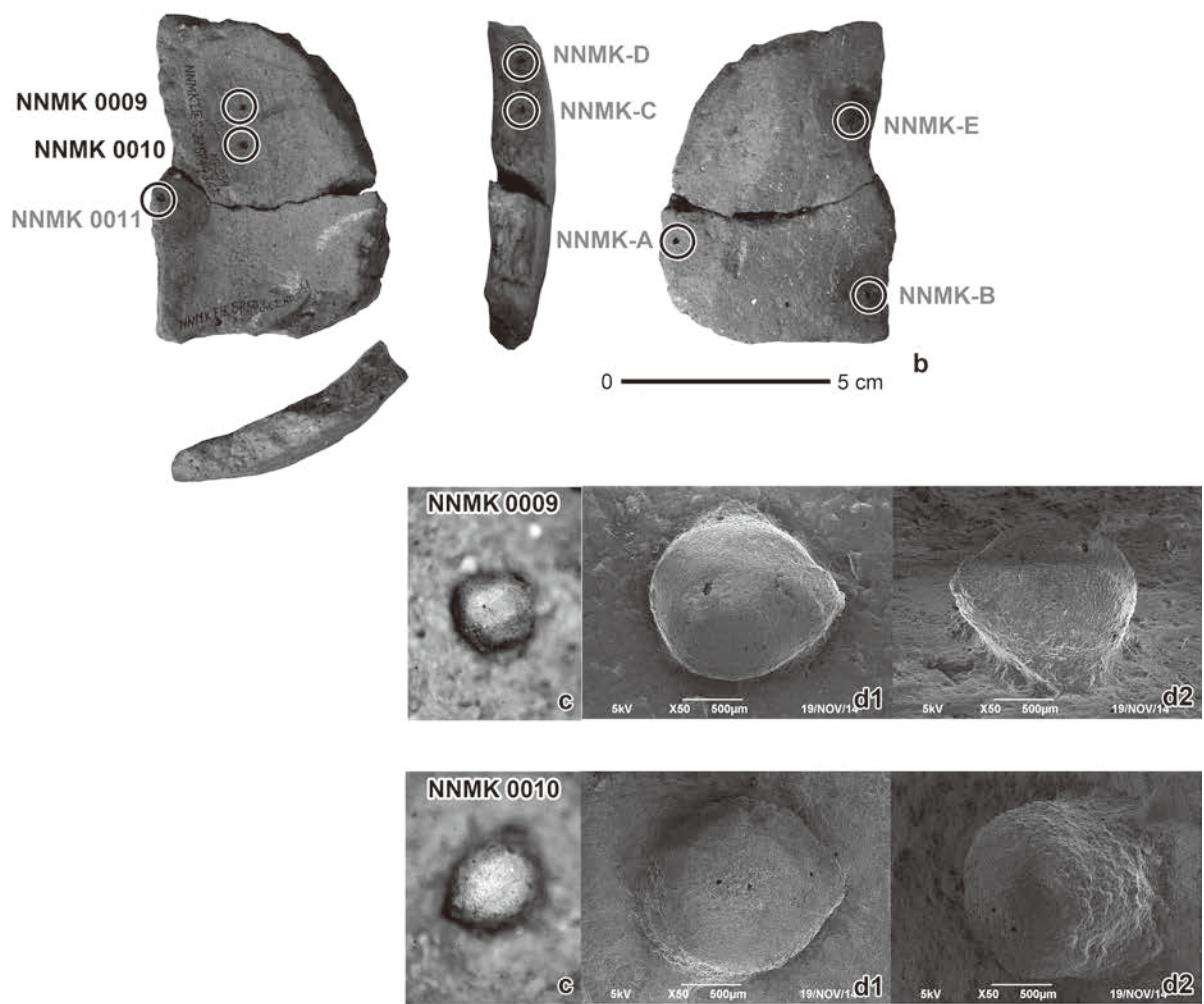
＜引用参考文献＞

- 小畠弘己 2013 「동삼동파총·비봉리유적 출토 기장·조 암흔의 동정과 그 기준」『韓国新石器研究』25, 105-155쪽, 한국신석기학회
Nasu H., Momohara A., Yashuda Y. & He J. 2007. The occurrence and identification of *Setaria italica* (L.) P. Beauv. (foxtail millet grains from the Chengtoushan site (ca. 5800 cal B. P.) in central China, with reference to the domestication centre in Asia. *Veget Hist Archaeobot* 16, pp. 481–494.

1. NNMK-408土器

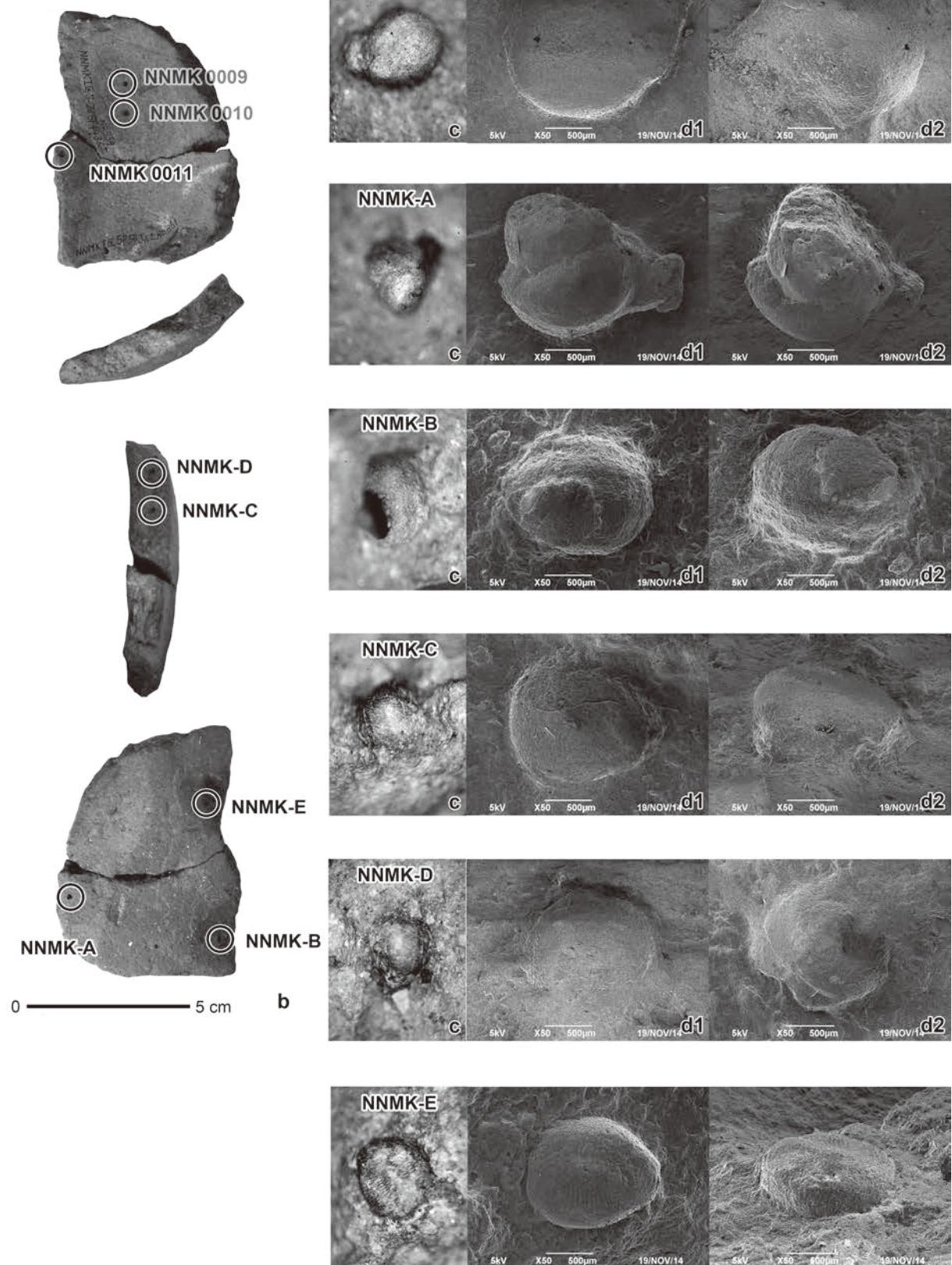


2. NNMK-339土器

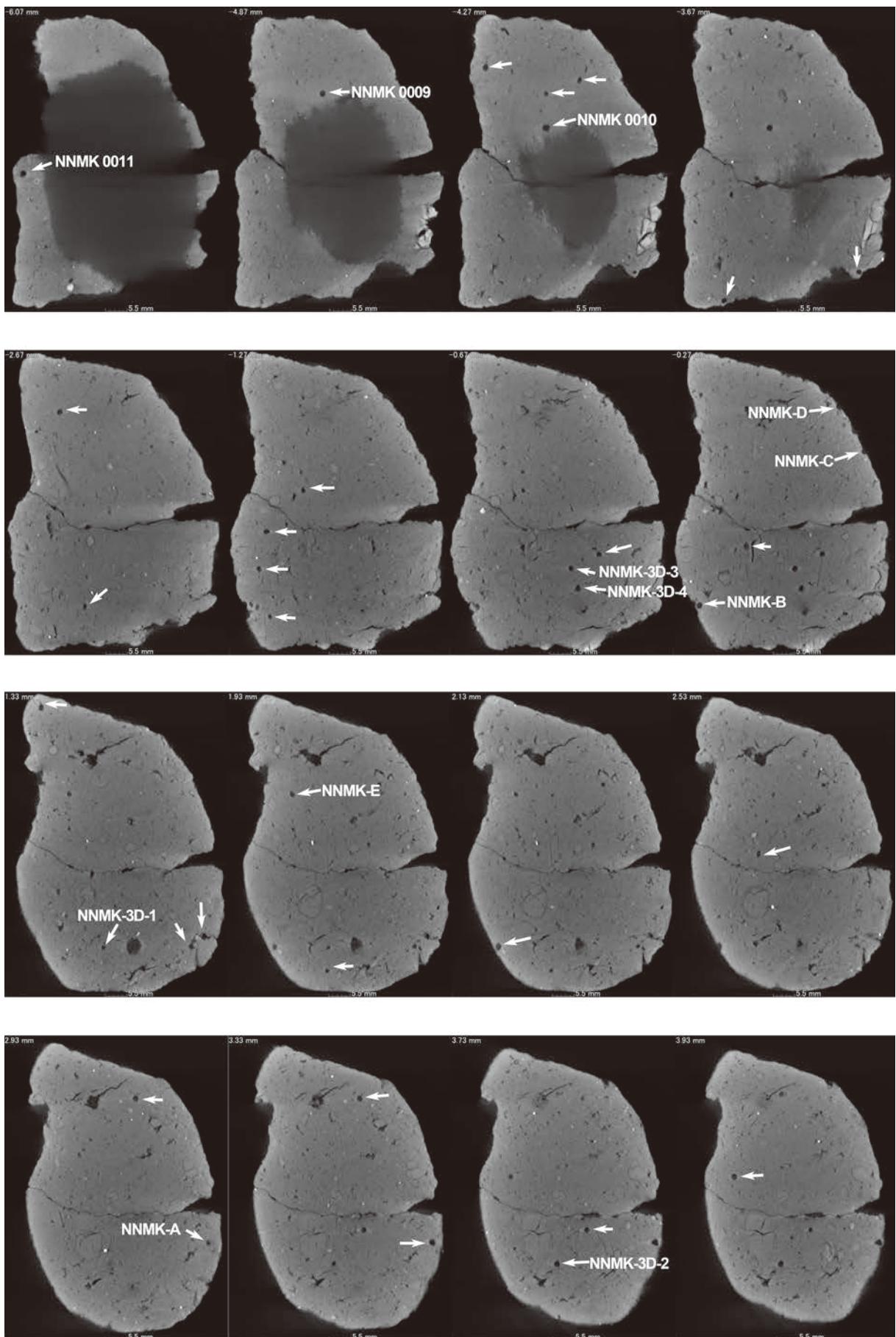


第41図 土器圧痕・レプリカ SEM 画像 1

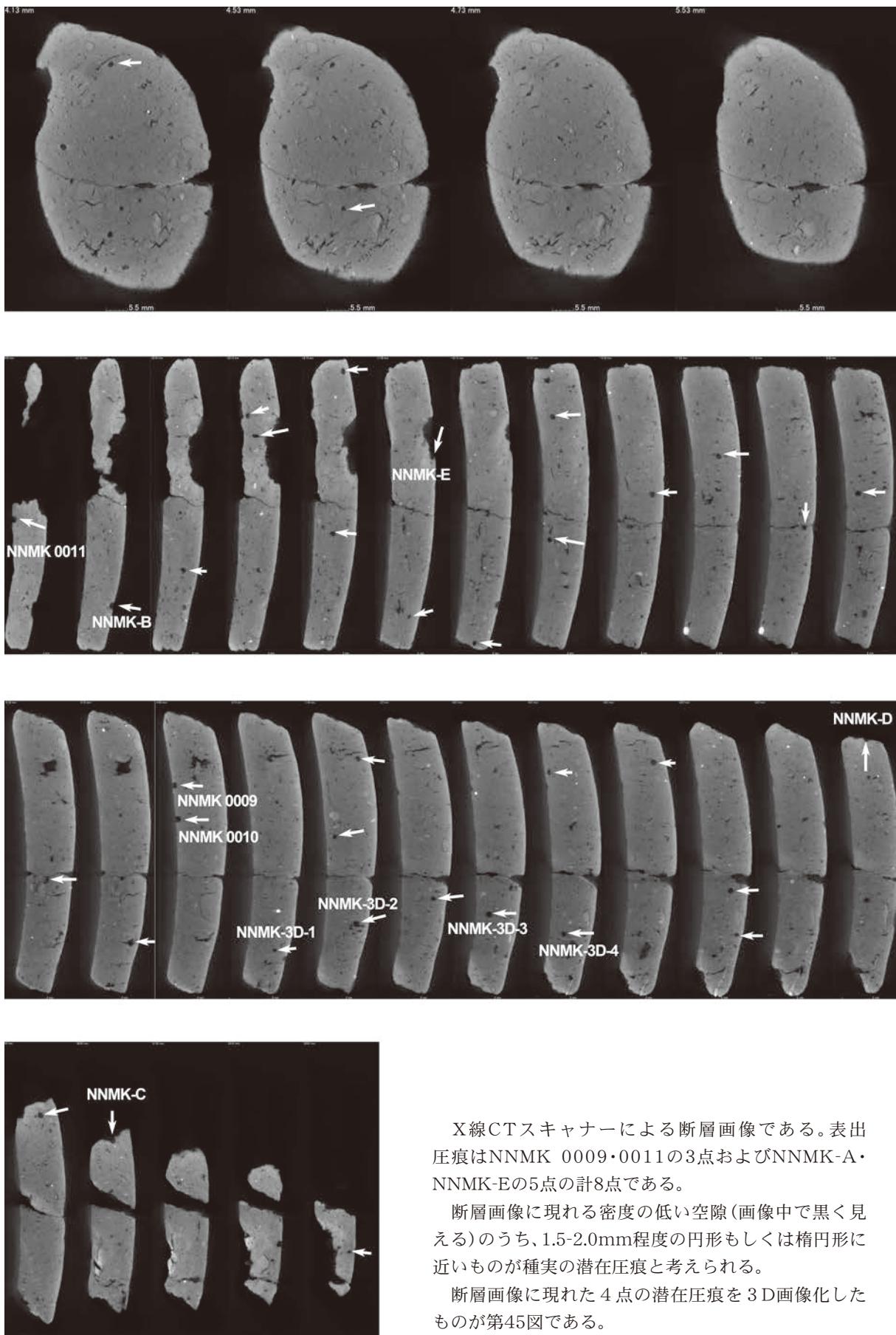
2. NNMK-339土器



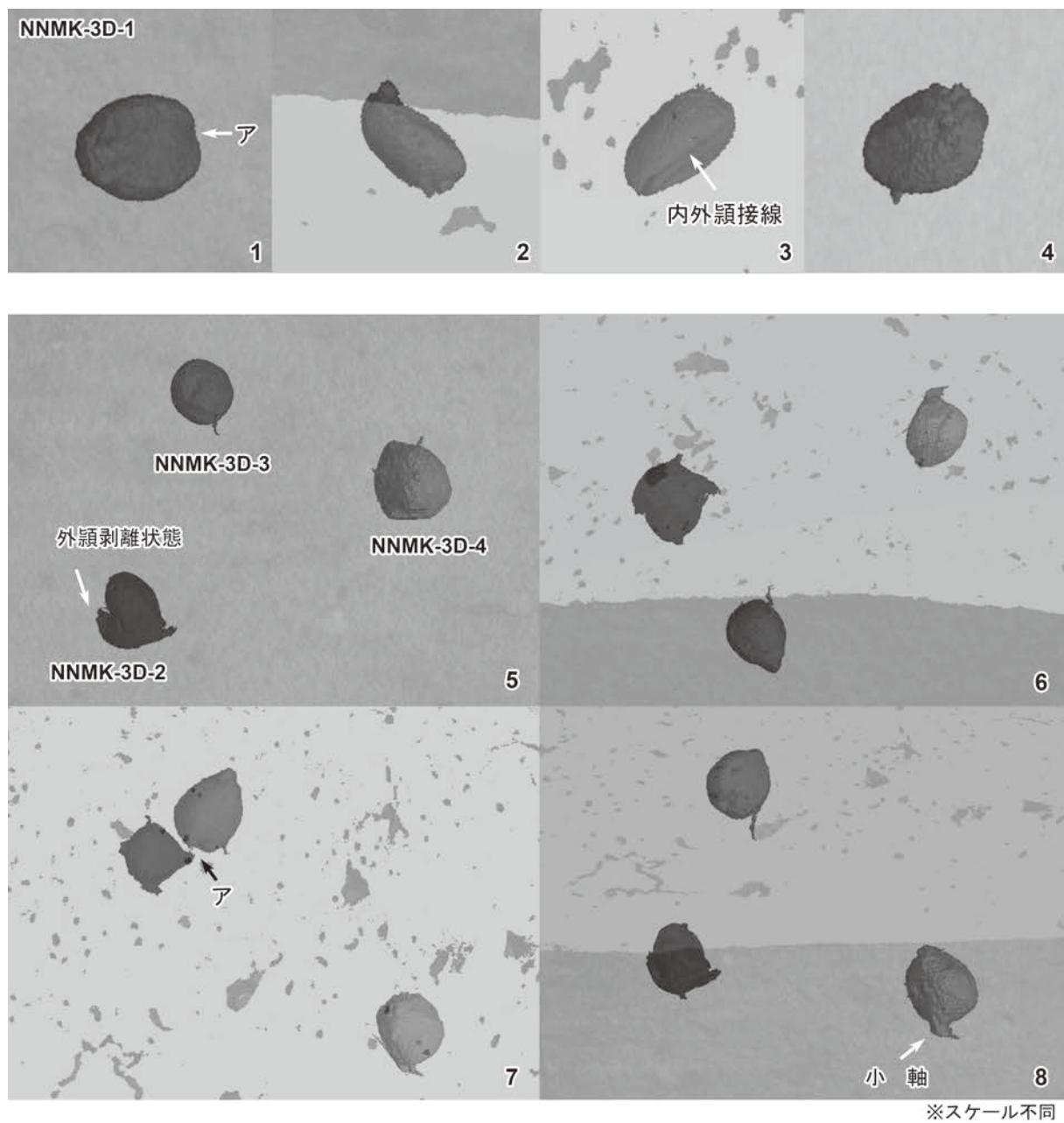
第42図 土器圧痕・レプリカSEM画像2



第43図 NNMK-339 土器 X線 CT 画像 1 < Y 軸断層面 >



第44図 NNMK-339 土器 X線 CT 画像 2 <Y軸・X軸断層面>



1-4はNNMK-3D-1の、5-8はNNMK-3D-2-4の3D画像の回転画像のカットコマである。

NNMK-3D-1の場合、1が内顎側、2・3が側面、4が外顎側に相当する。乳頭状突起までは再現できていないが、アワ有ふ果(9)の特徴を具えている。とくに内顎側の外顎との接線およびアワ有ふ果に特徴的な内顎上部の窪み(ア)が認められる。

同様にNNMK-3D-2の場合は外顎が剥離しかけた状態の有ふ果であり、NNMK-3D-4には小軸部分が残存した状態が観察される。

第45図 NNMK-339 土器潜在圧痕 3D 復元画像 (1-8) およびアワ有ふ果模式図

第2節 溝原貝塚出土の植物遺体分析報告

1 遺跡の概要

遺 跡：溝原(みぞばる)貝塚
所 在 地：名護市東江1丁目
調査期間：平成25年(2013)6月24日～平成26年(2014)2月28日
調査機関：名護市教育委員会
調査担当者：宮城弘樹・千田寛之
遺跡の年代：貝塚時代後期／グスク時代／近世／近代

2 バックグラウンド

琉球列島では1991年頃からフローテーション法を活用した植物遺体の回収作業が地道に続けられており、着実に「琉球列島の農耕のはじまり」や「先史・原史時代の農耕システム」が明らかになっている(高宮・千田2014、宮城・千田2014など)。名護市教育委員会では平成25年度に実施した溝原貝塚の緊急発掘調査において、植物遺体の回収を目的とした土壤のフローテーション作業を実施した。土壤のサンプリングはI地区南東区の炉跡(SL34)のほか、III地区で1m×1mのコラムサンプリングを2ヵ所(コラムA/コラムB)で行った。持ち帰った土壤サンプルを十分自然乾燥させた後、フローテーション装置を使用し合計689.9ℓの土壤をフローテーション処理した結果、計125(粒/片)の植物遺体を検出することができた。本項では同定された植物遺体について詳述すると共に、溝原貝塚の植物食利用について考察を行う。なお、フローテーション法の手順については椿坂1992に詳しいのでそちらを参照されたい。

3 回収された植物遺体について

イネ *Oryza sativa* L.

コラムBより完形7点、破片22点が確認された。完形のうち計測可能な種子は3点で、その平均値(高さ×幅×厚さ)は3.5mm×2.2mm×1.4mmである。また、イネ粒の破片が3点、イネ小穂軸が1点回収されている。

オオムギ *Hordeum vulgare* L.

コラムBより完形2点、破片1点が検出されている。サイズの計測が可能な種子はなかった。このほかオオムギの小穂軸が1点確認されている。小穂軸の同定を行うにあたり原生標本との比較検討を行ったところ、形態や小穂軸表面の状態が酷似していることからオオムギ小穂軸と判断した。

アワ *Setaria italica* (L.) Beauv.

完形がコラムBより11点回収されており、破片はSL34覆土より1点・コラムBより3点が出土している。完形のうちサイズの計測が可能だったのは2点で、その平均サイズ(高さ×幅×厚さ)は1.1mm×1.1mm×0.9mmであった。

ミレット

SL34より完形が1点確認された。形状は長楕円形で側面観は線状楕円形を成している。腹面には粒長の約6割を占める胚が存在する。保存状態が悪いため種皮の状態を観察することはできなかった。

タデ科 *Polygonaceae*

SL34より完形・破片が計9点出土している。種子の形状は断面が三角形状の広卵型状円形を成す。

マメ科？ *Fabaceae*？

コラムBからマメ科の破片と思われるものが1点回収された。保存状態が悪く形態的特徴を明確に確認できないため断定することはできないが、マメ科のへその一部と思われる部分(第46図7 矢印部)が存在することからマメ科？に分類した。

イネ科 *Poaceae*

SL34より完形が1点検出された。形状は広線状で側面観は線状である。粒長の3分の1ほどを成す胚が存在する。

カヤツリグサ科 *Cyperaceae*

コラムBより破片を1点同定した。形状は広倒卵形で中央部がやや隆起している。

不明種子

- ・タイプA：SL34より完形が2点出土している。卵形を4分の1にカットした様な形状をしており先端がやや尖り、外側の種皮表面には横方向の稜線が7本ほど確認できる。
- ・タイプB：コラムBより完形が1点同定された。形状は断面が三角形状の狭卵型を成し、基部にはへその様なものが存在する。種皮の表面には乳頭状の凸点により構成された網目模様が観察できる。

同定不可能

保存状態が極めて悪く、種の同定が不可能だった計52点を分類した。

4 考察

まず、サンプリング地点別に若干の考察を行う。I地区炉跡遺構(SL34)では、炉跡という遺構の性質を考慮し、土壤のサンプリングは覆土だけでなく周囲の土壤もサンプリングしている。これは炉跡内より周辺の方が植物遺体の残りが多い場合が多いためである。また、SL34では覆土からくびれ平底土器の底部片が出土しており、貝塚時代後期後半～グスク時代初期に溝原貝塚を形成した人々の植物食利用を反映するデータが得られるものと期待された。しかし、37.4ℓの土壤をフローテーション処理し分析を行ったが、穀物はアワ破片が1点確認されたのみで他はすべて野生種であった。穀物が殆ど含まれていなかったことから、この炉跡は調理を目的として利用されていなかったのかもしれない。続くⅢ地区では2箇所に1m×1mのコラムA/コラムBを設定し土壤のサンプリングを行った(第37図p53)。コラムAでは計297.5ℓの土壤をフローテーション処理したが、回収された植物遺体は同定不可能な小破片1点のみだった。コラムBでは計355ℓの土壤から計91点の植物遺体が同定され、そのうち穀物は計46点であった。穀物はいずれもⅢ層から検出されている。穀物の放射性炭素年代測定を(以下C-14年代測定)実施していないため理化学的な年代は明らかになっていないが、人工遺物の年代観よりⅢ層は貝塚時代後期からグスク時代初期に相当すると考えられることから、植物遺体の年代もこれに準ずる可能性があると考えられる。

次に、今回の分析によって得られたデータから溝原貝塚の植物食利用について考察を行う。

I 地区は穀物がアワ破片 1 点しか回収されていないため植物食利用について議論することは出来ないが、野生種でタデ科とイネ科が確認されていることから、周辺は開けた土地であった可能性が考えられる。III 地区の出土穀物は数量順にイネ29点・アワ14点・オオムギ 3 点でイネ + アワの利用傾向を示しており、なかでもイネを重視した植物食利用であった可能性が考えられる。土壌 1 ℥当たりの穀物数は0.12点で、穀物の出土数が僅かなのはグスク時代初期の他遺跡にもよく見られる傾向である(千田・高宮2012)。

最後に今後の課題を述べる。一つ目は、出土穀物のC-14年代測定を実施できなかった点である。数ミリ程度の植物遺体は、層の搅乱がない場合でも土中の僅かな隙間を移動する可能性があるため、C-14年代測定を実施して絶対年代を明らかにする必要があると考える。二つ目として、今回の分析では各穀物の重さを計量することができなかった点である。例えば、真志喜森川原遺跡(宜野湾市)や首里城淑順門西地区(那覇市)では、出土穀物の割合が数量別と重量別で異なっていた(前掲)。より詳細な比較検討を行うためにも、今後は可能な限り各穀物の重さも計量していく必要があるだろう。

謝辞

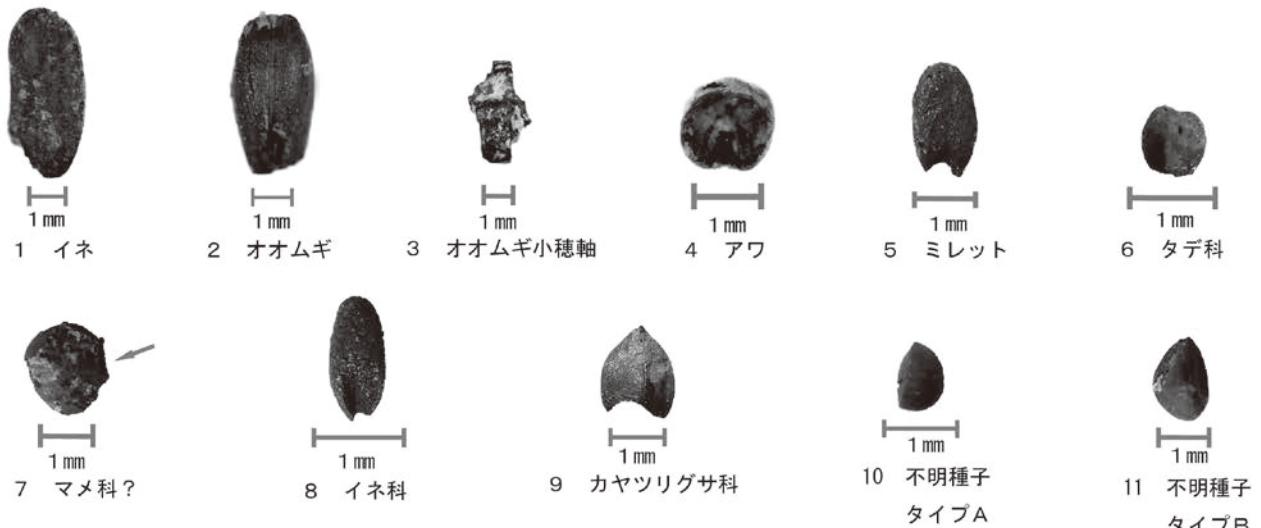
本報告を行うにあたり使用した各種機材の一部は、村田尚史氏・園田美穂子氏(名護博物館)および今帰仁村教育委員会よりお借りしたものである。また、種子の写真撮影に関して上田圭一氏(パリノ・サーヴェイ株式会社)より有益なアドバイスをいただいた。各氏のご協力に対して末筆ながら記して心より感謝申し上げる。

《参考文献》

- 赤嶺信哉・千田寛之 2011 「琉球列島先史・原史時代遺跡におけるフローテーション法の有効性」『南島考古』第30号、沖縄考古学会、pp.73-84.
- 高宮広土・千田寛之 2014 「植物遺体からみた琉球列島の環境変化と文化変化:奄美・沖縄諸島を中心に」『琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究論文集【第2集】』六一書房、pp.127-142.
- 千田寛之 2010 「屋部前田原貝塚遺跡II区第3号掘立柱建物跡出土の植物遺体分析報告」『南島考古』第29号、沖縄考古学会、pp.99-112.
- 千田寛之・高宮広土 2012 「グスク時代の植物食利用」発表要旨、2012年11月17日 第8回 琉球環境文化史研究会(沖縄県立博物館・美術館)
- 椿坂恭代 1992 「フローテーション法の実際と装置」『考古学ジャーナル』No.355、ニューサイエンス社、pp.32-36.
- 宮城弘樹・千田寛之 2014 「グスク時代初期農耕文化の動態」『南島考古』第33号、沖縄考古学会、pp.1-15.

地区	グリッド	遺構	層序	土壌量 (g)	浮遊物量 (g)		イネ	イネ 粉	イネ 小穂 軸	オ オ ム ギ	オ オ ム ギ 小 穂 軸	ア ワ	ミ レ ッ ト	イ ネ ?	ア ワ ?	タ デ 科	マ メ 科 ?	イ ネ 科	カ ヤ ツ リ グ サ 科	不 明 種 子	同 定 不 可	合 計				
					粒	片																				
I	T-18	SL34	覆土	37.4	976.35															9	0	1	0	2	19	33
			小計	37.4	976.35	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	9	0	1	0	2	19	33		
III	P-81	コラムA	I	17	10.96																				0	
III	P-81	コラムA	II	44	17.78																				0	
III	P-81	コラムA	III	84	41.01																				0	
III	P-81	コラムA	III下	81	34.13																				0	
III	P-81	コラムA	IV	50.5	34.03																				0	
III	P-81	コラムA	V	21	14.03																				1	
		小計		297.5	151.94	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1		
III	R-81	コラムB	I	23	15.49				1																1	
III	R-81	コラムB	III	260	29.64	7	22	3		2	1	1	11	3		2	3		1	1	1	1	32	90		
III	R-81	コラムB	III下	57	7.21																				0	
III	R-81	コラムB	IV	15	3.88																				0	
		小計		355	56.22	7	22	3	1	2	1	1	11	3	0	2	3	0	1	0	1	1	32	91		
		合計		689.9	1184.51	7	22	3	1	2	1	1	11	4	1	2	3	9	1	1	1	3	52	125		

第 16 表 植物遺体集計



第 46 図 溝原貝塚出土の植物遺体

第3節 溝原貝塚における放射性炭素年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

1 はじめに

溝原貝塚は、名護博物館の近隣に位置し、沖縄貝塚時代後期の土器が出土する。本報告では、遺跡から出土した骨と炭化材を対象に放射性炭素年代測定を実施する。

2 試料

試料は、AB01、AB03、AB04から出土した動物骨3点(No.1～3)と、SL35から出土した炭化材1点(No.4)の合計4点である。なお、動物骨は、No.1、3の2点がブタの肋骨、No.2がイヌの肋骨に同定されている。

3 分析方法

前処理は、骨と炭化材において異なる。炭化材は、土壤や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後、塩酸(HC 1)により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム(NaOH)により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(AAA処理;酸・アルカリ・酸処理)。試料を燃焼させ、二酸化炭素を発生させる。

骨は、コラーゲン抽出(CoEX)を行う。試料を超純水の入ったガラスシャーレに入れ、ブラシなどを使って根・土等の付着物を取り除いた後、ビーカー内で超純水に浸し、超音波洗浄を行う。試料を0.2Mの水酸化ナトリウム水溶液に浸し、試料の着色が無くなるまで1時間ごとに水酸化ナトリウム水溶液を交換する。超純水で中性に戻した後、凍結乾燥させ、粉碎する。リン酸塩除去のために、試料を透析膜に入れて、1Mの塩酸で酸処理を行った後、超純水で水性に戻す。透析膜の内容物を遠心分離し、得られた沈殿物に超純水を加え、90°Cに加熱した後、濾過する。濾液を真空凍結させ、コラーゲンを得る。コラーゲンを燃焼させ、二酸化炭素を発生させる。

各試料で発生させた二酸化炭素を真空ラインで精製した後、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイトを生成させる。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に13C/12Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma;68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.0(Copyright 1986-2013 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い(¹⁴Cの半減期5730±40年)を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。

暦年較正は、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68.3%の確率で存

在する範囲、 2σ は真の値が95.4%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

第 17 表 放射性炭素年代測定結果

地区 グリッド遺構	種類	処理 方法	測定年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正年代 (暦年較正用)	暦年較正結果				Code No.
						誤差	cal BC/AD	cal BP	相対比	
No.1 I地区 S-19 AB01	骨 (ブタ肋骨)	CoEX	620±20	-21.24 ± 0.40	680±20 (678±22)	σ	cal AD 1,281 - cal AD 1,299	cal BP 669 - 651	0.774	IAAA- 133104
						2σ	cal AD 1,370 - cal AD 1,379	cal BP 580 - 571	0.226	
	骨 (イヌ肋骨)	CoEX	150±20	-19.88 ± 0.43	240±20 (237±20)	σ	cal AD 1,275 - cal AD 1,308	cal BP 675 - 642	0.675	
						2σ	cal AD 1,361 - cal AD 1,386	cal BP 589 - 564	0.325	
No.2 I地区 T-19 AB03	骨 (イヌ肋骨)	CoEX	150±20	-19.88 ± 0.43	240±20 (237±20)	σ	cal AD 1,649 - cal AD 1,665	cal BP 301 - 285	0.784	IAAA- 133105
						2σ	cal AD 1,786 - cal AD 1,792	cal BP 164 - 158	0.216	
	骨 (ブタ肋骨)	CoEX	200±20	-24.20 ± 0.39	220±20 (217±21)	σ	cal AD 1,643 - cal AD 1,669	cal BP 307 - 281	0.670	
						2σ	cal AD 1,781 - cal AD 1,798	cal BP 169 - 152	0.310	
No.3 I地区 T-20/21 AB04	骨 (ブタ肋骨)	CoEX	200±20	-24.20 ± 0.39	220±20 (217±21)	σ	cal AD 1,946 - cal AD 1,950	cal BP 4 - 0	0.020	IAAA- 133106
						2σ	cal AD 1,654 - cal AD 1,668	cal BP 296 - 282	0.406	
	炭化材	AAA	420±20	-29.03 ± 0.53	350±20 (351±21)	σ	cal AD 1,781 - cal AD 1,797	cal BP 169 - 153	0.529	
						2σ	cal AD 1,947 - cal AD 1,950	cal BP 3 - 0	0.066	
No.4 I地区 T-18 SL35	炭化材	AAA	420±20	-29.03 ± 0.53	350±20 (351±21)	σ	cal AD 1,646 - cal AD 1,680	cal BP 304 - 270	0.413	IAAA- 133107
						2σ	cal AD 1,763 - cal AD 1,801	cal BP 187 - 149	0.482	
	骨 (ブタ肋骨)	CoEX	200±20	-24.20 ± 0.39	220±20 (217±21)	σ	cal AD 1,938 - cal AD 1,950	cal BP 12 - 0	0.104	
						2σ	cal AD 1,483 - cal AD 1,521	cal BP 467 - 429	0.480	
No.4 SL35	骨 (ブタ肋骨)	CoEX	200±20	-24.20 ± 0.39	220±20 (217±21)	σ	cal AD 1,575 - cal AD 1,585	cal BP 375 - 365	0.092	IAAA- 133107
						2σ	cal AD 1,590 - cal AD 1,625	cal BP 360 - 325	0.428	
	炭化材	AAA	420±20	-29.03 ± 0.53	350±20 (351±21)	σ	cal AD 1,460 - cal AD 1,528	cal BP 490 - 422	0.454	
						2σ	cal AD 1,545 - cal AD 1,546	cal BP 405 - 404	0.002	
						σ	cal AD 1,551 - cal AD 1,634	cal BP 399 - 316	0.545	

1) 処理方法のAAAは酸処理—アルカリ処理—酸処理、CoEXはコラーゲン抽出を示す。

2) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。

3) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

4) 付記した誤差は、測定誤差 σ （測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

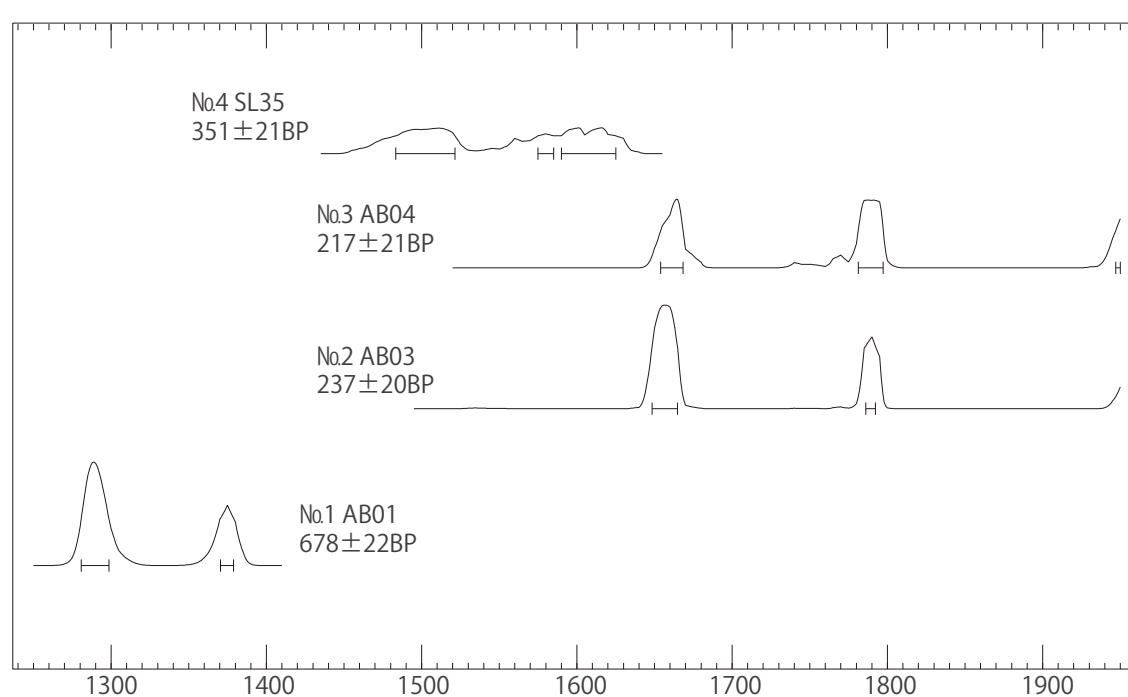
5) 暦年の計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0 (Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer) を使用した。

6) 暦年の計算には、補正年代に()で暦年較正年代として示した、一桁目を丸める前の値を使用している。

7) 年代値は、1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、暦用年代値は1桁目を丸めていない。

8) 統計的に真の値が入る確率は σ は68.3%、 2σ は95.4%である。

9) 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。



第 47 図 暦年較正結果

4. 結果および考察

同位体効果による補正を行った各試料の測定結果および暦年較正暦年代を第17表、第47図に示す。同位体効果による補正を行った測定結果は、AB01ブタ肋骨 680 ± 20 BP、AB03イヌの肋骨が 240 ± 20 BP、AB04ブタ肋骨が 220 ± 20 BP、SL35の炭化材が 350 ± 20 BPを示す。また、測定誤差を σ として計算させた暦年較正結果は、AB01ブタ肋骨がcalAD1,281-1,379、AB03イヌの肋骨がcalAD1,649-1,792、AB04ブタ肋骨がcalAD1,654-1,950、SL35の炭化材がcalAD1,483-1,625である。

これらの結果から、AB01から出土したブタ肋骨は13世紀後半～14世紀後半の可能性がある。AB03から出土したイヌ肋骨は17世紀中頃～18世紀末、AB04から出土したブタ肋骨は17世紀中頃～現代を示す。相対比を参考にすれば、AB03イヌ肋骨は17世紀中頃、AB04のブタ肋骨は17世紀中頃～18世紀末の可能性がある。また、2点の年代測定値は近似しており、比較的近い時期の可能性がある。

SL35から出土した炭化材は、15世紀後半～17世紀前半頃の可能性がある。なお、炭化材は、樹種同定を実施し、マツ属複維管束亜属に同定された。マツ属複維管束亜属には、アカマツ、クロマツ、リュウキュウマツがあるが、現在の沖縄島にはリュウキュウマツ1種のみが分布していることから、リュウキュウマツの可能性が高い。リュウキュウマツの木材は、径軟であるが、保存性は比較的高い。また、松脂を豊富に含み、燃焼性が高い。リュウキュウマツは、沿海地や二次林に普通に見られることから、当該期の遺跡周辺にも生育し、その木材を利用したことが推定される。

各試料の年代測定結果については、出土状況や出土遺物の情報も含めて検討することが望まれる。

第4節 溝原貝塚出土の埋葬獸骨に関する分析報告（暫定結果）

樋泉 岳二（早稲田大学）

1 はじめに

溝原貝塚は名護市街東部の海岸砂丘上、名護博物館を中心とする一帯に立地する。本遺跡は貝塚時代後期前半の遺跡として周知されているが、グスク時代～近世には名護間切番所、近代には名護村（のちに町）役場や国頭郡役所として利用されてきた場所である。1981年および1984～1985年に行われた発掘調査では、貝塚時代後期前半の土器および14～18世紀の陶磁器などが出土している（名護市教育委員会1989）。

2013年、名護博物館南側隣接地の道路拡幅工事に先立ち名護市教育委員会によって実施された発掘調査において、4か所の土坑からそれぞれ1個体分の獸骨（哺乳類遺体）が交連状態で検出され、埋葬されたものと推定されている。ここではこれらの「埋葬獸骨」に関する分析結果を報告する。ただし、現時点では遺体の同定・計測等の分析作業を完了していないため、ここでは現在までに確認されている分析結果の記載を中心とした暫定的な報告とし、最終的な報告は機を改めて行うこととした。

2 分析資料と分析方法

4体の獸骨には、出土日の順に「1号獸骨」～「4号獸骨」の個体番号が付けられている（第18表）。各獸骨は産状の実測図を作成したのち、個々の骨（または複数の骨のまとまり）ごとに番号（第19表の「取り上げ番号」）を付けて取り上げられている。ただし2号獸骨は全体を固定して取り上げられたが、取り上げ後に複数のブロックに分解したことである。以上の作業は名護市教育委員会の調査スタッフによって行われた。

各獸骨は遺物を伴っていなかったため考古年代は不明であるが、1号・3号・4号獸骨では骨自体の放射性炭素年代測定が実施され、1号獸骨は13世紀後葉～14世紀後葉、3号獸骨は17世紀中葉、4号獸骨は17世紀中葉～17世紀後葉の較正年代が得られている。

同定作業は2013年12月4～5日、名護市羽地資料整理室において行った。ただし作業時間が限られていたため、現時点では観察・計測や写真撮影などの作業を完了していない。また2号獸骨は埋葬状態のまま土ごと固定して取り上げられているため、一部の部位は土中に埋もれており十分に観察できなかった。ブタの年齢については、林ほか（1977）によるイノシシの歯の萌出・交換に基づく推定法がそのまま適用できるものと仮定して推定した。なお、分析に際しては、名護博物館所蔵の現生イノシシ・ブタ頭骨の骨格標本を参照した。

3 分析結果

各獸骨の概要を第18表に、同定結果と観察所見の詳細を第19～20表に示した。1号・2号・4号獸骨はブタの幼獸、3号獸骨はイヌの成獸と同定された。以下、各個体について、現時点での暫定的な同定所見を記載する。

（1）ブタ

1号獸骨

土坑（AB01）内から右半身を上にした側臥の状態で検出された。四肢の屈曲が少なく、ゆったりと横たわった状態である。ほぼ全身の骨が確認されている（第21表）。左脛骨以下および右中足骨以下を欠くが、これらは埋没後の攪乱によって失われた可能性が強い。第3乳臼歯（m3）萌出完了。第1後臼歯（M1）は未萌出であり（第20表）、生後3ヶ月程度の幼獸と推定され

る。四肢骨の骨端はすべて未癒合である。性別については、犬歯が乳歯であり外見的な判別が難しい(川島・村岡1984)ため不明とした(2号・4号獣骨も同様)。計測値は第22表に示した。放射性炭素年代測定による較正年代は13C後葉～14C後葉と推定されている。

2号獣骨

土坑(AB02)内から右半身を上にした側臥の状態で検出された。前肢を屈曲させ、後肢を前方に伸ばし、体を丸めた状態である。ほぼ全身の骨が確認されている(第21表)。右の肋骨・前肢は未確認だが、先述の通り土ごと取り上げられているため、土中に含まれている可能性がある。M1萌出完了直前であり(第20表)、生後半年(約0.5歳)程度の幼獣と推定される。四肢骨の骨端はすべて未癒合である。性別は不明。計測値は第22表に示した。年代は不明である。

4号獣骨

土坑(AB04)から仰臥(仰向け状態)で検出された。実測図・産状写真からみると、後肢(寛骨以下)はやや右側に傾いた状態であったと推測される。頭骨は2個の貝(マガキガイ・メンガイ類。第19表(4)の取り上げ番号41・42)で上向きに支えられており、メンガイ類には穿孔が認められた。ほぼ全身の骨が確認されている(第21表)。ただし左の前肢が未確認である点については、埋没前に切除されていたのか、埋没後の搅乱で失われたのか、あるいは分析の際に資料を見落としているのか、資料を再観察して確認する必要がある。なお左右の後肢指骨は埋没後の搅乱または発掘時に散逸した可能性が高い。m3萌出完了、M1は未萌出であり(第20表)、生後3ヶ月程度の幼獣と推定される。四肢骨の骨端はすべて未癒合である。性別は不明。計測値は第22表に示した。放射性炭素年代測定による較正年代は17C中葉～18C未と推定されている。

第18表 溝原貝塚から検出された埋葬獣骨の概要(暫定結果)

※年代は14C年代測定値に基づく較正時代

個体番号	1号獣骨	2号獣骨	3号獣骨	4号獣骨
種	ブタ	ブタ	イヌ	ブタ
出土日時	2013.8.7～	2013.9.2～	2013.9.9～	2013.9.27～
地区:グリッド	I : S19	I : T19	I : T19	I : T20/T21
遺構	AB01(土坑)	AB02(土坑)	AB03(土坑)	AB04(土坑)
年代※	13C後葉～14C後葉	不明	17C中葉	17C中葉～18C未
大きさ (長軸×短軸×深さ) 単位:mm	540×350×100	700×440×150	710×510×150	600×340×100
頭位方向	南	南	東	東
埋葬体位	右半身を上にした側臥 (四肢の屈曲が少なく、ゆったりと横たわった状態)	右半身を上にした側臥 (前肢屈曲、後肢を前方に伸ばし、体を丸めた状態)	転倒位 (背骨を下、頭部と後肢を上にして、体を強く屈曲させた転倒状態)	仰臥 (体をやや右側に傾けた仰向け状態)
出土部位 (第19表・第21表参照)	ほぼ全身 (左脛骨以下および右中足骨以下を欠失)	ほぼ全身	ほぼ全身	ほぼ全身 (左右中足骨以下を欠失、左前肢の有無不明)
年齢	m3萌出、M1未萌出 →生後3ヶ月	M1萌出完了直前 →0.5歳	永久歯完出=成獣 切歯わずかに咬耗 他は咬耗ほとんどなし	m3萌出、M1未萌出 →生後3ヶ月
性別	不明	不明	ペニスボーンあり→♂	不明
計測値(mm)	第22表参照	第22表参照	上P4L: 18.5, 下M1L: 21.0	第22表参照
備考		3号獣骨に近接(約75cm)。 全体を固定して取り上げたが その後複数のブロックに分解	2号獣骨に近接(約75cm)	頭骨が2個の貝(マガキガイ・メンガイ類)で上向きに支えられている。メンガイ類には穿孔あり

第19表(1) 埋葬獣骨の同定結果(1号獣骨)
種別:ブタ

取り上げ番号	部位	残存位置	左右	数	備考
1	下顎骨	第20表参照	R	1	
2	頭蓋骨			1	残存部位要確認
2	切歯骨・上顎骨	第20表参照	L	1	
2	切歯骨・上顎骨	第20表参照	R	1	
3	肩甲骨		R	1	
4	上腕骨		R	1	
4	橈骨		R	1	
4	尺骨		R	1	
5	手根骨～指骨		R	一括	
6	肋骨		R	1	
7	肋骨		R	1	
8	肋骨		R	1	
9	肋骨		R	1	
10	肋骨		R	1	
11	肋骨		R	1	
12	肋骨		R	1	
13	肋骨		R	1	
14	肋骨		R	1	
15	肋骨		R	1	
16	肋骨		R	1	
17	大腿骨		R	1	
18	脛骨		R	1	
19	腓骨		R	1	
20	距骨		R	1	
20	踵骨		R	1	
21	大腿骨		L	1	
22	腸骨		R	1	
22	座骨		R	1	
22	腸骨		L	1	
22	座骨		L	1	
23	腰椎			1	
24	腰椎			1	
25	腰椎			1	
26	腰椎			1	
27	腰椎			4	胸椎を含む可能性あり
28	肋骨		L	1	
29	肋骨		L	1	
30	胸椎	椎頭板		1	
31	肋骨		L	1	
32	肋骨		L	1	
33	肋骨		L	1	
34	肋骨		L	1	
35	肋骨		L	1	
36	肋骨		L	1	
37	手根骨～指骨		L	一括	
38	橈骨		L	1	
38	尺骨		L	1	
39	上腕骨		L	1	
40	下顎骨	第20表参照	L	1	
41	頸椎			一括	
42	胸椎	棘突起		1	
43	胸椎	棘突起		1	
44	胸椎	棘突起		1	
45	胸椎	棘突起		1	
46	胸椎	棘突起		1	
47	胸椎	棘突起		1	
48	胸椎			1	
49	胸椎			1	
50	胸椎			1	
51	胸椎			1	
52	胸椎			1	
53	胸椎			1	
54	胸椎			1	
55	肋骨		L	一括	
56	肩甲骨		L	1	

第19表(2) 埋葬獣骨の同定結果(2号獣骨)
種別:ブタ

取り上げ番号	部位・等	残存位置	左右	数	備考
1	頭蓋骨			1	左右の上顎骨を含む
1	下顎骨		L	1	L・R連合
1	下顎骨		R	1	
1	環椎			1	
1	軸椎			1	
1	頸椎			4	
2	肩甲骨		R	1	
3	上腕骨		R	1	
3	橈骨		R	1	
3	尺骨		R	1	
3	手根骨～指骨		*	一括	左右混在?要整理
4	肋骨		R	6	
5	胸椎			一括	
6	腰椎			一括	
7	肋骨		R	5	
8	胸椎			一括	
9	腸骨		R	1	
10	座骨		R	1	
11	大腿骨		R	1	
12	腸骨		L	1	
12	座骨		L	1	
13	大腿骨		L	1	
14	脛骨		R	1	
14	腓骨		R	1	
15	脛骨		L	1	
15	腓骨		L	1	
-	距骨～指骨		L	一括	
-	距骨～指骨		R	一括	

第19表(3) 埋葬獣骨の同定結果(3号獣骨)
種別:イヌ

取り上げ番号	部位	残存位置	左右	数	備考
1	腰椎			5	
2	大腿骨		R	1	
2	脛骨		R	1	
2	距骨		R	1	
2	第2中足骨		R	1	
2	第3中足骨		R	1	
2	第4中足骨		R	1	
2	指骨		R	一括	一部欠
3	足根骨～指骨		*	一括	左右混在?要整理
4	大腿骨		L	1	
4	脛骨		L	1	
4	腓骨		L	1	
5	第2中手骨		R	1	
5	第3中手骨		R	1	
5	第4中手骨		R	1	
5	第5中手骨		R	1	
5	指骨		R	一括	
6	橈骨		R	1	
6	尺骨		R	1	
7	仙骨			1	
7	寛骨		L	1	
7	寛骨		R	1	
8	肩甲骨		R	1	
9	肋骨		*	1	左右要確認
10	(椎骨)			?	紛失?/1または36に混入?
11	頭蓋骨			1	左右の上顎骨を含む
11	下顎骨			1	
11	下顎骨			1	
12	上腕骨		R	1	
13	陰茎骨			1	
14	第2中手骨		L	1	
14	第3中手骨		L	1	
14	第4中手骨		L	1	
14	第5中手骨		L	1	
14	指骨		L	一括	
15	橈骨		L	1	
15	尺骨		L	1	
16	上腕骨		L	1	
17	肋骨		*	1	左右要確認
18	肋骨		*	1	左右要確認
19	肋骨		*	1	左右要確認
20	肋骨		*	1	左右要確認
21	肋骨		*	1	左右要確認
22	肋骨		*	1	左右要確認
23	肋骨		*	1	左右要確認
24	環椎			1	
25	軸椎			1	
26	頸椎			1	
27	頸椎			1	
28	頸椎			1	
29	頸椎			1	
30	頸椎			1	
31	胸椎			1	
32	胸椎			1	
33	胸椎			1	
34	胸椎			2	
35	胸椎			2	
36	胸椎			2	
37	肋骨		L	1	
38	肋骨		L	1	
39	肋骨		L	1	
40	肋骨		L	1	
41	肋骨		L	1	
42	肋骨		L	1	
43	肋骨		L	1	
44	肋骨		L	1	
45	肋骨		L	1	
46	肋骨		L	1	
47	肩甲骨		L	1	
-	尾椎			一括	

第19表(4) 埋葬獣骨の同定結果(4号獣骨)
種別:ブタ

取り上げ番号	部位	残存位置	左右	数	備考
1	大腿骨		R	1	
1	脛骨		R	1	
2	腸骨		R	1	
2	座骨		R	1	
3	腸骨		L	1	
3	座骨		L	1	
4	尾椎			一括	
5	(寛骨の一部?)			?	紛失? 他の部位も混在? 要確認
6	仙骨			一括	
7	腰椎			2	
8	腰椎			1	
9	腰椎			1	
10	肋骨		L	1	
11	腰椎			1	
12	肋骨		L	1	
13	肋骨		L	1	
14	肋骨		L	1	
15	肋骨		R	1	
16	肋骨		R	1	
17	肋骨		R	1	
18	肋骨		R	1	
19	肋骨		R	1	
20	胸椎			1	
21	胸椎			1	
22	胸椎			1	
23	胸椎			1	
24	胸椎			1	
25	胸椎			1	
26	胸椎			1	
27	肋骨		R	3	
28	肋骨		R	2	
29	肋骨		L	1	
30	肋骨		L	1	
31	中手骨		R	一括	他の部位も混在? 要確認
32	手根骨		R	1	
33	橈骨		R	1	
33	尺骨		R	1	
34	上腕骨		R	1	
35	肩甲骨		R	1	
36	寛骨		L	<1>	→3と同一骨
37	胸椎			2	
37	肋骨		*	2	左右要確認
38	胸椎			3	椎体2, 棘突起3
39	肩甲骨		L	1	
40	環椎			1	
40	頸椎			一括	
41	マガキガイ			1	加工痕なし
42	メンガイ類			1	穿孔
43	頭蓋骨			1	
43	上顎i1		L	1	
43	上顎骨	第20表参照	L	1	
43	上顎骨	第20表参照	R	1	
43	下顎骨	第20表参照	L	1	
43	下顎骨	第20表参照	R	1	
-	大腿骨		L	1	
-	脛骨		L	1	
-	距骨		L	1	
-	踵骨		R	1	
-	肋骨			残り 一括	

第20表 ブタ顎骨の詳細 *2号歯骨は観察未了

個体番号	取り上げ番号	部位	左右	残存状態	
				〔 〕顎骨残存範囲, < >未萌出歯, ()萌出中の歯	
1号歯骨	2	切歯骨 - 上顎骨	L	[i1 < i2 > i3 c (m1) m2 m3 < M1 >].	全歯残存.
1号歯骨	2	切歯骨 - 上顎骨	R	[i1 < i2 > i3 c (m1) m2 m3 < M1 >].	全歯残存.
1号歯骨	40	下顎骨	L	[i1 (i2) i3 c (m1) m2 m3 < M1 > 下顎角].	全歯残存. 筋突起・関節突起欠損
1号歯骨	1	下顎骨	R	[i1 (i2) i3 c (m1) m2 m3 < M1 > 下顎角].	全歯残存. 筋突起・関節突起欠損
4号歯骨	43	上顎骨	L	[c (m1) m2 m3 < M1 >].	全歯残存. 切歯骨を欠損
4号歯骨	43	上顎骨	R	[i3 c (m1) m2 m3 < M1 >].	全歯残存. 切歯骨を欠損
4号歯骨	43	下顎骨	L	[(i2) i3 c (m1) m2 m3].	全歯残存. 下顎枝欠損
4号歯骨	43	下顎骨	R	[i3 c (m1) m2 m3 < M1 > 下顎枝].	全歯残存

第21表 各歯骨の出土部位表

●: 存在が確認されている部位
 ○: 第19表には記載がないが確実に存在していると考えられる部位
 △: 第19表には記載がないが存在した可能性が高いと考えられる部位
 ×: 欠損している部位
 ?: 存在の有無が明確でない部位

部位	1号歯骨	2号歯骨	3号歯骨	4号歯骨
	ブタ	ブタ	イヌ	ブタ
	L / R	L / R	L / R	L / R
頭骨	●	●	●	●
	● / ●	● / ●	● / ●	● / ●
	● / ●	● / ●	● / ●	● / ●
脊柱	●	●	●	●
	●	●	●	●
	●	●	●	●
	○	○	●	●
	○	○	●	●
肋骨				
前肢	● / ●	△ / ●	● / ●	● / ●
	● / ●	△ / ●	● / ●	● / ●
	● / ●	△ / ●	● / ●	?
	● / ●	△ / ●	● / ●	?
	● / ●	△ / ●	○ / ○	?
	● / ●	△ / ●	● / ●	?
	● / ●	△ / ●	● / ●	?
後肢	● / ●	● / ●	● / ●	● / ●
	● / ●	● / ●	● / ●	● / ●
	× / ●	● / ●	● / ●	● / ●
	× / ●	● / ●	● / △	○ / ○
	× / ●	● / ●	?	● / ?
	× / ●	● / ●	?	○ / ●
	× / ×	● / ●	△ / ●	△ / ×
	× / ×	● / ●	△ / ●	× / ×

第22表 ブタの計測結果

*1 計測点は基本的にDriesch (1976) に準拠した。

*2 尺骨・橈骨の「最大長」は近位・遠位両骨端が脱落した状態での最大長。

部位	計測点 *1	個体番号			備考
		1号歯骨 (約3ヶ月齢)	2号歯骨 (約6ヶ月齢)	4号歯骨 (約3ヶ月齢)	
上顎骨	M1 (未萌出) L	16.5	-	-	
下顎骨	m1-m3	32.5	34.1	34±	
下顎骨	m1-M1	-	49.6	-	
下顎骨	Id-Goc (Driesch(1976) Fig. 22b-1)	-	126.5	-	
下顎骨	連合部関節面後端-God	80.0	97.0	72.5	
下顎骨	Driesch(1976) Fig. 22b-12	-	35.2	-	
下顎骨	Driesch(1976) Fig. 22b-16b	16.7	22.7	18.0	
下顎骨	m3L	16.2	17.1	16.5±	
下顎骨	M1L	-	16.0	-	
尺骨	最大長 *2	65.0	77.0	62.3	近遠両骨端未癒合脱落
尺骨	SD	13.2	13.0	11.6	
橈骨	最大長 *2	46+	53.8	45.5	近遠両骨端未癒合脱落
橈骨	SD	11.2	11.8	9.7	

各個体の形質に関する予察

1号・2号・4号の各個体はいずれも基本的にイノシシの特徴をもつが、野生のイノシシに比べて顎骨や四肢骨が短縮化傾向を示していると思われることから、ブタとみてよいと考えられる。ただしすべて生後半年以内の幼獣であり、現時点ではこの年齢の野生イノシシとブタの骨格計測値等の比較資料を参照できていないため、形質的な特徴や家畜化の程度、品種等に関する厳密な検討については今後の課題である。

なお、2号獣骨の下顎第1後臼歯(M1)長は16.0mmで(第22表)、川島・村岡(1984)に記載されている国頭産現生リュウキュウイノシシのM1長(平均±SD:雄12.0±0.9mm、雌12.0±0.7mm)よりもかなり大きく、今帰仁城跡および同周辺遺跡(14~16世紀)のブタM1長(14.3~14.8mm、樋泉2007、樋泉ほか2009)と比較しても大型である。1号獣骨と4号獣骨はM1が未萌出だが、下顎第3乳臼歯(m3)のサイズは2号獣骨よりやや小さい程度であるから、これらも2号獣骨に近い体格であったと推定される。以上から、出土した3体のブタは現生の野生リュウキュウイノシシより大型であり、グスク時代のブタと比較してもやや大型であった可能性がある。

(2) イヌ

3号獣骨

2号獣骨に近接(約75cm)した土坑(AB03)から背骨を下、頭部と後肢を上にして、体を強く屈曲させた転倒状態で検出された。ほぼ全身の骨が揃う(第21表)。後肢の足根骨~指骨の一部が未確認だが、埋没後の攪乱によって失われた可能性が強い。永久歯は完出しておらず、切歯がわずかに咬耗しているが、他の歯はほとんど咬耗していないことから若い成獣と推定される。陰茎骨が確認されており、雄である。裂肉歯の最大長は上顎(P4)18.5mm、下顎(M1)21.0mmで、イヌとしては中型のサイズと推定される。放射性炭素年代測定による較正年代は17C中葉と推定されている。

4 考察

ここでは上記の結果に基づいて、各獣骨の性格について予察する。

(1) ブタ

1号獣骨

生後3ヶ月程度の幼獣である。産状は体を緩やかに横たえた側臥で、特殊な状況は認められない。また、埋没後の攪乱によると思われる一部の部位の欠損はみられるが、全身骨がほぼ揃っている。以上から、本個体は何らかの原因で死亡した幼獣が埋葬されたものである可能性が高い。ただし死因について骨格から推定することは困難である(2号・4号獣骨についても同様)。

なお、本個体の年代(骨自体の放射性炭素年代測定による較正年代)が13世紀後葉~14世紀後葉とグスク時代でも古めの年代を示している点については、以下の点からみて疑問が残る。①グスク時代のブタは一般に家畜化の程度が低く、形態的には野生イノシシと判別しにくい場合が多いのに対して、本例は家畜化の兆候(四肢の短縮など)が比較的明らかである。②本個体は前述の通り今帰仁城跡等にみられるグスク時代のブタよりも大型の可能性がある。③近接して出土した3号・4号獣骨が17世紀中葉もしくはそれ以降と推定されているのに対して、本例はこれらよりもかけ離れて古い。以上を考慮すると、本個体の年代は実際にはより新しく、3号・4号獣骨と同時代のものである可能性も考慮する必要があるようと思われる。ただ

し本遺跡では14世紀代の遺物も出土していることから、本個体が実際にグスク時代のものである可能性も否定はできない。この問題については今後の課題としておきたい。

2号獣骨

生後半年程度の幼獣である。産状は体を丸めた状態の側臥で、特殊な状況は認められない。また、おそらく全身骨が揃っていると思われることから、何らかの原因で死亡した幼獣が埋葬されたものである可能性が高い。

4号獣骨

生後3ヶ月程度の幼獣で、1号獣骨とほぼ同齢である。年代は17世紀中葉～18世紀末(近世)と推定されており、年代的にもブタとみて問題はない。産状は仰臥で、1号・2号獣骨とは大きく異なるが、頭骨が2個の貝(マガキガイと穿孔されたメンガイ類)で上向きに支えられていることから、何らかの原因で死亡した幼獣が埋葬されたものとみてよいと思われる。右前肢が未確認である点については課題が残るが、この点は今後確認したい。

(2) イヌ

狭い土坑内に背中を下、頭と後肢を上にして、丸めて詰め込んだような状態で検出されており、ブタ幼獣とは明らかに産状が異なる。年齢も成獣であり、ブタ幼獣とは遺体の取扱い方が異なっていたものと思われる。現代的な価値観で評価することは控えなければならないが、本個体が埋葬されたものか、単に死体が土坑内に廃棄されたものかなど、本個体の性格についてはさらに検討が必要と思われる。

《文献》

川島由次・村岡誠(1984)「野国貝塚B地点出土の獣骨について」

『野国－野国貝塚B地点発掘調査報告－』沖縄県教育委員会

名護市教育委員会(1989)『溝原貝塚』(名護市文化財調査報告－9)

樋泉岳二(2007)「今帰仁城跡周辺遺跡出土の脊椎動物遺体群－Ⅲ区b・東7区・シニグンニー」『今帰仁城跡周辺遺跡Ⅲ』
今帰仁村教育委員会

樋泉岳二・名島弥生・菅原広史(2009)「今帰仁城跡主郭東斜面から出土した脊椎動物遺体」『今帰仁城跡発掘調査報告』
今帰仁村教育委員会

林 良博・西田隆雄・望月公子・瀬田季茂(1977)「日本産イノシシの歯牙による年齢と性の判定」日本獣歯学雑誌
39:165-174

Drisch,A.(1976) A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites, Peabody
Museum Bulletin1.



1. 1号獸骨出土状況



2. 2号獸骨出土状況



3. 3号獸骨出土状況



4. 4号獸骨出土状況

第48図 獣骨出土状況

第6章 総括

溝原貝塚は、名護市東江溝原に立地する遺跡である。幸地川河口の左岸にあって、後背は東袋田（アガリブックワ）と呼ばれ、かつては水田の広がる湿地帯であった。遺跡前面は海浜という海岸砂丘に立地する。発掘調査やこれまでの文献記録などから、貝塚時代後期後半期の貝塚、また少量ながらグスク時代の遺物が回収され、近世には名護間切番所が置かれ、近代には旧名護町の町役所や国頭郡役所が所在していた。特に今回調査地となつた市道山手線の一帯は、近代名護町の官公庁街として、商業地の大兼久馬場の通りと合わせて海岸線と並行する東西約1kmが近代名護の目抜き通りとして賑わいを見せた地域であった。

本発掘調査の直接の契機は、名護市建設部の山手線道路拡張事業に伴うもので、平成24・25年度に当該地域の範囲確認調査（名護市教委2013）を実施し、平成25年度に遺跡範囲において開発を免れない当該範囲の緊急発掘調査を実施した報告である。

緊急発掘調査では、前章までに明らかにしたように3つの地区に区分けし実施されⅠ地区では、ブタ・イヌの埋葬と思われる遺構や、建物跡と思われる小穴群が確認されるとともに、遺物としては貝塚時代後期からグスク時代、近世・近代の各時期の陶磁器を主とする出土遺物が得られている。また、Ⅱ地区も概ねⅠ地区と同じ時代の遺物が回収されている。これらの遺物は、貝塚時代後期後半、グスク時代からおおよそ継続的に本地域が開発され恒常に利用されていた様子をうかがい知ることができ、文献上登場する近世東江村の存在を印象づけるものである。一方、Ⅲ地区は貝塚時代後期でも前半期、弥生時代中期並行期（約2000~1800年前頃）の遺物がまとまって出土するとともに、近世期の遺物を含まず、グスク時代の遺物が少量ながらも単独的に得られた。Ⅲ地区の成果は、これまで得られていた溝原貝塚の時代観を遡及する遺物を回収するとともに、東江地域の根神屋や銭川井（ジンガガ）に近い地点でグスク時代初期（12世紀前後）の遺物が得られた事は、本地域の歴史展開を考える上で重要な発見となつた。

一方、Ⅰ地区SE91の西側は同地区東側で確認されたようなピットや土坑は無く、検出された土坑もそのほとんどが戦後構築された廃棄土坑であった。加えて地山面の微地形もP/R-11グリッドで、東から西へ下り勾配をもって傾斜しており、このあたりが幸地川河口の右岸端部と推定された。『名護六百年史』には「幸地川の流路は、東袋を通って溝原に落ち、水路が曲りくねって水捌さばきが悪いため、此所でも水害は年中つき纏って農民達を悩ました。幸地川の流域を一本の河川に集め、海に最短距離の水路を作る事は、東袋や大袋のような低地で、然も地味豊かな田地を守る上に最も効果的な方法だと考えられ、良豊はこれを決行した。」（比嘉1958:13p）と記されている。近世には既に河川流路が改良されていたことが知られており、遺跡近傍の空間を実地で把握することができたものと考えられる。

本調査において注目された遺構にブタ及びイヌの埋葬跡が挙げられる。分析を依頼した樋泉岳二氏の報告によると、1号・2号・4号の各個体はイノシシの特徴をもつが、野生のイノシシに比べて顎骨や四肢骨が短縮化傾向を示していると指摘され、形態的に「ブタ」と結論付ける。また、野生イノシシと比較して大型でかつグスク時代出土例に比してやや大型の可能性を指摘し、当該資料が相対的に新しい可能性を推定する。他方3号獸骨のイヌは、永久歯が完出、切歯はわずかに咬耗するが他の歯はほとんど咬耗していないことなどから、若い成獣で、イヌとしては中型のサイズと指摘している。このような埋葬獸骨が示す考古学的な事例は乏しく推定の域を出ないが、一般的に疫病等不審な突然死の家畜の埋葬を行うことが考えられ、東江集落内における家畜の死亡を葬ったものと考えられる。年代的なものも判然としないため確度は低いが、以下の明治36年（1909）4月3日の『琉球新報』の記事は興味深い事例である。

「名護間切の豚疫　國頭郡名護間切東江村に於て昨月廿五日より同廿八日までに豚7頭豕羅斯にかかり目下治療中の由其筋へ報告あり。」

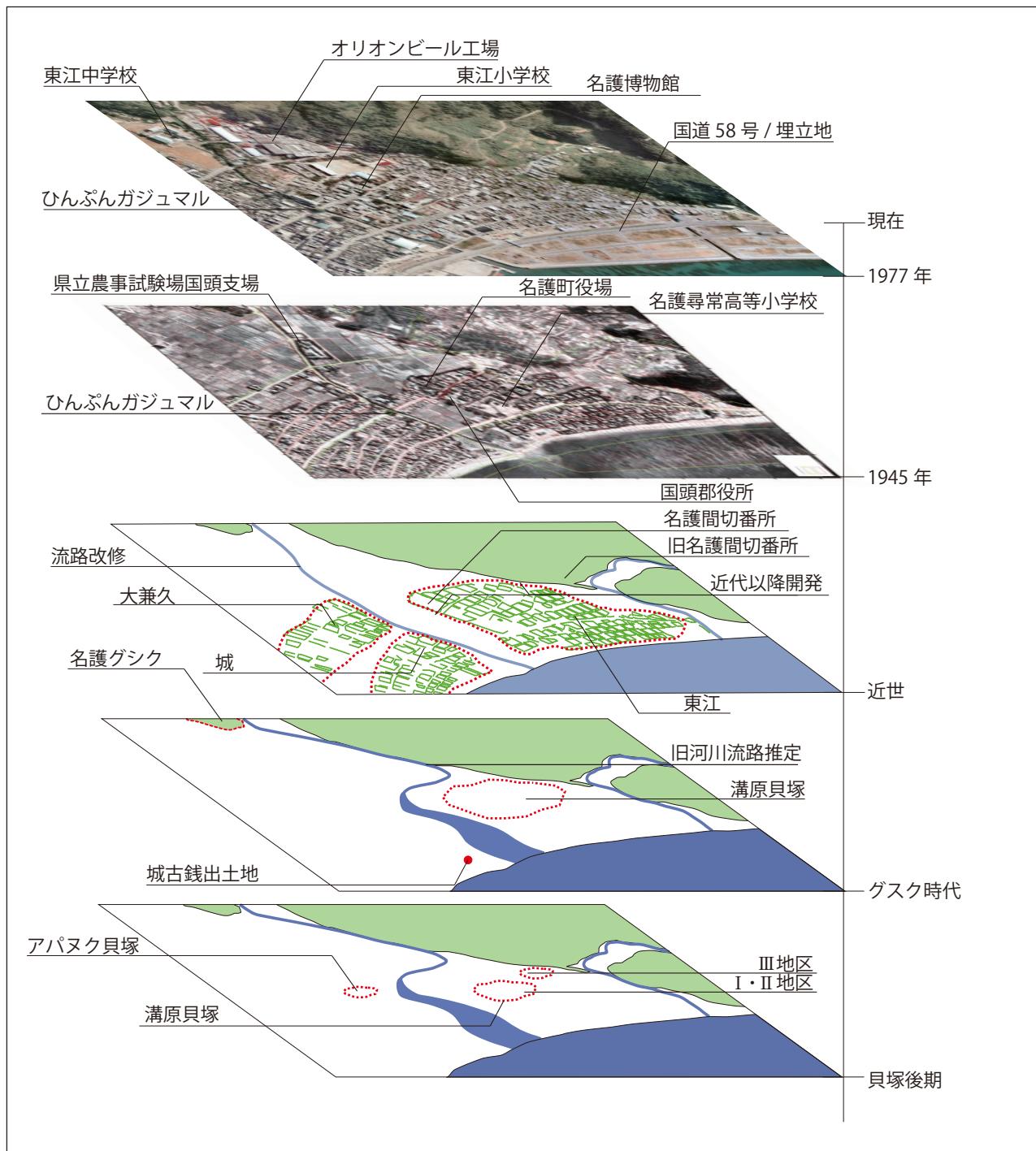
新聞記事は、偶然にも東江の事例である。沖縄県では明治33年以降たびたび豚伝染病が流行したことが知られ、大正11年に沖縄県の獣疫血清製造所を設立し、豚コレラの防疫・血清類の製造にあたらせ予防対策を行ったとされる(當山1979)。

今一つ、上記のような疫病等で死んだ家畜埋葬遺構を遺跡空間の中で解釈する参考事例として、以下の事例は参考になる。宜野湾市の事例だが、戦前(中略)病気で死んだ豚は食べることが出来ず、村外れの松林などに埋められました(宜野湾市教委市史編集係(編)2010)。即ち、東江集落の域の境界がある時期には当地点にあった可能性を指摘することができ、埋葬遺構の分布する一帯は集落の外れにあたっていた可能性が考えられる。ただ、国頭郡役所の業務内容に病死の豚などの引き取りや、処分を行っている可能性も無いわけではないので、この点も考慮する必要がある。

最後にⅢ地区は、Ⅰ・Ⅱ地区で得られた近世期の遺物は皆無で、貝塚時代後期前半、グスク時代、近代の遺物が出土する。近代の遺物は試掘調査時においてⅠ層の表土層より回収されているが現代のガラス瓶などを含むとともに小片であることからⅠ・Ⅱ区でみられたような恒常的な生活を示すものではなく周辺の生活層を起源とする遺物と考えられた。南西側では古井戸が確認されており、これらの井戸跡の竪坑覆土より近代の陶磁器が回収されているので、古井戸の開発と関連するものと考えられる。ただ、Ⅲ地区のⅠ・Ⅱ層は重機による掘削によって除去し、近代の土地利用の詳細については調査対象より除外した。ここで注目されたのは、その下層に形成されたⅢ層である。Ⅲ層の遺物包含層は西側では被覆は薄く、東南側で厚くなる。Ⅲ層下からⅣ層では褐色を呈し酸化した鉄分等の沈着が確認されており、後年の水田等による利用が行われたものと推測されたが、水田の痕跡等を確認することはできなかった。北東側50mほどの所に銭川井が所在しており、これを水源とする水田もしくは貯水池等が所在した可能性があると思われる。Ⅲ地区では理化学的な分析も行った。まず、Ⅳ層より採取された炭化物を用いて放射性炭素年代測定を実施し、暦年較正年代でcalAD1,448～calAD1,514という値(2σ)が得られた。同時に花粉分析も実施しているが花粉化石は全く検出されなかった。

また、今回の調査では新たな試みとしてレプリカ・セム法とX線CTスキャナーによる土器の圧痕分析を行った。その結果、Ⅰ地区出土のグスク土器胎土内に複数のアワが混入されていることを確認した。土器胎土内に栽培植物遺体の混入が明確に確認された琉球列島で初の事例となると思われる。分析の結果、偶然による混入ではなく人為的なものである可能性が指摘されている。

以上、山手線街路事業に伴い実施された溝原貝塚における緊急発掘調査では、本地域を理解する上で貴重な資料を提供してくれている。上記Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ地区の成果とこれまでに実施されてきた本遺跡地及び周辺の発掘調査や立会調査の成果に基づき幾つか知りえた所見等を地図上に落とすと第49図に示すような土地利用の開発変遷や遺跡の分布を推定することができる。溝原貝塚は名護地域の歴史を包蔵する貴重な文化遺産であることを改めて確認することができたが、調査は部分的であるとともに、近現代の開発によってその多くが失われてしまった。今後も、学校等公共施設の整備や個人住宅の建築などによって部分的に行われる開発においても、貴重な遺跡が発見される可能性がある。丁寧な開発調整を行い遺跡の保存に努めるとともに、今回の出土品についても広く市民に活用いただきたい。



第 49 図 溝原貝塚周辺の土地利用変遷模式図

《参考文献》

- 赤嶺信哉・千田寛之2011年 「琉球列島先史・原史時代遺跡におけるフローテーション法の有効性」『南島考古』第30号 沖縄考古学会 pp.73-84
- 沖縄県立埋蔵文化財センター(編)2009年 『瀬底島・アンチの上貝塚 個人住宅建設に伴う緊急発掘調査報告』本部町 文化財調査報告書第9集 本部町教育委員会
- ウィキペディア日本語版「M 1 (銃剣)」2014年6月25日(水) 08:21の版
([http://ja.wikipedia.org/wiki/M1_\(%E9%8A%83%E5%89%A3\)](http://ja.wikipedia.org/wiki/M1_(%E9%8A%83%E5%89%A3))) (2015年1月閲覧)
- 川島由次・村岡 誠1984年 「野国貝塚B地点出土の獸骨について」『野国－野国貝塚B地点発掘調査報告－』 沖縄県教育委員会
- 宜野湾市教育委員会文化課市史編集係(編)2010年 『市史だより Gači-majaa(がちまやあ)』 第19号 p.3
- 熊本大学法文学部考古学研究室(編)2010年 『考古学研究室報告 ナガラ原東貝塚 6』 第46集熊本大学法文学部 考古学研究室
- 瀬戸哲也・仁王浩司・玉城靖・宮城弘樹・安座間充・松原哲志2007年
「沖縄における貿易陶磁研究－14～16世紀を中心に－『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』補遺編 pp.339-360
- 高宮広土・千田寛之2014年 「植物遺体からみた琉球列島の環境変化と文化変化：奄美・沖縄諸島を中心に」『琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 研究論文集【第2集】』 六一書房 pp.127-142
- 千田寛之2010年 「屋部前田原貝塚遺跡Ⅱ区第3号掘立柱建物跡出土の植物遺体分析報告」『南島考古』第29号 沖縄考古学会 pp.99-112
- 椿坂恭代1992年 「フローテーション法の実際と装置」『考古学ジャーナル』No.355, ニューサイエンス社 pp.32-36
- 樋泉岳二2007年 「今帰仁城跡周辺遺跡出土の脊椎動物遺体群－Ⅲ区b・東7区・シニグンニー」『今帰仁城跡周辺遺跡Ⅲ』 今帰仁村教育委員会 pp.253-282
- 樋泉岳二・名島弥生・菅原広史2011年 「今帰仁城跡主郭東斜面から出土した脊椎動物遺体」『今帰仁城跡発掘調査報告』今帰仁村教育委員会 pp.179-238
- 當山眞秀1979年 「豚」『沖縄県畜産史』那覇出版社 pp.92-93
- 名護市教育委員会(編)1982年 『名護市の遺跡(2) 分布調査報告』名護市文化財調査報告－4 名護市教育委員会
- 名護市教育委員会1989年 『溝原貝塚』名護市文化財調査報告－9 名護市教育委員会
- 名護市史編さん室1985年 『名護市史資料編・3 近代新聞資料2』名護市役所 p.335
- 名護市史編さん室1988年 『名護市史・本編・11 わがまち・わがむら』名護市役所 p.179-190
- 名護市史編さん室2003年 『名護市史本編・9 民俗Ⅲ』名護市役所 pp.112-122
- 林良博・西田隆雄・望月公子・瀬田季茂1977年 「日本産イノシシの歯牙による年齢と性の判定」日本獣歯学雑誌39 pp.165-174
- 比嘉宇太郎1958年 『名護六百年史』名護町役場(2004『名護6百年史』名護市役所第三版)
- 比嘉親平1986年 「名護間切番所敷地の変遷」『名護博物館紀要 あじまあ』2 名護博物館
- 宮城弘樹・千田寛之2014年 「グスク時代初期農耕文化の動態」『南島考古』第33号沖縄考古学会 pp.1-15
- 琉球新報社(編)1909年 『琉球新報』16816号(明治36年4月3日) p.3



1. I 地区遠景その 1 (北から南向き)



2. I 地区遠景その 2 (南から北向き)



3. II 地区遠景その 1 (北から南向き)



4. II 地区遠景その 2 (南から北向き)



5. III 地区遠景その 1 (南から北向き)



6. III 地区遠景その 2 (南から北向き)



7. 名護博物館前のフクギ



8. 東江のニガミヤー

図版 1 調査区および周辺の状況



1. I 地区基本層序 (S-22 東壁)



2. 1号獸骨出土狀況



3. 2号獸骨出土狀況



4. 3号獸骨出土狀況



5. 4号獸骨出土狀況



6. 2号獸骨取り上げ作業



7. S L 34 後期土器底部出土狀況



8. I 地区 (南東区) 完掘

図版 2 I 地区調査状況



1. I 地区南東区遺構検出状況

図版 3 I 地区調査状況



1. 表土掘削作業



2. II 地区基本層序 (T-52 東壁)



3. T-52 遺構検出状況 (北から南向き)



5. T-55 完掘状況



4. V/W-56 完掘状況



6. T-57/58 完掘状況



7. 作業風景

図版 4 II 地区調査状況



1. III地区基本層序（南壁）



2. 溝状遺構（SD131-1）検出状況



3. 尖底土器（3001）埋没状況（SD131-1）



4. 後期土器口縁部（3002）出土状況（Q-79）



5. 平成 25 年度試掘調査



6. 作業風景

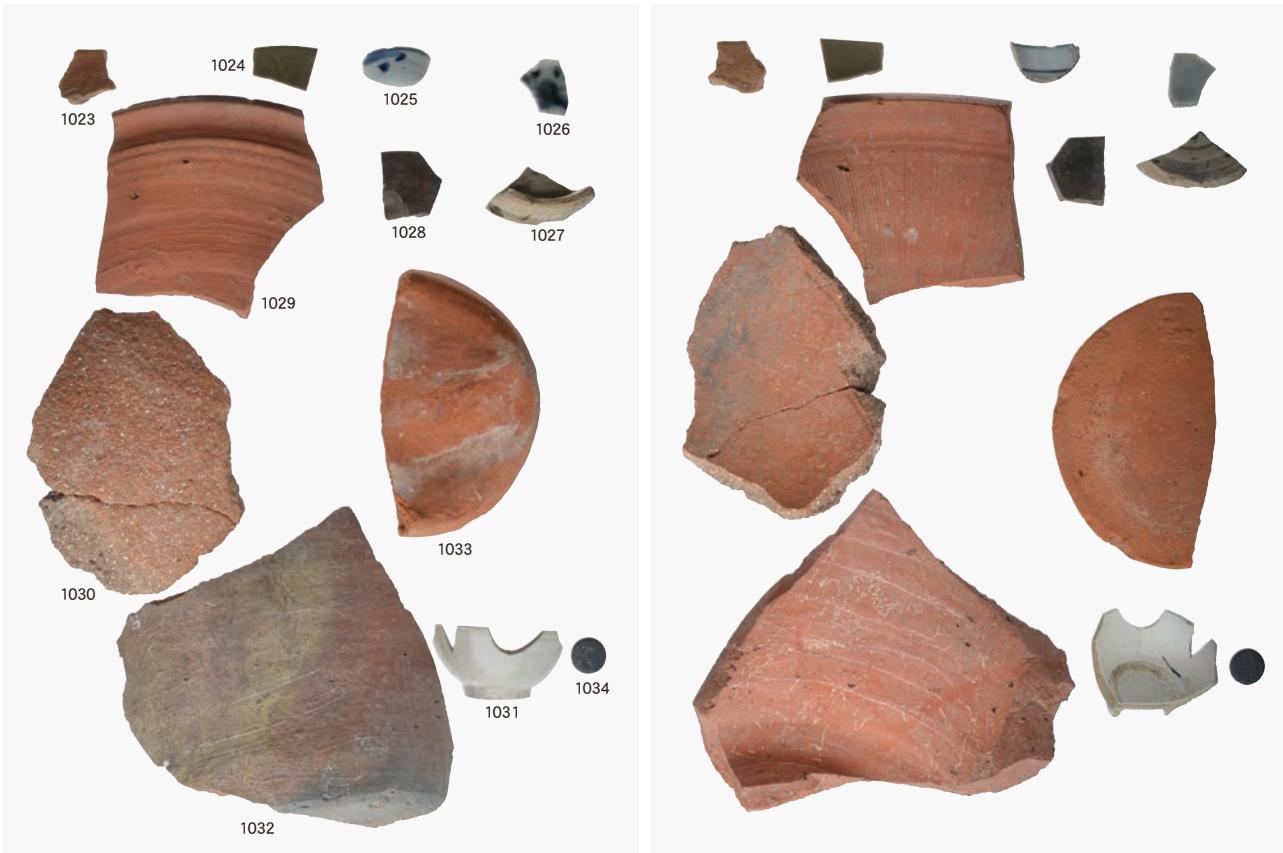


7. III地区完掘状況

図版 5 III地区調査状況



1. I 地区 SL34・SK11-1/SK11-2・SK57/SK57-1 遺物

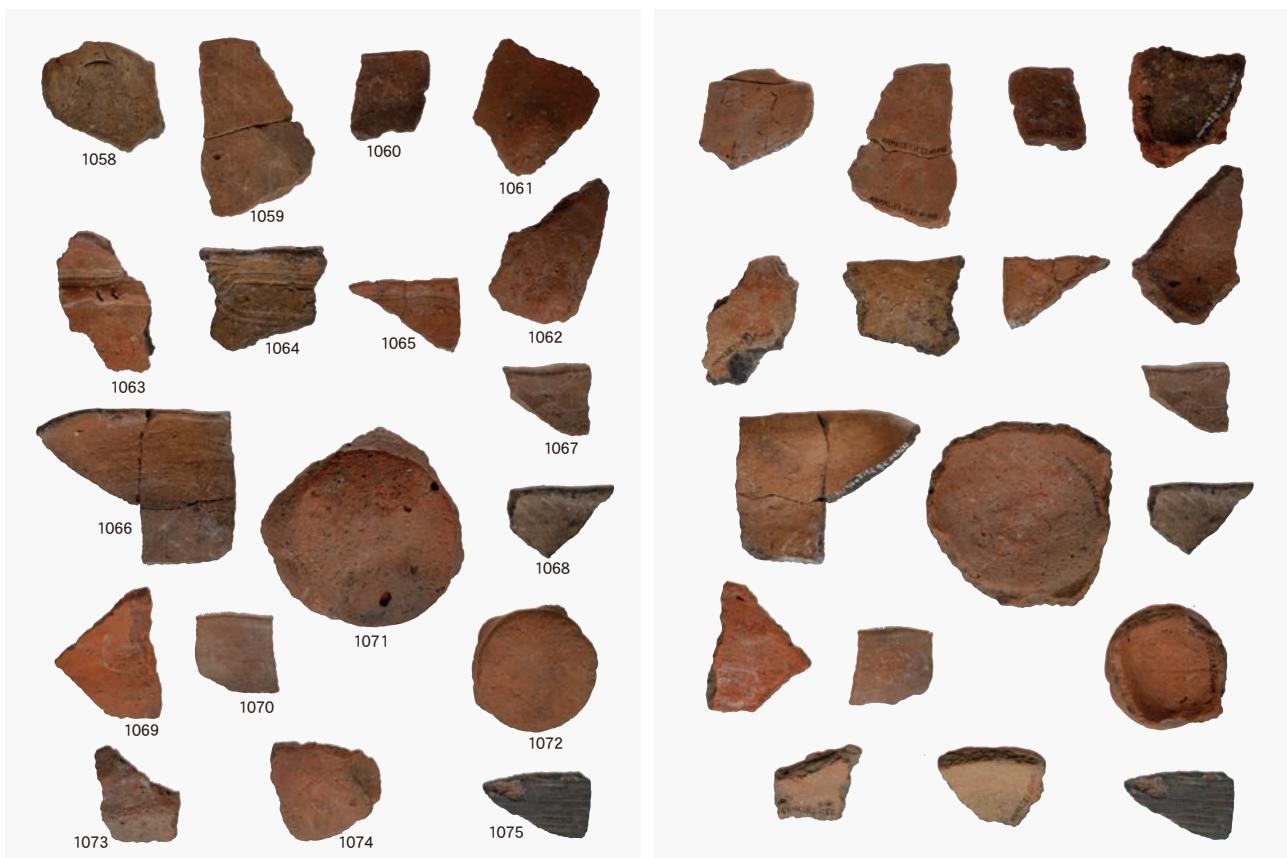


2. I 地区 SK90 出土遺物

図版 6 I 地区出土遺物



1. I 地区遺構覆土出土遺物



2. I 地区遺構出土遺物 1

図版 7 I 地区出土遺物



1. I 地区遺構覆土出土遺物 2



2. I 地区遺構出土遺物 3

図版 8 I 地区出土遺物



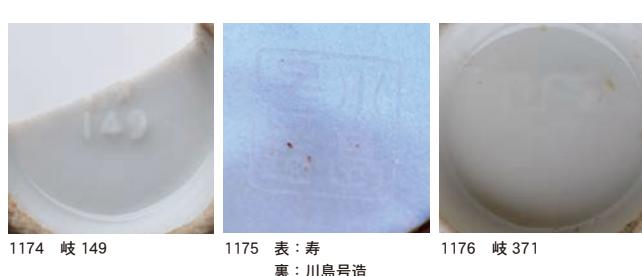
1. I 地区遺構覆土出遺物 4



2. 統制陶器



4. T-19 出土石材

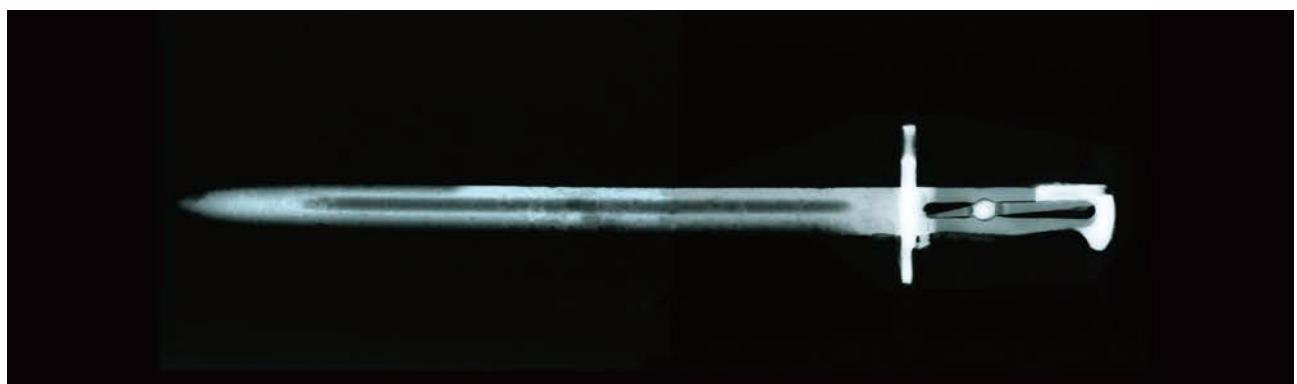


3. 同左上 (2. 統制陶器) 底部裏面

図版 9 I 地区出土遺物



1. 第 22 図 1035



2. 第 22 図 1035 X線写真



3. 第 27 図 1167

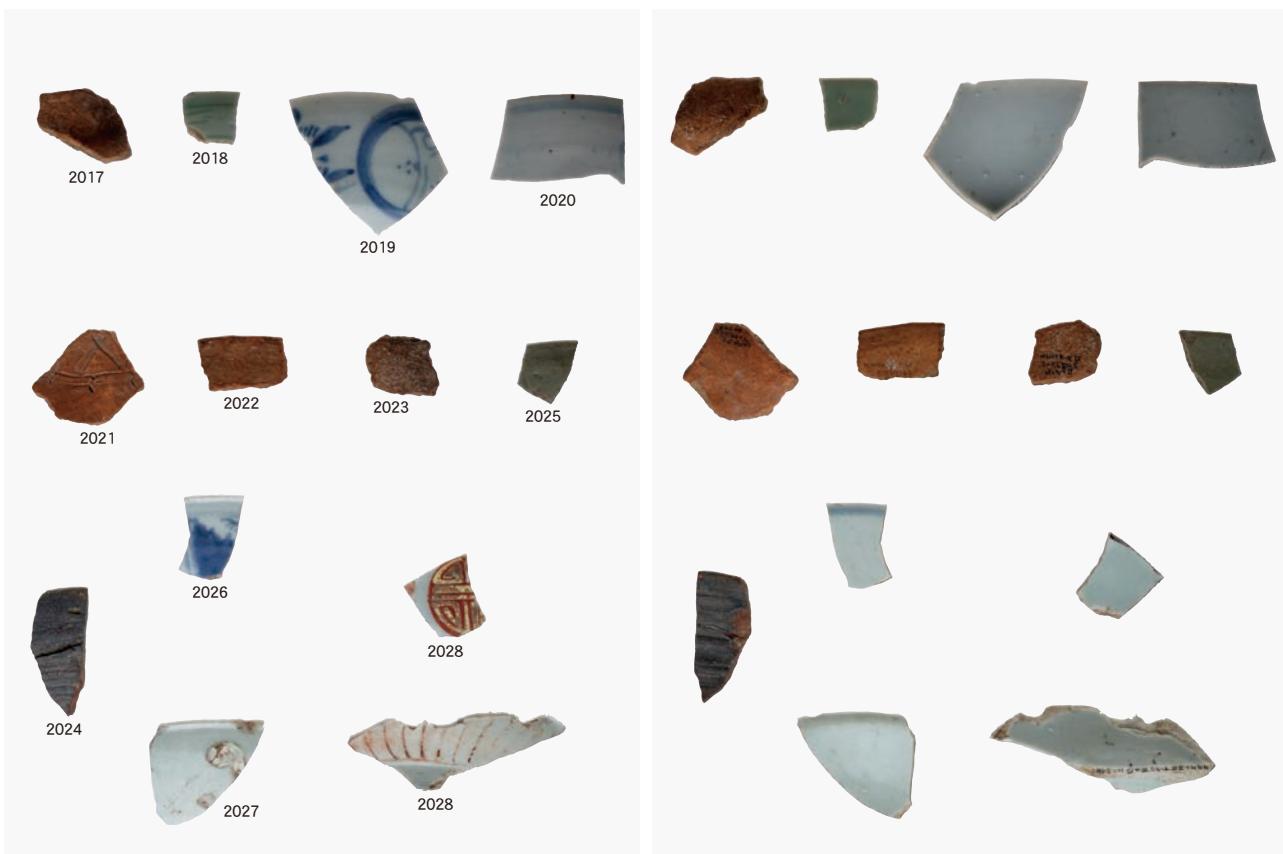


4. 第 27 図 1167 X線写真

図版 10 I 地区出土銃剣

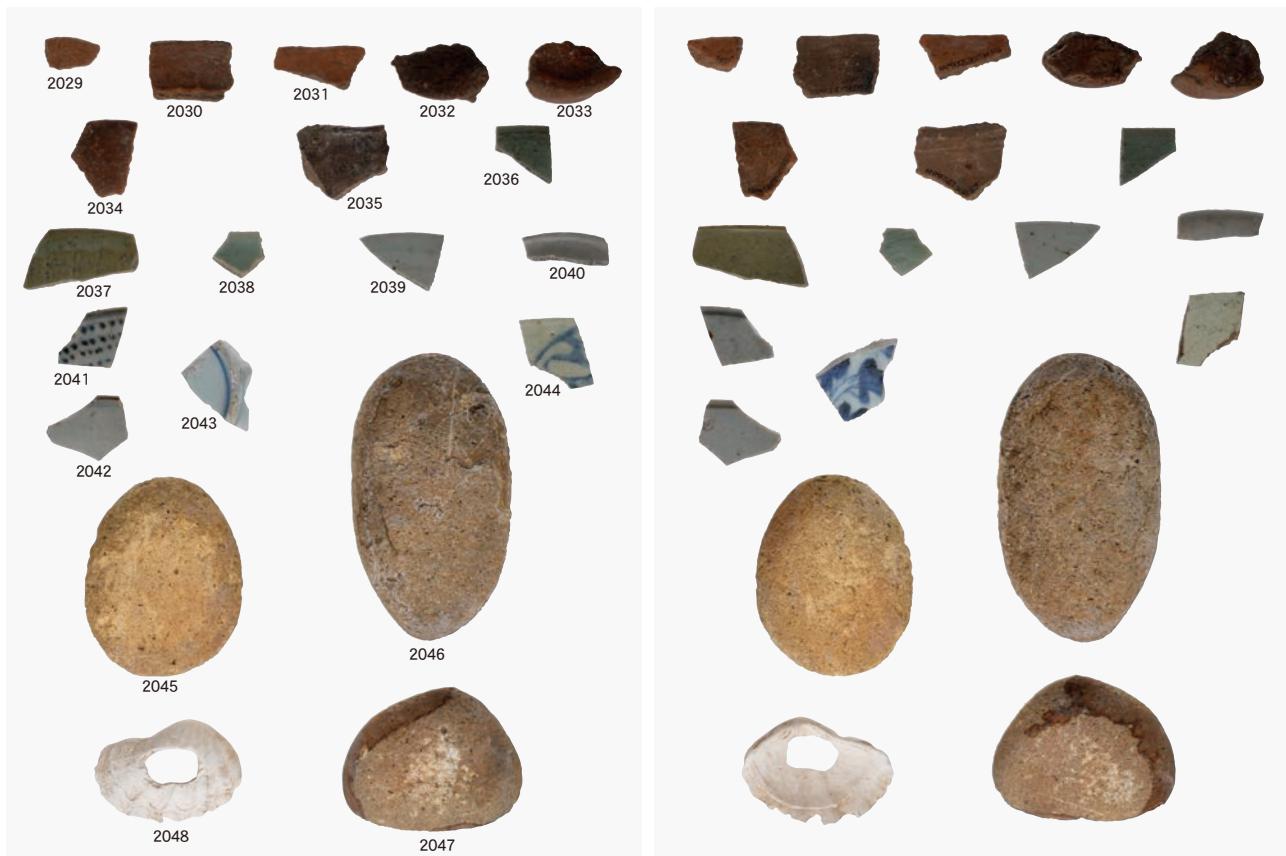


1. V/W-55/56 グリッド出土遺物



2. T-52、T-55 グリッド出土遺物

図版 11 II 地区出土遺物

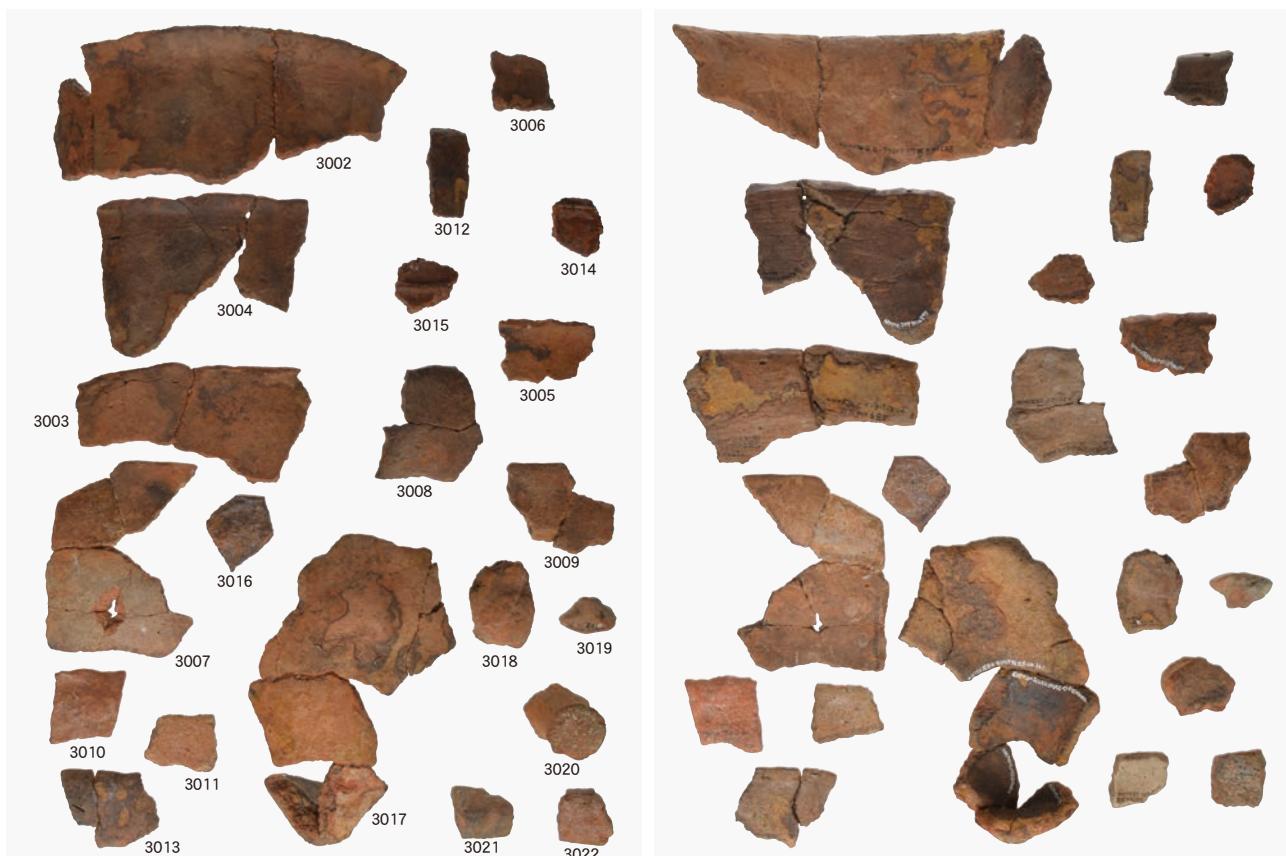


1. T-57/58 グリッド出土遺物

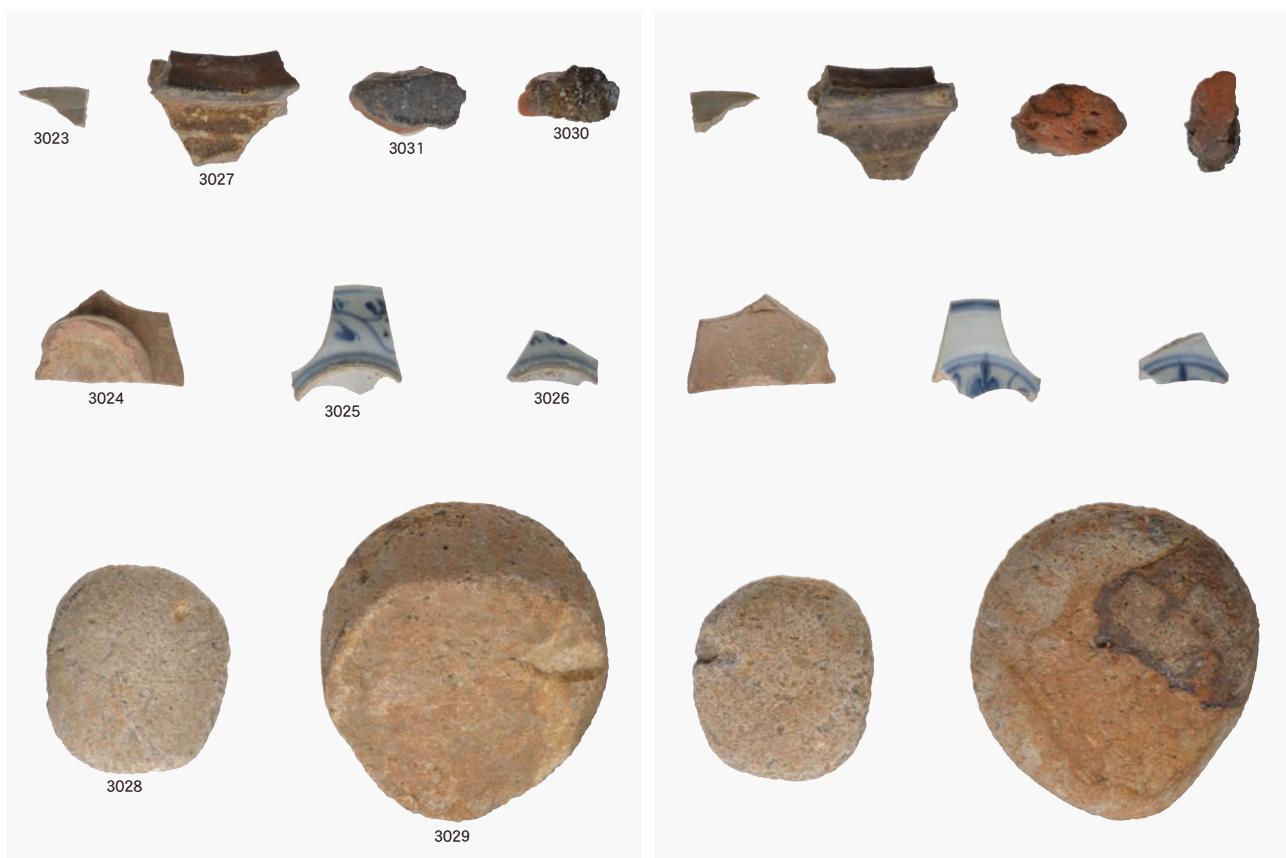


2. III地区 SD131-1 出土遺物

図版 12 II地区・III地区出土遺物



1. III地区出土遺物 1



2. III地区出土遺物 2

図版 13 III地区出土遺物

報告書抄録

ふりがな	みぞばるかいづか 2							
書名	溝原貝塚 2							
副書名	市道山手線街路事業に伴う溝原貝塚緊急発掘調査							
卷次								
シリーズ名	名護市文化財調査報告書							
シリーズ番号	24							
編著者名	千田寛之、宮城弘樹、宮城智浩、真栄田義人、寄合龍己、樋泉岳二、小畠弘己、パリノ・サーヴェイ株式会社							
発行機関	名護市教育委員会 文化課 文化財係							
所在地	〒905-0021 沖縄県名護市東江1-8-11 (名護博物館内) TEL 0980-53-3012							
発行年日	西暦2015年2月27日 (平成27年)							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	。 . .				。 . "
みぞばるかいづか 溝原貝塚	沖縄県 なごし 名護市 あがりえ 東江	47209	NNMK	26° 35' 09"	127° 59' 11"	2013.06.24 ～ 2014.02.28	1,644m ²	道路整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
溝原貝塚	貝塚 遺跡 近代建物跡	貝塚時代後期、 グスク時代、 近世、近代	炉跡、土坑、 溝状遺構	土器、石器、陶磁器、 獸骨、植物遺体				
要約	本報告書は、平成25年度に実施した市道山手線街路事業に伴う溝原貝塚緊急発掘調査の内容を記録したものである。調査範囲の大部分は近現代の開発に伴う破壊を受けていたものの、一部に炉跡や溝状遺構等の特徴的な遺構を検出することができた。出土遺物については貝塚時代後期土器、グスク土器のほか、中国産磁器、本土産陶磁器、沖縄産陶器などが回収されている。また、ブタ3体およびイヌ1体の獸骨に加え栽培植物遺体も僅かに検出されており、先史・原史時代の人々の生活の一端を伺い知ることができる。							

溝原貝塚2

－市道山手線街路事業に伴う溝原貝塚緊急発掘調査－

発行年 平成27(2015)年2月27日

発 行 名護市教育委員会

編 集 名護市教育委員会 文化課 文化財係
〒905-0021 名護市東江1-8-11 (名護博物館)
TEL 0980-53-3012

印 刷 沖縄高速印刷株式会社
沖縄県南風原町字兼城577
TEL 098-889-5513
